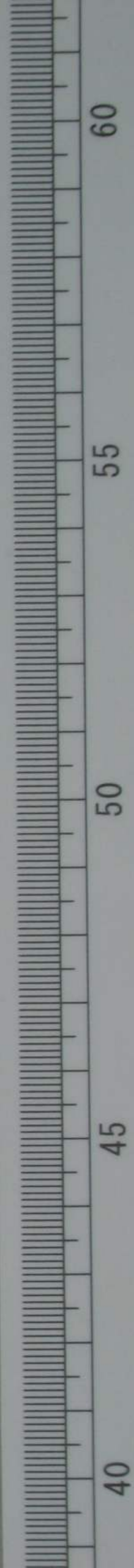




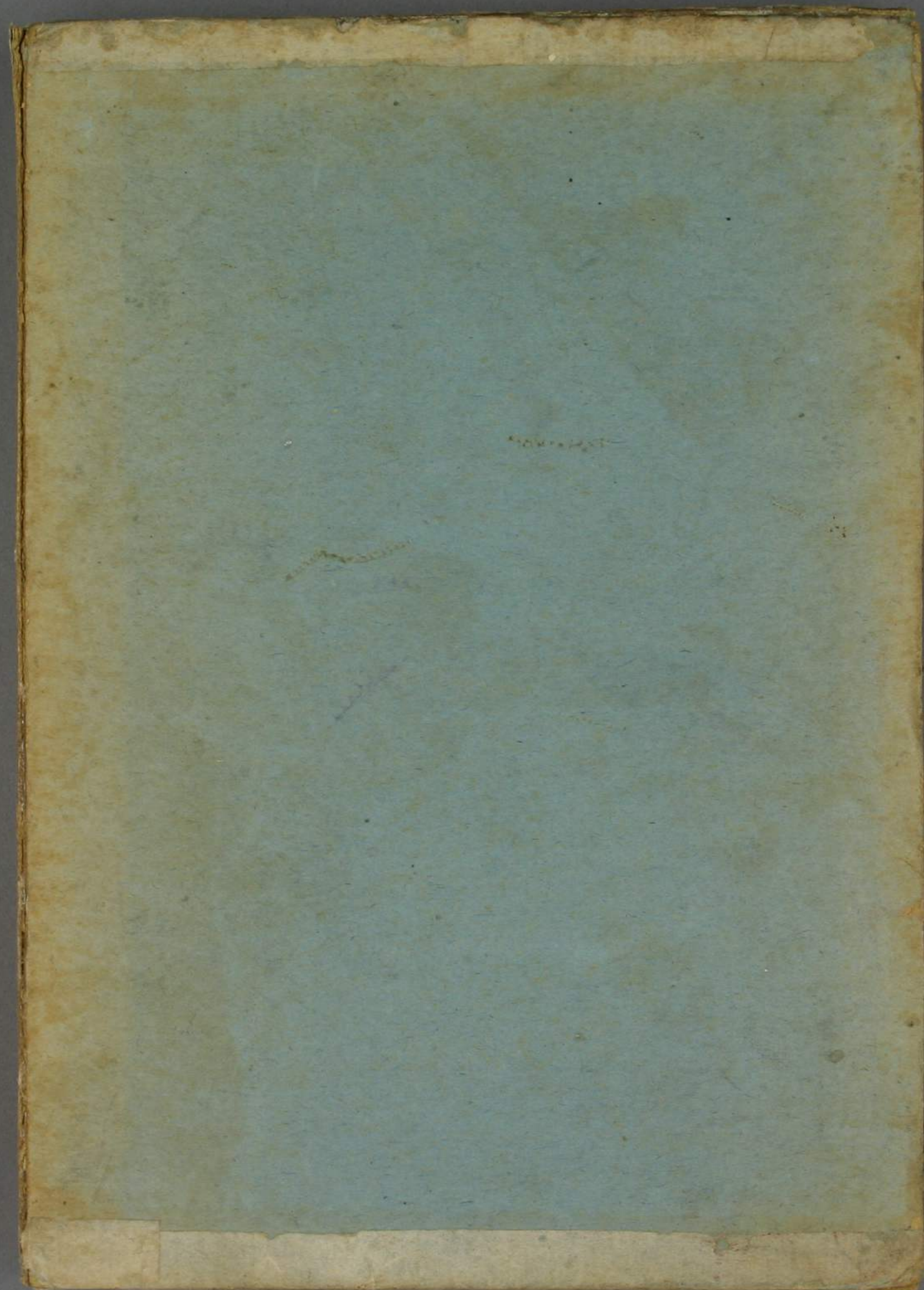
人の形の家

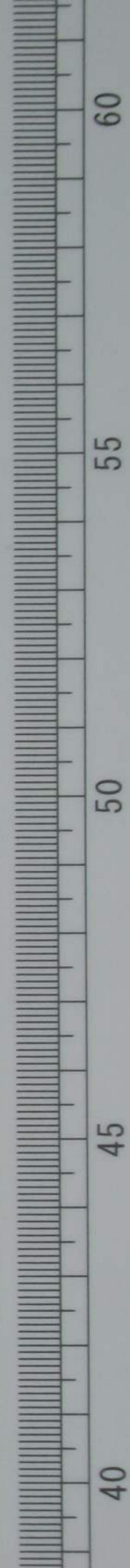
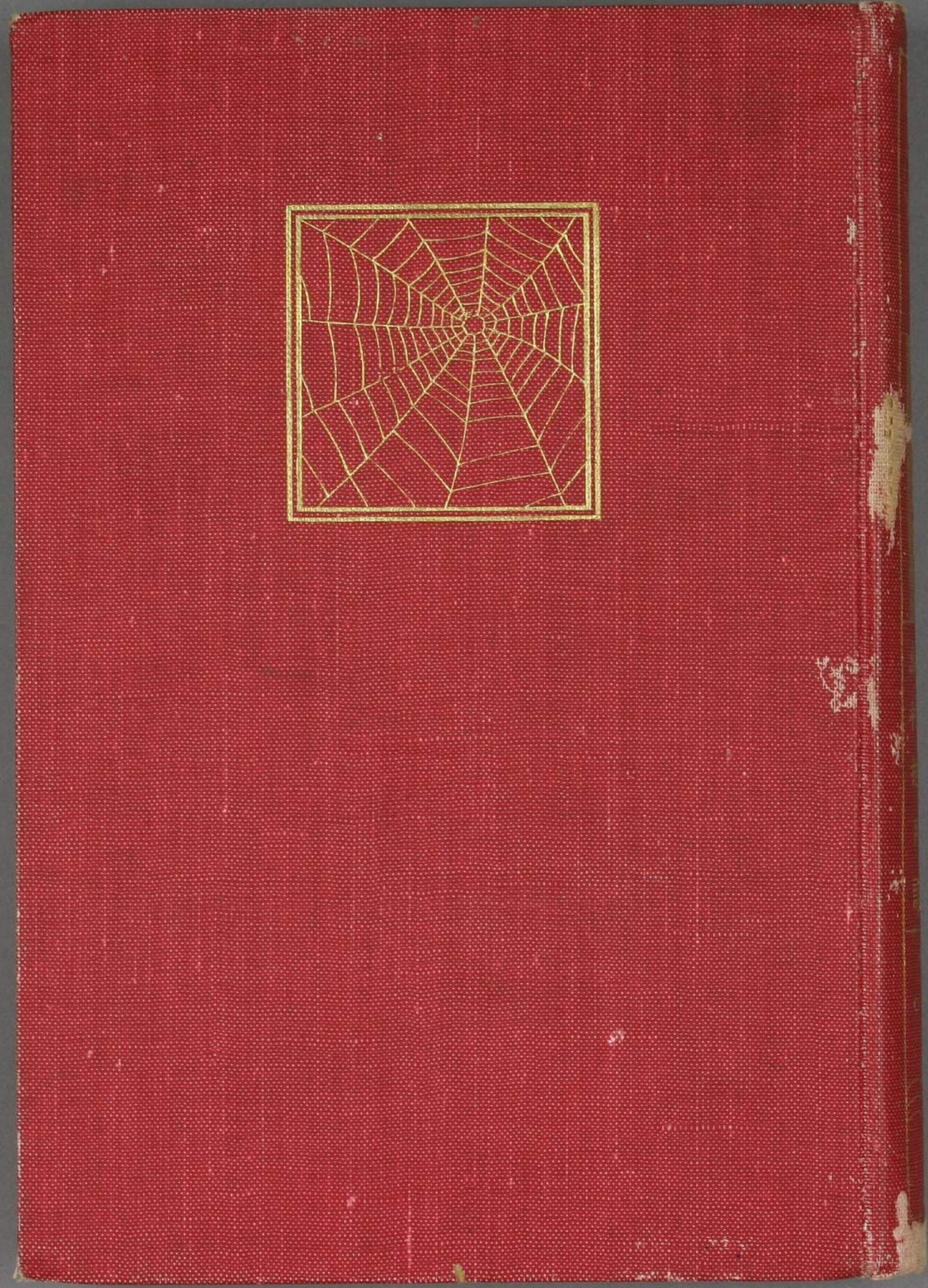
(ラノ)

島村抱月譯



人形の家



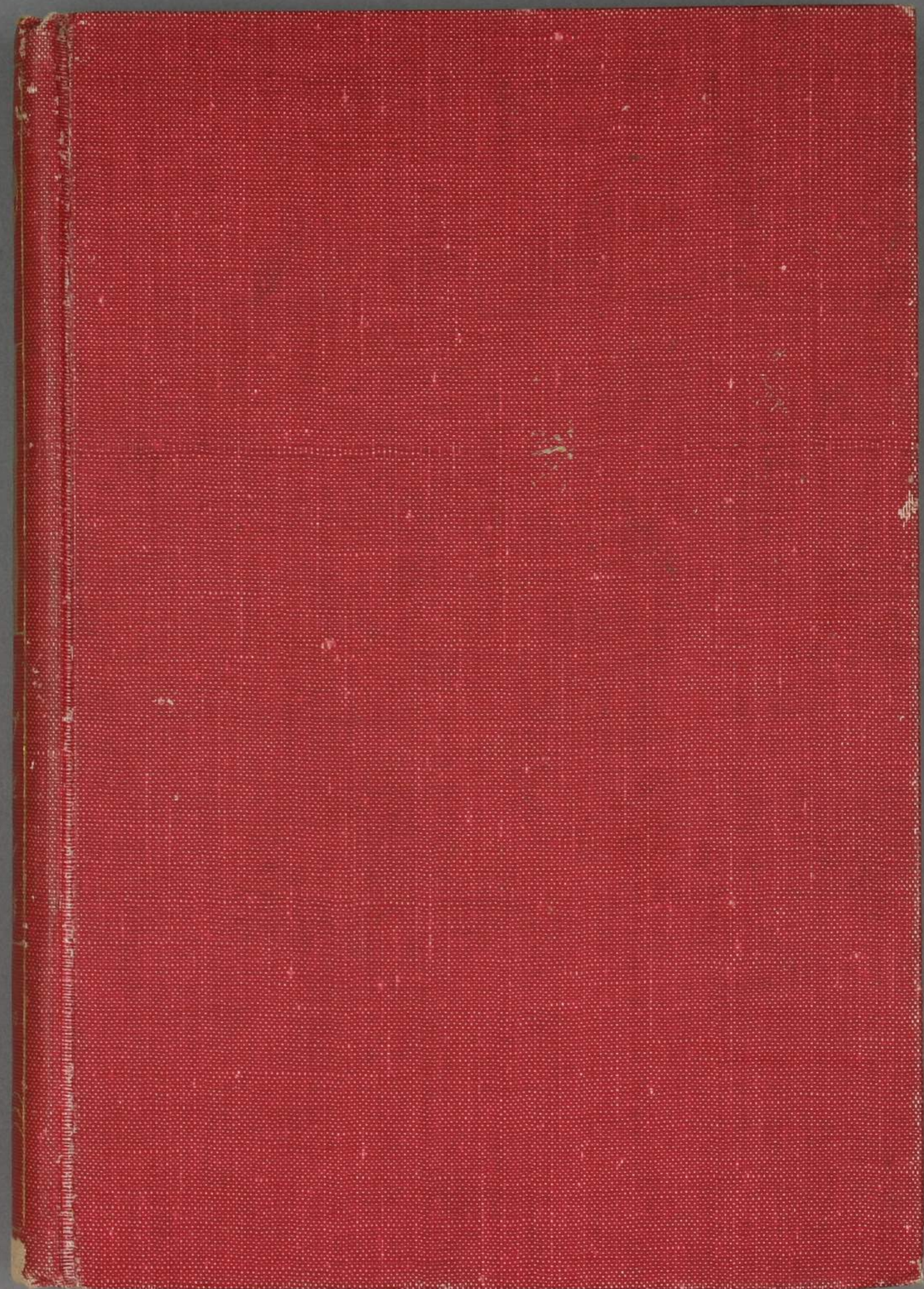


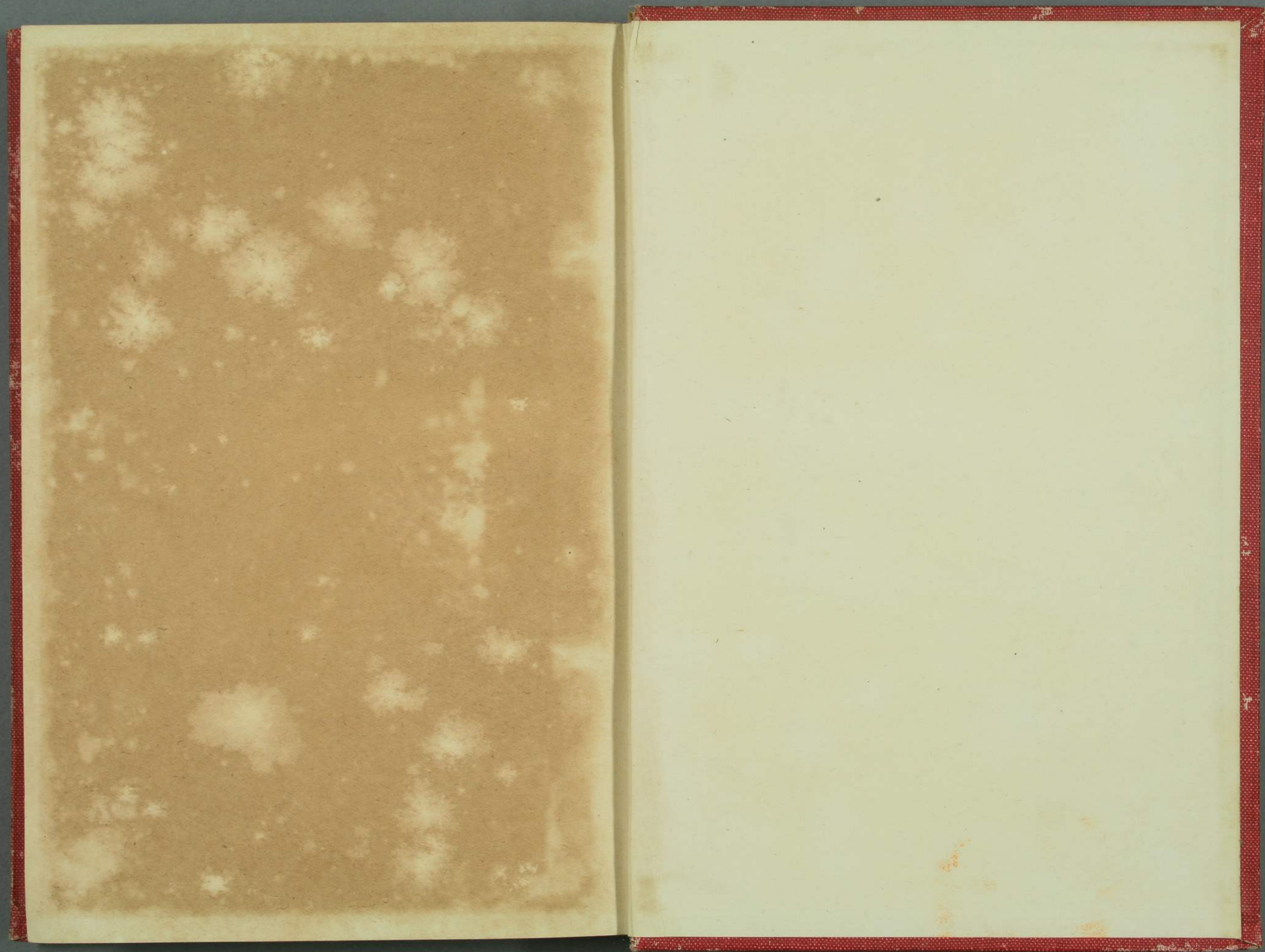


人形の家

イブセン作  
伊村抱月譯

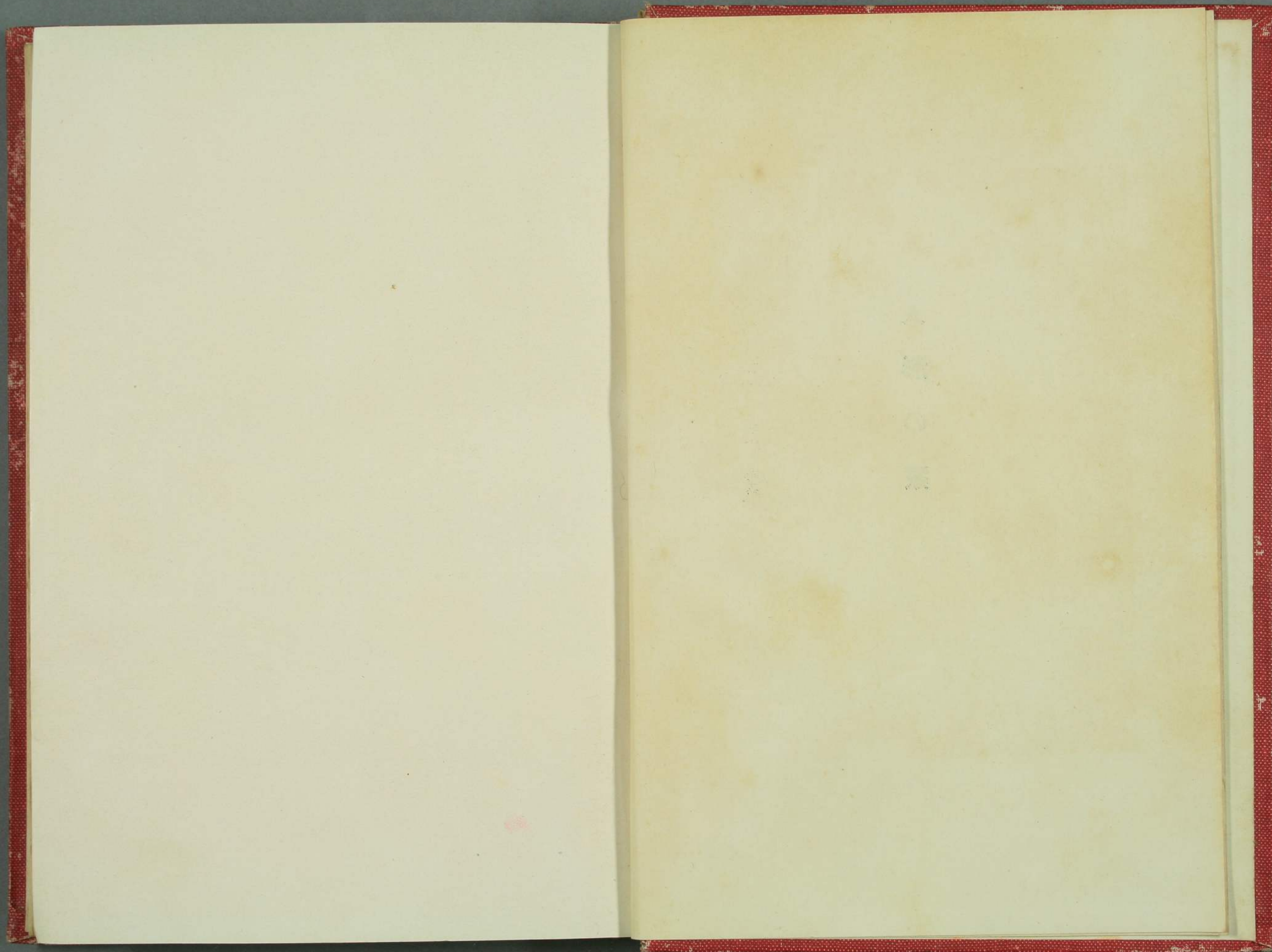






人形の家





美術家 森田 信

人の形の家

森田 信 著



行啓社出版 昭和九年



---

集作傑ンセブイ

---

# 家の形人

譯月抱村島



---

行發部版出學大田稻早

---



人形の家

著者目録



### 緒言

(一)

『人形の家』の作者ヘンリック・イブセン(Henrik Ibsen)は西暦千八百二十八年三月二十日、ノールウェーのスキーンといふ小都會に生まれ、千九百六年五月二十三日、七十九歳で同國の首府クリスチアニアに死んだ。彼の生涯中三十七歳から六十三歳まで、人生の最盛期二十七年間は、本國に意を得ないでドイツ、イタリア等に飄泊の生活を送り、『ブランド』以下『ヘッダ、ガブレル』に至る十餘篇の劇を其のあひだに作つた。彼れの著作目録は

『カチリーナ』(Catilina—1850)

『勇士の墓』(Kjæmpehøjen = The Warrior's Tomb—1851)

- 『ノルマ、又は政治家の戀』(Norma eller en Politikers Kjaerlighed = Norma or a Politician's Love—1851)
- 『聖ジョンの夜』(Sancthansnatten = St. John's Night —1853)
- 『オエストラアトのインゲル夫人』(Frø Inger til Oestrat = Lady Inger of Oestrat—1857)
- 『ゾルハウグの饗宴』(Gildet paa Solhaug = The Feast at Solhaug—1857)
- 『オラフリリョクランヌ』(Olaf Liljekrans—1857)
- 『ヘルゲランドの海豪』(Hærmændene paa Helgeland = The Vikings at Helge-land—1858)
- 『戀の喜劇』(Kjaerlighedens Komædie = Love's Comedy—1862)
- 『僭望者』(Kongsemmerne—The Pretenders—1894)
- 『ブランド』(Brand—1866)

- 『ニヘルギンナ』(Peer Gynt—1867)
- 『青年同盟』(De Unges Forbund = The League of Youth—1869)
- 『皇帝とガリマン人』(Kejser og Galileo = Emperor and Galilean—1873)
- 『社會の柱』(Samfundets Støtter = The Pillars of Society—1877.)
- 『人形の家』(Et Dukkehjem = A Doll's House—1879)
- 『幽霊』(Gengangere = Ghosts—1881)
- 『人民の敵』(En Folketjende = An Enemy of the People—1882)
- 『鴨』(Vildanden = The Wild Duck—1884)
- 『ロスマルスホルム』(Rosmersholm—1886)
- 『海の夫人』(Frøen fra Havet = The Lady from the Sea—1888)
- 『ヘッダ、ガブレン』(Hedda Gabler—1890)
- 『建築師』(Bygmester Solness = The Master Builder—1882)

『幼きエイヨルフ』(Lille Eyolf = Little Eyolf—1894)

『ジョン、ガブリエル、ボルクマン』(John Gabriel Borkman—1897)

『我等死者の醒むる時』(Nar Vi Dode Vagner = When We Dead Awaken—1899)

『詩集』(Digte—Poems—1870)

イブセン詩集

イブセン書簡集

イブセン演説及新書簡集

イブセン草稿集

此等の作の中でも、殊に其の現代の社會を描いた劇に於て、イブセンは近代劇の父となり王となつたのである。

(二)

『人形の家』と言へば、誰れでもすぐ婦人問題といふ事を想ひ出す。イブセンの社會劇は多く問題劇で、『人形の家』はすなはち婦人問題を材料にした劇であるといふ。そして問題を藝術にするのが善いとか悪いとかいふ論争がそれに伴ふ。けれども要するに此論争は無用である。すべての劇が問題劇でなくてはならないといふ理由もない。劇が藝術と一つの劇が問題劇であつてならないといふ理由もない。劇が藝術としての目的は我々の生命を衝き動かす所にある。それさへあれば、其の方法となり、材料となるものが社會問題であるとか否とは問ふところでない。『人形の家』には婦人問題が材料として用ひられてゐる。婦人の解放、婦人の獨立、婦人の自覺、男女對當の個人としての結婚、戀愛を基礎とした結婚、といふやうな問題が含まれてゐる。その爲め此の劇が單なる藝術の力以外に廣く世間を刺戟したことは否まれない。エド

マンド、ゴッス氏が其の『イブセン傳』(“Ibsen” = Edmund Gosse)の中で

『人形の家』はイブセンが始めての無條件的成功の作である。嘗に世間一般の議論を惹き起した最初の作であるのみならず、其の仕組及び描寫法に於て、イブセンが撓まざる現實的作家としての新理想を發揮した點で、其の以前の作よりも遙に進んでゐる。アーサー、シモンズ (Arthur Symonds) 君が「人形の家はイブセンの劇中傀儡をあやつる針金の用ひられなくなつた第一の作である」と言つたのは當つてゐる。一步を進めては、此の針金の用ひられなくなつた第一の近代劇であるとも言へる。固よりまだ其の後の作の如く完全の描寫法とは言へない。事件の湊合せられる距離が恐ろしく短くて、初めの幕の邊では、巧みに面白く出来てはゐるが、まだ餘程實人生の不可避性と遠ざかつてゐる。併し驚くべき最後の幕に於て、ノラが出て行く

支度をして寢室から立ち出で、ヘルマーと見物とを驚倒せしめる所悶へてゐる夫婦が卓を圍み面と向つて對決する邊に來ると、人をして始めて始めて、劇壇に新しきもの生れたりといふ感を起こさせる。同時に所謂「うまく作つた芝居」は、俄然としてアン女王の死のやうに死んで了つた。凄愴なまでに生の力の強烈に見はれてゐることは、此最後の幕に於いて驚くばかりである。昔のめでたい終局は始めて全然拋棄せられ、人生の矛盾が少しの容赦もなく出て來た。『人形の家』が非凡の演劇であつたことをあんなに突然認められたのは珍らしい事である。ノラの「獨立宣言」は全スカンヂナヴィアに響き渡つた。人々は毎夜々々興奮して顔蒼ざめ、議論をしたり、喧嘩をしたり、喰つてかゝつたりしながら劇場を出た。

と言つてゐるのは、以て、此の劇がはじめてイブセンの本國で演せられ

た時、世間の問題を刺戟したことの如何に激烈であつたかを想見するに足る。嘗にスカンヂナヴィアのみならず、歐洲の諸國にわたつて、近代の婦人問題を刺戟した、最も有力なものゝ一は此の劇である。問題劇としての効果はこれで遺憾が無いと言つてよい。

けれども、唯それだけでは藝術としての特権がない。その問題なり思想なりの奥から放射してゐるものがなくては、之れと似た効果を生ずる一場の煽動演説と何の區別もないことになる。藝術の力はもつと根柢から發するものでなくてはならない。そもくそれがあればこそ、一篇の『人形の家』もあれ程の刺戟力を有し得たのである。

藝術の奥から放射してゐるものは生命の光りであり、生命の熱である。藝術は生命の沸騰そのものである。

生命の沸騰は其の個人の全人格に震動を與へて、そこに思想感情の深

い覺醒を生ずる。殆ど思想であるか感情であるか分らないほど深い奥な心持を経験する。假りに之れを説明して言へば、人生を如何にすべき「我が生を如何にすべき」といふやうな、まだくしい心持である。

此の心持の中には、社會問題でなく、人生問題が包まれてゐる。人生觀の思想が暗示せられてゐる。すべての近代藝術は、此の意味に於いて思想藝術であり、問題藝術である。『人形の家』も先づ此の意味に於いて問題劇でなくてはならない。イブセンが千八百九十八年五月二十六日クリスチアニアのノールウヰー女權同盟の祝賀會で爲た演説に

「私は女權同盟の會員ではありません。私の書いたものには一として主張を廣めるためと意識して書いたものはありません。私は世間の人が一般に信じやうとしてゐるよりもより多く詩人で、より少く社會哲學者であります。皆さんの祝杯に對しては感謝いたしま



すが、ことさらに女権運動のために働いたものとしての名譽をば辭退するほかございません。私は一體女権運動のいかなるものであるかをすら、實際十分に明かにして居りません。私は之れを廣く人間の問題であると見ました。注意して私の著述をお読み下さつたら、この意味が分かるだらうと思ひます。固より女権問題も、他の諸問題と同じく、之れが解決は望ましいことではありますが、併しそれが目的の全部ではありません。私の仕事は「人間の描寫」といふことでありました。勿論、斯ういふ描寫が合理的に眞實だと思はれると、讀者は自分の感情や氣持をその詩人の作中に挿入して、それ等がみんな詩人のものであつた事になります。併しそれは間違ひです。すべて讀者は皆てんでんの人格に従つて、その作を非常に美しい、綺麗なものに作りかへて了ひます。嘗に作者ばかりでなく、讀者もまた

詩人なのでありまして、彼等は作家の助手であり、時としては詩人みづからよりも一層詩的なのであります。(下略)

と言つたのは、其の「人間の描寫」といふことで、人生問題を暗示する意味を述べたものと見られる。けれどもそれと同時に、婦人問題を婦人問題として材料に用ふることも、初めからのイブセンの計畫であつたことは明かである。千八百七十九年すなはち此の劇の出来る年の七月、ローマからゴッス氏に宛てて送つた手紙に

「小生は去る九月から家族と共に此地に居ります、そして大部分の時間には新に作りかけてゐる劇のことで塞いでゐます、もう間もなく出来上つて、十月には出版の運びになりませう。眞面目な劇で、近代の家庭状態、殊に結婚とからんだ諸問題を取り扱ふ、本當の家庭劇です」と書いてある。たゞこんな結婚問題、家庭問題、婦人問題を透して、其の

上に一段奥深い人生問題の氣持を加へたものと見ればよい。この種の思想なり問題なりは、藝術の中の粘着性となり眞實性となつて残留する。普通の娛樂的藝術には此の粘着性と眞實性が無い。感興藝術、情緒の遊戯、感情發散機關、これらの意味を有する娛樂的藝術と眞の藝術との間には、踰ゆべからざる、類の相違がある。

## (三)

『人形の家』の骨子となつてゐる落想は、早く十年前すなはち千八百六十九年の彼れの作『青年同盟』に見はれてゐる。傳記家イエーデル氏は更に之れを其の前の作『ペール・ギュント』に求めて、ヘルマーがノラに對する利己的性質は、ペール・ギュントがアニトラの愛に對する心持と同じであるとしてゐる(“Henrik Ibsen” — Jaeger)が、併し中心人物たるノラの方が

ら見た、婦人問題としての端緒はこゝに無い。やはり之れを『青年同盟』に尋ぬべきである。すなはち其の第三幕の終りで、ゼルマが夫のエーリック及び其の父と別れて家を出るところに

「ほんとうにまあ、私はあなたがたから残酷な目にあつてゐました！あなたがたみんな、一卑怯な！私はいつも貰ふことばかりで、一ついぞあげることがない。あなたがたの中にまじつた物貰ひのやうでした。私のところへ來て犠牲を出せとお求めなすつたことは一度もない。私は何をする事も出来ないものになつてゐました。私はあなたがたがいやになりました！あなたがたが憎くなりました！といふのはノラが「あなたは少しも私といふものを理解してゐらつしやらなかつたでせう？私は今まで大變不法な取扱を受けて居りました、第一は父からですし、其の次はあなたからですよ」といふのと同じで

ある。またゼルマが

「どんなにか私はあなたがたの苦勞や心配をたゞ一滴でもいゝから分けて貰ひたいと思つたでせう！けれどもそれを私が頼むと、あなたは笑つてお了ひなさる。私を人形のやうにくるみ上げて、兒供と遊ぶやうに私とお遊びなすつた。あゝ、私、どんなにかあなたと苦勞を一緒にしたいと騒いだでせう！どんなにか此の世の廣い、高い、強い事もしたいと、一生懸命ながけたでせう！(下略)」

といふのはノラが「私はあなたの人形妻になりました。ちやうど父の家で人形子になつてゐたのと同じことです。それから兒供がまた順に私の人形になりました。そして私が兒供と一緒に遊んでやれば喜ぶのと同じやうに、あなたが私と遊んで下されば面白かつたに違ひありません」といふ臺辭の前身と見るべく『人形の家』一篇の根原となつた

ものである。『青年同盟』の是等の句を讀んだブランドス(George Brandes)氏はイブセンにすゝめて、之れを展開すれば別に立派な大作が出来ると言つたと傳へられてゐる。併し直接此の作を刺戟した動機に關して、ゴッス氏の傳は斯ういつてゐる。

「一般に信せられてゐる所によると、千八百七十九年四月、イブセンはデンマルクの法廷におこつた一事件で、ジールランドの或る小さい町の、若い結婚した婦人がやつた事の話が聞かされた、それが彼れの心を新劇の計畫に引きつけたのである」

恐らくこの二つはどちらもあつたのであらう。

(四)

それから今一つはフランスの作家ヴリエール、ド、リール、アダンが千八

百七十年に作つた一幕劇で『謀叛』(“La Révolte” — Villiers de L'Isle Adam)と題するものである。フリックスとエリザベットと、夫婦きりの劇で、エリザベットは夫の打算的な性向に堪え得ずして、終に家を棄て去るが、併し間もなく歸つて來て、結末はめでたく收まる。其の中に下のやうなエリザベットの臺詞がある。

「分らない人ね、私は生きたいのですよ。誰れだつて生を樂みたいと思ふのが當然だとは思ひませんか？私、茲にゐると息がつまるやうですよ、もつと眞劔な事がほしいのですよ、廣い天の空氣が吸ひたいのですよ！あなたのお札が墓場へ持つて行けますか？どのくらゐ私たちは生きられるものだと思ひなすつて？（間を置いて、考へ込んで）生きる？——私、生きたいとさへ思ふか知ら？戀人！あなたさうおっしやつてね。お氣の毒さま、違ひます！戀人なんか私にはあ

りません、この後だつて決して持ちません。私は夫を愛するやうになつてゐました——御覽なさい——そして私が夫から求めたものは、ちらりとでもいゝから、人間の同情でした。それが今ではもう消えて了つて、愛の誇りなんか私の血管の中で氷りついてゐます。あなたは何も知らないで、氣を揉んでゐる間に、私の氣ちがひじみた嬉しさで永久にと思つて捧げるものを、塵芥のやうにひつたくつてお了ひなすつたのね。（下略）

そして彼の女が義務として爲すべき事をした結果はどうかといふと、たゞ彼の女の若さは亡ぼされ、彼の女の美しさは消え、貴い夕べは簿記帳によつて汚されたに過ぎない。彼の女はもう茲に残つて其の義務を果たす力を失つて了つた。是れから少しの自由を樂まなくてはならない、廣い地平線を見なくてはならない。それが爲に彼の女はとう

く夫と子供を跡にして出て行つた。取り残されたフェリックスは絶望して卒倒する。けれども次の場でエリザベットは夜明がたに歸つて來てゐる。

「もう遅かつた！——私にはもう氣力がなくなつてゐる。馬車の窓から夜の暗い中を覗いたとき、自由はいくら欲しくても、私の心は沈んで了つて、飄泊者といふ冷い<sup>つめた</sup>感じが身に泌みて來た。鉛の鎖で繋がれたやうな氣持(中略)何處へ行つていゝか分からなくなつて、冷たい朝の空氣に顫えて、私は歸つて來た(下略)」

といふとフェリックスは「御覽、私だつてつまりそんなに<sup>けだもの</sup>獸ではない」と言つて妻の手に接吻する。エリザベットはそれをじつと見おろして、悲しげに、「氣の毒な人！」といふのが終りである。妻が家を出る前後の様子や、其のあとでの夫の様子などまで、『人形の家』のノラとヘルマーとの

場合に、どこか似た所のあるのは事實である。けれどもイブセンが『人形の家』を書くとき『謀叛』を讀んでゐたか否かは知る由がないから、『人形の家』を『謀叛』から脱化し、若しくは『謀叛』に似せたものだとは言へない。證據のない限りは無關係なもの、暗合したものを見て置くのが至當である。イブセンがつい十年前に出た他人の作の外形を模倣する人とも思へないし、落想はすでに『謀叛』よりも早い自作の『青年同盟』に明かに其の端緒を見せてゐるのである。且つ『謀叛』は劇としての價値も到底『人形の家』に及ばない。その滑かな饒舌の臭を帯びた臺詞も古いし、感情の誇張、粗大な所も古い。やはりイブセン以前の物といふ感じを免れない。劇の結末は兩者全く相違してゐるのは言ふまでもないが、『謀叛』の結末は、『人形の家』のノラが家を出たきりで其の後何うなるであらうかといふ問題をあとに残してゐるのに比して、答を與へた

趣がある。けれどもそれは、エリザベットが悟りを開いて満足して歸つて來たのでなく、たゞ自分にはもう解決の氣力が無くなつたといつて悲しく歸つて來たのであるから、實は答でなくして、問題はそのまま残つてゐるのである。

## (五)

それに比べれば、イブセンが通俗趣味に強要せられて結末を變更した、有名な改作の『人形の家』では、親子の愛といふもので解決を與へて、問題を問題としないうちに揉み消して了つた。今其の改作された結末を譯載すると、本書二、三、六頁の四行目以下が次のやうに變はる。

ノラ 二人の仲が本當の結婚にならなくてはなりません。左様な  
ら！

ヘルマー しかたがない——行け！(ノラの手を把つて) 併しその前に子供にあつて暇乞をしなくちやいけない！

ノラ 放して下さい！私、子供にはあひませんよ！つらくてあへないのですもの。

ヘルマー (左手の戸の方にノラを押しやり) あはなくちやいけない！

(戸を明けて靜かに云ふ) あれを御覽、子供等は何も知らないで、すや

く眠つてゐる。明日目をさまして、母の跡を慕ふ、その時はもう

——母なし子。

ノラ (顔へながら) 母なし子！

ヘルマー ちやうどお前もさうであつた。

ノラ 母なし子！(堪えかねて旅行鞆を落とす) あゝ、私、自分にはすまないけれど、このまゝ振りすてゝは行かれない (戸の前に半ば體を

沈める)

ヘルマー (喜ぶ、優しい聲で) ノラ!

(幕)

斯ういふ改作が原文の精神を破壊して淺薄なものにして丁ふことは云ふまでもない。であるから、イブセンは已むを得ずして書いた此の改作に關し、次のやうな手紙をヴァインの一劇場監督者ハインリヒ、ラウ  
ク(Heinrich Laube)に送つた。

千八百八十年二月十八日、ミュンヘンにて

拜啓——小生の近作『人形の家』が令名ある貴下の監督の下に「ヴァイン市劇場」にて開演せられ候由承り大悦罷在り候、

貴下はこの劇が其の結末の彼れが如くなる故を以て正當に所謂「劇」の法則に合ひたるものに非ずとの御意見の由、併しながら、貴下は眞に法則といふが如きものに多くの價値を置かれ候哉。小生の考に

ては、劇の法則は如何やうにも變せられ得べく、法則をして文藝上の事實にこそ従はしむべけれど、逆に文藝をして法則に従はしむべきものに非ずと信じ候。此の劇が現在のまゝの結末にてストックホルムに於いても、グリスチアニアに於いても、コーペンヘーゲンに於いても、殆ど空前の成功を收めたるに徴して、此の理は明かと存じ候。結末を變更したる作は、小生が之れを必要と認めたるがためには無之、たゞ北ドイツの一劇場監督者と、同地方の巡廻興行にてノラに扮する一女優との求めに由りたるものに候。右改作の寫し一部こゝに御送附申上候。御覽の上、かゝるものを用ふるは徒らにこの作の効果を弱むるに過ぎざることを御了知下されたく、希望の至に御座候。小生は貴下が必ずこの劇を原形のまゝにて御演出下され候ことと信じて疑はず候。頓首。

尙こんな改作をせざるを得なかつた事情に就いては、デンマルクの『ナ  
チヨナル、チデンデ』紙に寄せた、次のやうな書簡がある。

千八百八十年二月十七日、ミュンヘンにて

記者足下——尊敬する貴紙第千三百六十號に於て拜見せしフレン  
スブルグよりの一書面によれば、『人形の家』ドイツにては『ノラ』は彼  
の地にて劇の結末を變更して演ぜられ、其の變更は明に小生の言ひ  
つけにて爲されたるものと有之候。此の末文は事實に無之候。『ノ  
ラ』の發行せられて間もなく、之れが翻譯者にしてまた北ドイツの諸  
劇場に對する小生の事務監督者たるベルリンのザルヘルム、ランゲ  
(Wilhelm Lange)氏より書面まゐり、それによれば、此の劇の結末を變更  
したる一翻案が發行せらるゝの恐れあり、さすれば、北ドイツの諸劇  
場中には多分其の方を選びて興行するものあるに至るべしとの事

に候ひき。

斯かる出來事を防がんとため、小生は絶對的に必要なる場合を慮り、結  
末の場を變更したるものをランゲ氏まで送附いたし候。即ちノラ  
は家を去らずして、無理にヘルマーに連れられ、子供等の室の前に來  
たり、ちよつとしたる臺詞ありて、戸のところにくづおるゝ、幕下ると  
いふ場面に御座候。

此の變更は、小生みづから、翻譯者まで書面にて申遣はし候通り、この  
劇に對する「野蠻なる暴行」として呪ひ居り候。この改作の場面を用  
ふるは全然小生の意志に背きたるものに御座候。ドイツ劇場の多  
くは之れを用ひざるべしと信じ候。

ドイツとスカンデネヴィアとの間に文學上の便宜の存せざる限り、我  
々スカンデネヴィアの作家は當國の法律の保護を受くる能はず、ドイ



ツの作家のスカンヂネヱアに於けるも亦た同様に御座候。従つて小生等の劇は、ドイツに於いては、翻譯者、劇場支配人、舞臺監督者及び小劇場の俳優等が暴行に委せられ居り候。小生の作が此の危険に瀕する場合には、小生は經驗の教ゆる所により、暴行を小生みづから行ひて、以て一層不注意未熟なる人々の手に取扱はれ翻案せらるゝことを避け申候。頓首。

當時ドイツでは一般にノラが家を去るのを批難してゐた爲に斯やうな事が起こつたのである。

(六)

『人形の家』の結末に對する世間の批難は、多く「いくら自分の教育の爲だつて、妻が夫を棄て、家を出る法はない、殊に子供を棄て、出られる

ものではない、出た後のノラはどうするのだらう」といふのであつた。そこで、イブセンみづからの右の改竄をはじめとし、世間にも此の通俗的な要求を充たすために種々の作が『人形の家』を種にして現はれた。『後の人形の家』ともいふべき種類のものである。其の一は千八百九十年の『英國繪入雑誌』(“English Illustrated Magazine”)に出たウォルター・ビザントの『人形の家——及其後』(“The Doll's House—and After”—Sir Walter Besant)で、それによるとノラの娘とクログスタッドの伴とが大きくなつて結婚約束をする。ヘルマーはノラの去つた後亂酒漢のんたかになつて了ふ。クログスタッドは伴のこの結婚が不賛成で、ノラの娘の兄弟が書いた偽證で娘を恐喝し、娘はその爲に水に身を投げる。

またアメリカのイドナ、ダウ、チーニー夫人といふ女子參政權論者の女作家は、少しおかれて『ノラの歸參、ヘンリック、イブセンの人形の家』の後日

談』(“Nora's Return; a sequel to 'The Doll's House' of Henrik Ibsen” — Mrs. Edna Dow Cheney) と題する小冊子を著はした。これでは、ノラは家を出た後看護婦として教育せられ、コレラの流行に際してヘルマーがそれに罹つたのを看護するため、身分を隠して昔の自分の家に雇はれ、再び彼れの命を救つてやる。病氣が恢復しかけたとき、ヘルマーは看護婦姿のノラをそれと心づき、こゝにめでたく仲なほりして夫婦元どほりになるといふ筋であるといふ。

その他『人形の家』を滑稽の材料にしたバロデキの類では、千八百九十三年に出来た『ポンチ氏の袖珍イブセン』(“Mr. Punch's Pocket Ibsen” — F. Anstey)が最も有名で、『人形の家』のほかに『ロスマルスホルム』『ヘッダ、ガブレル』『鴨』『建築師』等の作りかへをも加へてある。

## (七)

是等は要するに眞面目に論すべきものでないが、妻として夫や子供を棄てる法はないといふ批難に對して、イブセンが作の上で一種の答辯を與へたものと評せられるのは、『人形の家』に續いて出た『幽霊』である。『幽霊』ではアルヴェング夫人が、放埒な夫を棄て子供を棄て、家を出やうとしたが、思ひ直して家に留り、家庭の罪惡を子供にも世間にも知らせないやうに、一身を犠牲にして之を糊塗してゐた。けれども最後になつて、愛子オスワルドは父の放盞の報ひを受けて無残の死を遂げ、一家悲惨の運命に終る。ノラもあの時決心を翻して家に留まつたとしても、それが決して幸福を齎らす所以ではない。といふ意味を此作に求めやうとするのである。

またノラとヘルマーと、對當の自覺ある個人として結婚したのでないやうな場合に、結局どうすればよいか。この問題に、イブセンが一の解釋を與へたものと言はれる作は、『海の夫人』である。此の劇では、エリダーが同じく不當の結婚を自覺し、それから脱して自由な神秘的な海の情人の方へ引つけられやうとする。已むを得ずして、夫おつとヴンダは、それでは自由にしてやるから、一切の責任をエリダー一人で負うて進退を決せよといふ。自己の自由を許され、責任を負はされて見ると、はじめて夫の家を去るのが自分の本望でないことが分かり、獨立した一個人として改めて夫や先妻の子供等と愛を誓ふ。先づ獨立した自由な一個人になる、其の上で本とうの愛が成りたつたら、そこに本とうの結婚も成り立つ、といふのが其の解釋である。

こんな風に、婦人の自覺問題、解放問題、結婚問題として殆ど論文を読むやうな態度で此等の作に對するのがイブセンの本意でないことは前に言つた通りであるが、それと同時に、其の奥から放射してゐる人間の光り、生命の熱ともいふべき力が、此等の問題と切り放ち難い關係を持つてゐることも明かである。此の點からいへば、『人形の家』『幽霊』『海の夫人』の三作は、相通じて一の哲學を成すとも見られる。

(八)

イブセンの死後、千九百九年に彼れの作の草稿が公にせられた。その中に『人形の家』もある。今その最後の草稿と思はれるものと完成した『人形の家』とを比較して見ると、種々の點に興味がある。其の草稿は『近代悲劇稿』と題し、千八百七十八年十月十九日、ローマにてとして、まづ下のやうな着想が書いてある。

精神上の法則に二種ある、二種の良心である、一は男子に、他の全く異なつた一は女子に。男子と女子とは互に理解しないで、實際の生活では、女子は男子の法則で判定せられる、恰も女でなくて男でゝもあるやうに。

この劇中の妻君は何が正で何が邪であるかの觀念を有しないで終る。一方には自然の感情、一方には權威に對する信念が、全然彼の女を歸趨に迷はしめる。今日の社會では女子は女子たることが出来ない、今日の社會は全然男性の社會で、法律は男が造り、男性の見地から女性の行爲を判定する裁判組織になつてゐる。

彼の女は僞署をした、そしてそれを誇りとしてゐる。夫おつとに對する愛から、夫の生命を救ふためにした事だからである。所がこの夫は平凡な名譽主義から法律と同じ立場に立つて、男性の眼からこの問題

を取扱ふ。

精神上的の葛藤。權威に對する信念に壓せられ眩惑せられて、彼の女は子供を養育する道徳上の權利と能力との確信を失ふ。苦惱。近代の社會では母は或種の昆蟲のやうに、種の繁殖の義務を果たすと、去つて死んで了ふ。生の愛、家庭の愛、夫や子供や家族の愛。そこに、に女らしい思想の破綻。心配と恐怖の突然の回歸。すべてそれを彼の女ひとりで持ちこたへなくはならない。大破裂が必然、不可避的に近づいて來る。絶望、煩悶及び破壊。

大體これだけの着想から、漸次それに具體的な形を與へて行つたものと見える。この着想の次には人物を列記して

シュテンボルグ。書記官。

ノラ。其の妻。

リンド嬢(夫人)。(未亡人)。

辯護士クログスタッド。

カーレン。シュテンボルグ家の嫁母。

シュテンボルグ家の女中一人

使の男一人

シュテンボルグ家の三人の子供

醫師ハンク

これで見ると、主人公のヘルマーといふ名はまだこの腹案には出てゐない。却つて領事の名が主人公の名になつてゐる。筋書及草案のそれが第三幕からヘルマーといふ名に變つてゐる。リнден夫人もリンドといふ名で、夫人だか、未亡人だか、娘だかまだ定まつてゐない。醫師ランクは醫師ハンクとなつてゐて、草案の第二幕からランクとなつ

てゐる。そこで此の人名の次に三幕に分けた略筋があり、それから本文の草案になつてゐるのであるが、略筋によると、第一幕では、重大な色どりになる醫師ランクがまだ出て來ないで、第二幕から出て來る。草案ではもう第一幕から現はれる。またノラがパン菓子を喰ふことは略筋にも草案にも無い。従つて此の劇の第一幕で最も輕快な味のあつた場面、ノラがリнден夫人とランクを相手に「ランク先生、パン菓子を召し上りませんか」と其の口に菓子を入れてやる邊から「馬鹿つ！と言つたらどんなにいゝ氣持でせう？」の所などが草案にはまだ全く缺けてゐる。

(九)

また『人形の家』の色彩の中心になつてゐるタランテラ踊(タランテラ踊

はイタリアの毒蜘蛛タランチュラに刺されたものが、筋肉の痙攣を起こして舞踏するやうな様子をして苦しむところから、其の形に似た踊の名となつたものだと言ひ傳へられてゐる(のことは、略筋にも草案にも全く出てゐない。完成本に始めて見はれて来る。従つて第二幕の如きは、殆どすべて完成本で見るとやうな面白い場面を逸してゐる。結末、ノラが狂亂的にタランテラを踊つてヘルマーを引とある所は、其の代りに、ピアノをひいて、『ペール、ギユント』の中にめるアニトラの歌を唄つたり踊つたりするが、ランクとの對話でノラが踊りの衣裳を見せたり、絹の靴下でランクを打つたりする微妙な所はあり得ない。のみならずランクがノラに對して自分の心を打明ける前後から、ノラが「私にさう言つて下すつたのが悪いんです。おつしやる必要は無かつたのでせう?」といふ臺詞の邊、此の劇の挿話として最も趣味の深い一節が草

案ではまだ殆ど出来てゐない。

第三幕は草案と完成本と甚しく違つてゐない。こゝはノラをして婦人の自覺、解放を説かしめる所であるから、問題劇としては一篇の骨子にあたり、イブセンも恐く初から動かすべからざる腹案を持つてゐて書いたのであらうと思はれる。それでも所々肝要のところ、草案から完成本へと改善せられて行つた跡が見える。領事シュテンボルグの假裝舞踏會といふのもなくタランテラ踊もないから、ノラは夜會服を着た丈で、夫婦は子供の會へ行く。あのじみな家の中に花やかな踊子姿をしたノラが出て来てこそ、後の大破裂の場面との色どりもおもしろいのであるが、草案ではまだ其の考がついてゐなかつた。またランクが「此の次の假裝會には、見えないものにならうと思ふ」といふやうなよい場面も出来てゐない。

愈最後にノラとヘルマーとが對決するところ以下は、上にも言つた如く大體に於いて草案と完成本と同一であるが、例へばノラが「お許し下さつてありがたうございます」と言つて別室に這入り、人形の衣裳をぬぐのですよ」といふ所は、その「人形の衣裳をぬぐ」といふ事に全篇の意味と響應する象徴的な味があるのを、草案ではまだ「氣を落ちつけなくちやなりません、ちよつとの間」と極めて無意味に言はせてある。またヘルマーが「幾ら愛する者の爲だつて、男が名譽を犠牲には供しない」といふのに對して「それを何百萬といふ女は犠牲に供してゐます」といふノラの言葉は、男子の爲に犠牲となることを甘んじてゐた古今幾百萬の婦人に代つて發した、女子の公憤の叫びだと稱せられるが、草案ではたゞヘルマーが「お、ノラ、ノラ！」といふとノラが「それでどうなつたかといふと、お禮一つおつしやるぢやなし、愛の言葉一つ聞くぢやなし、私を

救つて下さる考なんか糸すぢほどもありはしない。たゞ叱り廻して——私の父まで嘲弄して——ちいほけな事にびく／＼して——犠牲になつてどうすることも出来ないでゐるものを、むごたらしく罵り立て、と正面から喧嘩口調で述べてゐる。之れを完成本の言葉に比べて、品位、含蓄の上に非常な差のあることは言を須たない。

斯んな風にして、着想から略筋、略筋から草案、それから完成した今日の『人形の家』と漸次精練せられたのが、草稿に見えた千八百七十八年十月といふ日附からでも一年の餘で、いよ／＼書物となつて始めて見られたのは翌千八百七十九年十二月四日、コーペーヘーゲンである。

## (十)

『人形の家』が初めて演ぜられたのは、デンマルクのコーペンヘーゲン

にある皇室座で、千八百七十九年十二月二十一日のことである。ノラを勤めたのがベッチー、ヘンニンクス(Frau Betty Hennings)といふ女優で、これが世界に於ける、この有名なノラ役者の最初の人である。ヘルマーに扮したのはエミール、ポウルゼン(Herr Emil Poulsen)であつた。スキーンデンのストックホルムでは翌千八百八十年一月八日戯曲座で開演し、ノールウエーのクリスチアニアでは同月二十日クリスチアニア座で開演した。スカンデネヴィア以外では、ドイツのフレンスブルグで千八百八十年二月に初めて演せられ、ミュンヘンでは同年三月三日レシデンツ座で演せられた。此のミュンヘンの興行に、初めてイブセンみづからも行つて見て、二幕目の終りで幕外に立つて喝采を受けたが、三幕目の終りでは見物の方から烈しい反對論が起こつたといふ。またこの興行の際、イブセンは殆ど稽古毎に出席し、公演の後すべての俳優に温情を以

て感謝したから、屹度申分のない演出だと思つたのであらうと信じてゐると、後日イブセンが知人に語つた所はさうでなかつた。俳優の或者は充分その役柄を理解してゐない、部屋の壁紙の色が望み通りの氣分を出してゐなかつた、ノラの手が適当な形をしてゐなかつた、といふやうな不満足な點を擧げてゐたといふ。

尙同年中にドイツのハムブルヒ、ドレスデン、ハノーヴェル、ベルリン等でこの劇が演せられ、それでノラを演じたヘドヴィヒ、ニーマン、ラアベ(Hedwig Niemann-Rabe) は、メルリンのドイツ座にゐたアグネス、ゾルマ(Frau Agnes Sorma)に先だつて、ドイツに於ける最代表的なノラの女優となつた。

ヴァインでは千八百八十一年九月はじめて演せられた。ロシアでは有名な女優モヂェスカ(Madame Modjeska)に依て千八百八十一年十一月ペテ



ルスブルグで、又翌年ポーランドのウォルソウで初めて演せられた。ハンガリーのブダペストでは千八百八十九年初演、オランダのアムステルダムでも同年初演、ベルギーのブリュッセルでも同年初演、但しこれがフランス語で演せられた最初で、結末はめでたい方に變更せられてゐた。パリで『人形の家』が公演せられたのは、ずつと後れて千八百九十四年四月二十日、ジムナーズで、女優レジャーン(Mme. Réjane)のノラのとかが初めてゐる。イタリアでは女優デューゼ(Eleonora Duse)が之れを演ずるやうになつた前、千八百八十九年チューリン市で初めて演せられ、セルヴァアでも同年にベルグレード市で初めて演せられた。

イギリスでは千八百八十四年三月三日ロンドンの王子座ではじめて『人形の家』の翻案が演せられた。是れは『蝶潰し』と題する三幕もので、かの有名な喜劇作者ジョーンズと、ハーマンといふ物語作者との合作

("Breaking a Butterfly" by Henry A. Jones and H. Herman, founded on Ibsen's "Norah")であつた。その、つまらないものであつたことは言ふまでもない。其の次が翌千八百八十五年三月、ロンドンの一素人劇クラブの催しで、初めて原作のまゝを私演したが、併し之れはあまり眞面目なもので、注意するほどのものでもなかつたといふ。イギリスに於ける眞の『人形の家』の初演は、ずつとおくれで千八百八十九年、アーチャー(William Archer)氏の翻譯が出来てからである。

アメリカの方はイギリスよりも早く、千八百八十三年十二月、かの女優モッヂェスカによつて、ケンタッキー州ルイズ、ヴァルで初めてノラをトラ("Thora")といふ題に變へて演じた。其の結末はめでたく收まるやうに出来てゐたと傳へられるが、ドイツで用ひたものに基いたのか、それとも別の脚色を加へたのかは、明かでない。

『人形の家』の英語に譯せられた初めは、原作の出た翌千八百八十年で、コーペンヘーゲンのヴェーベル(H. Weber)といふ人によつて『ノラ』と題して翻譯せられた。併し此の譯者は英語の力の足りない人であつたため、頗るまづいものであつたといふ。次に出た翻譯は千八百八十二年イギリスのロード(Miss H. F. Lord)といふ婦人が同じく『ノラ』といふ題で譯したものである。イブセンを大膽なる女權論者として見た序文がついてゐる。次はモッヂェスがアメリカの興行に用ひたもので、女優の夫や書記や其他の人々相寄つて譯したものであるといふ。

アーチャー氏の典據的な翻譯が出たのは千八百八十九年で、同年六月七日から二十九日までロンドンの新奇座で女優エチャーチの一座で演じた、その臺本の紀念出版である。このとき初めて英語で『エ、ドールス、ハウス』即ち『人形の家』と題せられた。併しもつと原名に忠實にするため

には『エ、ドール、ホーム』(“A Doll Home”)即ち『人形家庭』とすべきであつたと『イブセン演説及新書簡集』の編者キルドル(Arne Kildal)氏は言つてゐる。とにかく此の譯で『人形の家』の定本が出来たと共に、舞臺に演ぜられた者としても、初てイブセン劇の完全に近い者がイギリスに見られることゝなつた。此興行の重なる役割は下の如くであつた。

ヘルマー……………ハーバート、ウエヤリング(Herbert Waring)  
 ノラ……………ジュネット、エチャーチ(Miss Janet Achurch)  
 ランク……………チャールス、チャーリントン(Charles Charrington)  
 クログスタッド……………ロイス、カールトン(Royce Carlton)  
 リンデン夫人……………ジャートルード、ウォーデン(Mrs. Gertrude Warden)

(挿畫参照)

此の劇の第一夜で、イブセンは初めて眞にイギリスに其の文名を樹て

たと稱せられる。エチャーチはシェイクスピア劇を演じても有名な女優であつた。而してこの一座は、この興行を打上げると、すぐオーストラリアに航することゝなつて、オーストラリア、ニウジールランド、印度、エジプトと『人形の家』を演じて回つた。

以上の順序で、出版後十年前後のあひだに『人形の家』は歐米全土に廣まつて以て今日に及んだ。日本では明治三十四年高安月郊氏がはじめて之れを譯した。今茲に公にする譯本は、一旦明治四十三年一月の『早稲田文學』に掲げられたものに小訂正を加へたのである。此の譯はアーチャー氏の英譯とランゲ氏の獨譯とを基とした。

明治四十四年九月二十二日から三日間、文藝協會はその研究所の舞臺開を兼ねて、第一回私演に此の脚本を演じた。但しこの時は第一幕と第三幕のみで、中間の幕が省かれたため、劇全體としての印象は不完全

たるを免れなかつたが、それでも我が國に於いては新劇として殆ど前例のない程な成功を得、引きつゝいて同年十一月二十八日から一週間、同協會第二回公演として、帝國劇場で『人形の家』三幕全部を上場した。これが我が國に於ける『人形の家』の最初の興行であると共に、廣く近代劇としても、在來の女形と稱する男優を用ひず、女優を主として成功した眞面目な劇の最初である。その時の役割は

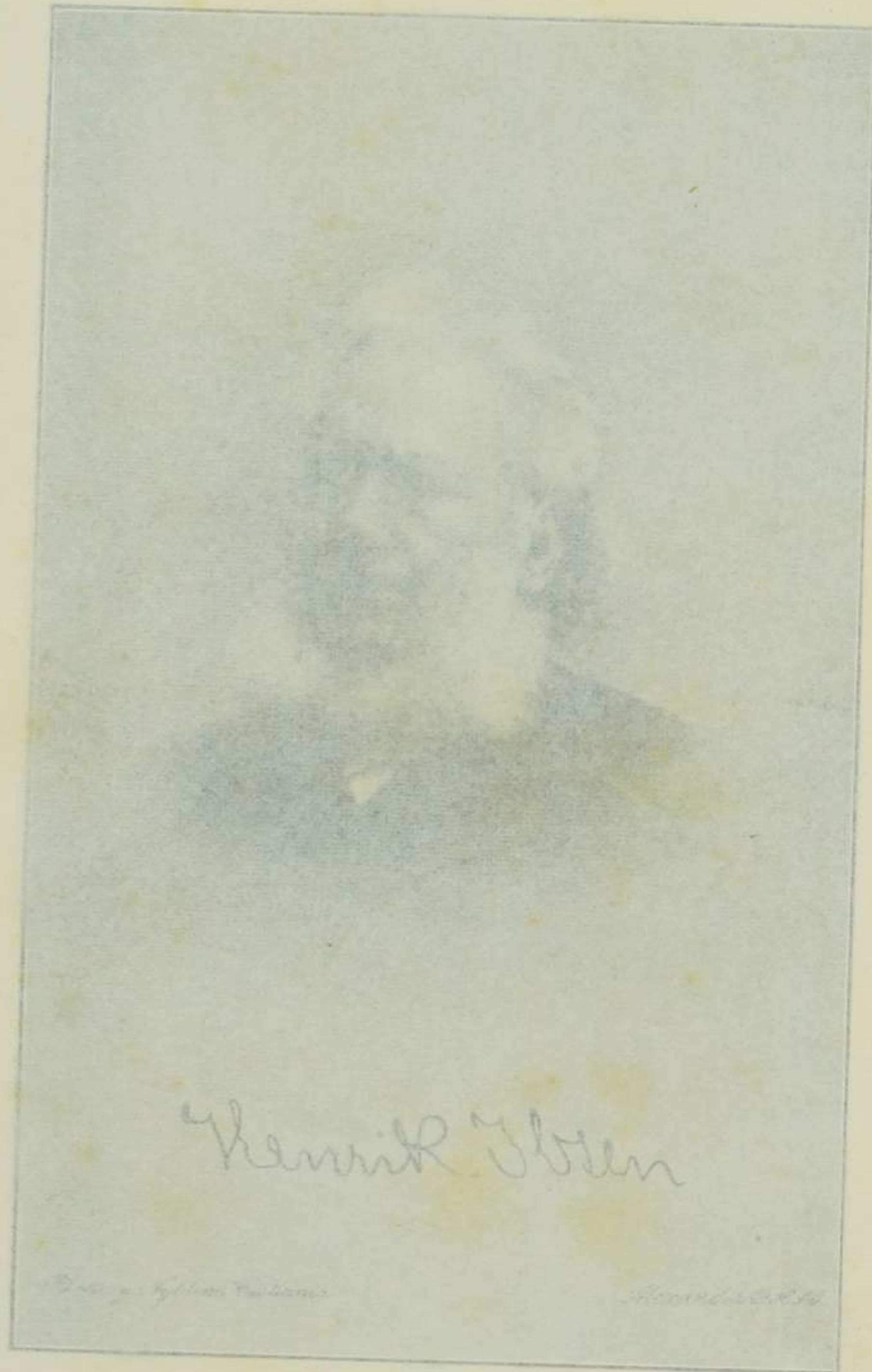
ヘルマー……………土肥庸元  
 クログスタッド……………東儀季治  
 ランク……………森英治郎  
 使の男……………西原勝彦  
 子供……………きよ子  
 ………………てい子

エレン……………横川唯治  
 アンナ……………佐々木 積  
 リンデン夫人……………廣田 濱子  
 ノラ……………松井須磨子

同じ一座は、翌明治四十五年三月十四日から一週間、大阪中座で同じく『人形の家』を開演し、これまた好成績であつた。『人形の家』の歴史は大體以上のやうなものである。

大正二年三月

抱月生



ンマブイ  
 (蹟手其及)

- エレン.....横川唯治
- アンナ.....佐々木 積
- リンドン夫人.....廣田 濱子
- ノラ.....松井須磨子

同じ一連は翌明治四十五年三月十四日から一週間、大阪中座で同じく「人形の家」を演習し、これまた好成績であつた。「人形の家」の歴史は大體以上のやうなものである。

大正二年三月

抱月生



ンセアイ  
(蹟手其及)

人形の家

(Et Dukkehjem = A Doll's House)

## 人物

トルグルド、ヘルマー [Torvald Helmer]

ノラ(ヘルマーの妻) [Nora]

醫師ラング [Doctor Rank]

リンデン夫人 [Mrs. Linden]

ニルス、クログスタッド [Nils Krogstad]

ヘルマー家の三兒

アンナ(三兒の嫡母) [Anna]

エレン(女中) [Ellen]

使の男

## 場所

ノルウェーの首都クリスチアニアなるヘルマーの家(大建物の内部を  
幾家屋かに仕切つた一つ)

## 第一幕

居心地よく趣味に富んで、それで贅澤でない設備の一室、奥、右手は廊下へ  
通ふ扉、左手はヘルマーの書齋に通ふ扉、兩入口の中間にピアノが一臺置  
てある。左側の壁の中程にも扉、それから前に寄つて窓、窓の傍に小さい  
圓テーブル、二三脚の脇掛椅子、小さい一臺のソファ。又右側の壁には  
少し奥に寄つて扉、すつと前に寄つて瀬戸で疊んだストーヴ、其の前に二  
脚の脇掛椅子と一脚の舟底椅子とがあつて、ストーヴと扉の中程に小さ  
いテーブル。双方の壁には版畫が懸つてゐる。置棚には陶器、骨董品な  
ど、又見事な釘装の書物を詰めた小さな本筐が据ゑてある。敷物は絨氈、  
ストーヴには火が燃えてゐて冬の日である。  
廊下の方でベルが鳴ると、すぐ外の扉の明く音がして、ノラがはしやいだ  
様子で鼻唄を唄ひながら這入つて来る。外<sup>そとで</sup>出服のまゝで、幾つかの小包  
を提げてゐる。それを右手のテーブルの上に置く。廊下への扉は明け

放したまゝで、使の男の立てゐるのが見える。其の男は持つて来たクリスマス、ツリーと提籠とを戸を明けに出た女中に渡す。

ノラ 其のクリスマス、ツリーをよく隠してお置きよ、エレン。晩にすつかり火を點すまでは、兒共等に見せちやいけないよ。(金入れを出しながら使の男に向つて) 幾ら?

使の男 二十五錢。

ノラ はい、五十錢。いゝえ、おつりは取つてお置き。(使の男禮を言つて去る。ノラは戸を閉ちて、黙つて嬉しげに、にこしく續けながら、外出仕度のものを脱ぐ。隠しから一袋のパン菓子を取り出し一つ二つ喰ひながら、夫の居る室の屏の側へ爪立足で歩み寄り、聞耳を立て) さうよ、家に居てよ。(右手のテーブルの方へ行きながら又鼻唄をはじめ)

ヘルマー (自分の室で)

そこで囀つてるのは家の雲雀かい?

ノラ (忙しげに手近の小包を開きながら) さうですよ。

ヘルマー 跳ね廻つてるのは栗鼠さんかい?

ノラ えゝ

ヘルマー 栗鼠さん、何時歸つて来たんだい?

ノラ 今歸つたばかり。(パン菓子の袋を隠しに忍ばせ、口を拭ふ) 入らつしやいよ、あなた、買物をして来たから御覽なさいよ。

ヘルマー うるさいな。(暫くして扉を開けパンを持つたまゝ、此方を覗いて) 買物をした? えゝ! それを皆んなかい? 家の無駄使家が又お錢を撒き散して来たね。

ノラ だつて、あなた、もう可いわ、少しくらゐお錢をつかひに出かけたつて。やつとクリスマスが樂に出来るやうになつたんですもの。

ヘルマー おいゝ、無駄にお錢を使つてよくはないよ。



六  
ノラ いゝんですよ。少しでいゝから無駄づかひをさして頂戴極少こ  
しでいゝから。ね？あなた、今に山ほどお金を儲けるんぢやありま  
せんか。

ヘルマー そりや新年からはさうだが、併し、給料の手に入るまでには、ま  
だ全三月もあるからな。

ノラ 構ひませんわ。其の間借金して置けば。

ヘルマー ノラ！（女の方へ行つて、戯れに耳を引つ張り）相變らず暢氣だなあ。  
まあ假りに今私が五百圓も借りたとするせ。それをお前がクリス  
マスの間に使つて了つて、そして年越しの晩に屋根から瓦が落ちて  
來て、私の脳天を割つたとする——

ノラ（男の口に手を當てて）しつ！何でそんな恐いことをおつしやる？

ヘルマー まあさ、さうなつたと假定する——さうすると何うなるだら

う？

ノラ そんな大變な騒になつて、借金の事なんか考へてやしません。

ヘルマー けれども貸した人は何うする？

ノラ 貸した人？誰れが構ふものですか。赤の他人ぢやありませんか。

ヘルマー これ、ノラ！お前、何んて女だらう。まあ眞面目に考へて御覽、  
私の主義はお前も知つてるぢやないか。一切負債をしない、借りを  
しないといふのが私の主義なんだ。家庭が借りや負債で出來上る  
が最期、自由な美しい生活といふものは亡びて了ふ。私達は斯うし  
て今まで踏ん張つて來たんだから、土俵際になつて負けぢやあなら  
ない。

ノラ（ストレーヴァの方へ行きながら）畏まりました——あなたの、お氣に召す  
やうに。

ヘルマー (跡につきながら) おい、家の小雲雀はそんなに羽を落として  
悄しげちやあいけない。おや！栗鼠さん、拗すねてるのかい？ (金入を取  
り出し) ノラ、是れは何？

ノラ (急に振り向いて) お金！

ヘルマー そうら！ (紙幣を幾枚か與へて) 無論クリスマスには色んな物の  
入ることは分つてるよ。

ノラ (勘定しながら)

五圓、十圓、十五圓、二十圓、まあ！有りがたう、有りがたう、ね。是れだけ  
あれば當分大丈夫ですわ。

ヘルマー 何うかさうして貰ひたいね。

ノラ 實際ですよ、當分大丈夫。まあ此處へ入らつしやいな、買つて來た  
物を見せますから。非常に安いんですよ。そら、此の新しい服と小

さい劔とがイヴールのでこちらの馬と喇叭がボブの。それからエ  
ンミーには人形と搖籠ゆりかご、是れは餘んまり平凡でしたけれども、直ぐ毀  
はしまふんですからねえ。それから女中達のは着物と襟飾りに  
しました。もつとも、婆やには、もう少し善いものが遣りたかつたんだ  
けれど。

ヘルマー 其のこちらの包は？

ノラ いけませんよ。其れは晩まで見せないで置くの。

ヘルマー あゝ、はあ。それで今度はお前の番だが、何を買つたえ。いた  
づら家さん。

ノラ 私？ え、私は何もいらぬの。

ヘルマー 馬鹿を言ひなさい。氣の利いたもので何か欲しいものがある  
なら言つて御覽。

ノラ いゝえ本當にいらぬの——さうね、ちよいと、あのね——

ヘルマー ふむ？

ノラ (男の上着のボタンをいぢくりながら、顔を見ないで) あなた本當に何か買つて下さるつもりなら、あのね、ほら、あのね——

ヘルマー ふむ、ふむ、言つて御覽。

ノラ (早口にお金を下さる方がいゝわ。あなたが呉れやうと思つてらつしやる丈でいゝから。さうすると私自身で跡から何か買ひますわ。

ヘルマー だけれど、お前——

ノラ あら、さうして下さいよ、ね、どうか。さうすれば其のお金を綺麗な金紙きんがみに包んでクリスマス、ツリーに吊り下げますわ。いゝ思ひ附でせう？

ヘルマー えゝと、いつも金を撒き散らしてゐるものを何とか言つたつけな。

ノラ 知つてますよ。無駄つかひ家といふんでせう。けれどもね、あなた、何うかさうして下さいよ。さうすると、何が一番先に買ひたいか、私わたしゆつくりと考へますわ、其の方が利口でせう？

ヘルマー (微笑しながら) 全くさうだ。たゞお前が自分のものを買ふ時まで其の金を持つて居られゝば可いがさ。みんな家の用だの、くだらない買物だのに無くして了つて、そして私がせびられるんだからな。

ノラ あら、あなた。

ヘルマー 嘘だといふのかい？ (女を片手に抱いて) こんな可愛らしい雲雀が随分と夥しい金をつかふものだ。お前ほどの小鳥を一羽蓄ふ爲

めに何れくらゐ金がかゝるか、人に言つたつて本當にはしないからねえ。

ノラ およしなさいよ、そんな事。私、残せるだけは残しますわ。

ヘルマー (笑ひながら) 可かつたね——残せるだけ残しますは——所が一向残せません。

ノラ (穩かに満足の體で、鼻唄にこゝくしながら) ふむ、私のやうな雲雀や栗鼠が何の位お金をつかふか、今に分かるでせうよ。

ヘルマー お前は不思議な人間だ。丁度お前のお父つさんのやうだ。何時も金ばかり欲しがつてゐて、それで金が手に入ると、もう指の間からでもこぼすやうに無くして了ふ。何に使ふんだか分らない。が、まあ、いゝさ、それがお前の性分なんだ。血統なんだ、ねえお前、斯ういふ事は遺傳するものだ。

ノラ お父つさんの性質なら遺傳して貰ひたかつたのが幾つもありますわ。

ヘルマー 私はまた、そんな事は何うでもいゝから、お前はいつまでもお前で居て貰ひたいな。斯うやつて、可愛らしい小鳥のやうに囀つてね。それはさうと、——何だ、——お前は斯う——何と言つていゝか——斯う、變に怪しいせ、今日は。

ノラ 私？

ヘルマー あゝ、さうだ。此方に向いて御覽。

ノラ (夫の方を見ながら)

はい。

ヘルマー (指で突く眞似をしながら)

此奴今日は、可けないといふ物を喰べましたな。

ノラ 嘘ですよ、ひどい人。

ヘルマー 菓子屋をちよつぴりと覗きやしなかつたか？

ノラ 嘘ですよ、あなた、本當に。

ヘルマー ゼリーを一甜ひとぢまやりはしなかつたか？

ノラ 嘘誰がそんな事をするものですか。

ヘルマー パン菓子を一つ二つ摘つまみやあしなかつたか？

ノラ 嘘ですつてばねえ。

ヘルマー よし〜。冗談さ。

ノラ (右のテールの方へ行く)

あなたが可いけないといふ事を、何で私がするものですか。

ヘルマー さうだらう〜。それからお前は誓つたつけな—— (女の方

へ行きながら) ぢやあ、まあお前がたくらんでる事はクリスマス秘密

として取つて置きさ。今にクリスマスツリーが出れば、みんな分かる事なのだらう。

ノラ あなた、ランク先生をよぶことを忘れはなさらなくて？

ヘルマー 忘れちやつた。けれどもいよ。無論来るだらう。今日けふに

も来たらさう言はう。それからね、上等の葡萄酒を誂たぐへて置いたぞ。

私わたしが何んなに今夜を待ち焦れてゐるか、お前には想像出来まいね。

ノラ 私だつてさうですわ。兒供が何んなにか嬉しがるでせう、ねえ。

ヘルマー あゝ、地位は固まるし、金は取れるし、素晴らしい勢だ。考へる

と實に愉快ぢやないか。

ノラ えゝ豪勢がうせいですわ。

ヘルマー お前去年のクリスマスの事を覚えてるかい。全三週間も前

から、お前はみんなを驚かさうといふんで、部屋に引込んだまゝ夜中

過ぎになつても寝ないでクリスマス、ツリーの花だの、色んな飾りだのを拵へたつけ。私はあの時ほど退屈したことは無い。

ノラ 私はまた退屈する段ぢやあなかつたわ。

ヘルマー (笑ひながら)

それで結果は何うかといふと、全で形なしでねえ。

ノラ あら、あなたは、またそんな事を言ひ出して、私をからかふつもり？  
だつて仕やうが無かつたんですもの、猫めが這入つて来て、すつかり壊しちまつて。

ヘルマー さうだつたな、可愛さうに。お前は、みんなを喜ばせてやらうと思つて、一生懸命になつたんだから、まあ其の志だけで澤山さ、兎に角去年は苦しかつたが、それが昔話になつたのは目出たいよ。

ノラ ねえ、豪勢ですわね。

ヘルマー もう私も茲に座つて、獨りで退屈してゐる必要もなし、お前だつて其の可愛らしい眼や、細つそりした指で夜業をする必要もなしさ——

ノラ (手を拍ちながら) え、そんな必要も無くなりましたわねえ。全く、考へると豪勢ですよ。(男の腕を取り) だから私、今日はあなたに話しますわ、是れから先何ういふ風にやつて行くといふ私の考を、ね。クリスマスが済むと——(廊下の入口のベルが鳴る) ベルが鳴つてよ、室内を片づけながら誰か來たんですよ。厄介ですわねえ。

ヘルマー 私は留守のことにしてあるよ、忘れちやいけないよ。

エレン (室の入口で) 奥さま、御婦人の方がお出でになりました、お目にかゝりたいと仰つしやいます。

ノラ 誰れだらう？ お通し申しな。

エレン (ヘルマーの方へ) それからお醫者様が丁度入らつしやいました。

ヘルマー 書齋の方へか？

エレン はい。

ヘルマーは書齋にはいる。エレンが旅行服姿のリンデン夫人を通して、跡の扉をしめる。

リンデン (おづく) とためらひながら) ノラさんお變りもなく。

ノラ (不審げに) お變りもなく。

リンデン お忘れなすつたでせうねえ。

ノラ はあ、つい——あ、さう——たしか——(俄に元氣づいて) まあ何う

したんでせう、クリスチナさん！本當にあなたなんでせうか？

リンデン 全く私わたしなのですよ。

ノラ クリスチナさん、まあ、あなたを見忘れるなんて、何うしたんでせう

ねえ、だけど全まるつきり——(二層柔かに) あなた随分お變んなすつてよ。

リンデン え、さうでせうとも。九年か十年のあひだ——

ノラ お別れして、もうそんなになりますかねえ。さうね、さうなりますのね。あ、此の八年ばかりは、私ほんとに幸福でしたのよ。で斯うして、あなたが入らしつて、よくまあ此の冬空に遙々と出てゐらつしやつたわねえ。勇氣がありますわ。

リンデン 今朝けさの汽船で着きました。

ノラ クリスマスを愉快にしやうと思つてでせう？よかつたわね。え、愉快にやりませうよ。まあそんな物をお取とんなさい。冷えるでせう？(手つだひながら) さあ、是でよござんす、火の側そばでくつろいで話ませうよ。い、え、あなたその脇掛椅子におかけなさい。私は此の動く方がよござんす。(リンデンの両手を取つて) 成るほど、斯うやつ





いふ望一つも残つては居ないんですよ。

ノラ (不思議さうにリンデンを見て) だつてクリスチナさん、何うしてさうな  
んでせう？

リンデン (微笑しながら髪の毛を撫でて) それは、あなた折々そんな事になる  
ものですよ。

ノラ 全で一人ぼつち！何んなにか心細いでせうねえ、私は三人兒供を  
持つてゐますが可愛んですよ。今乳母と外へ行つてゐますから、お  
眼にはかけられないけれど。それはさうと、まあ、あなたのお話を  
すつかり聞かせて下さい。

リンデン いえ、いえ。あなたこそ聞かせて下さいませ——  
ノラ いけませんよ、あなたからお始めなさいよ。今日は私、自分にかま  
けた話はしたくないんですよ。今日はあなたの事ばかり考へて

居たいんですから。あ、さう——一つだけお話することがあります  
わ——だけど、もう、お聞きになつたでせう？私どもで大變な出世を  
しましたことを。

リンデン はあ？何うなさいました。

ノラ まあ何うでせう、宅が株式銀行の支配人になつたんですよ。

リンデン お宅で？ほんとにお任せですことねえ。

ノラ はあ、ねえ？辯護士なんてものは、極まつた宛のない職業ですから  
ね。ちよつとでも暗いとこのある仕事はすまいとなると、尙のこと  
さうですし、宅は勿論暗いことが大嫌ひで、私だつて其主義ですから、  
到底やり切れませんわ。それで今度は私ども、何んなにか喜んだで  
せう？新年から其方へ行くことになつてるので、給料もどつさ  
り取れて、配當もあるんですよ。是れからは、すつかり今までと

違つて見違へるやうな暮しが出来ます——實際何んな暮しでも好きなとが出来るとですよ。あゝ私、本當に氣が浮きくして、幸福ですの。お金が澤山あつて、心配事は少しも無し、申分は無いでせう  
 リンデン えゝ、いる丈のものが取れゝばね、幸福に相違ありません。  
 ノラ いる丈ぢやありませんよ、お金が山ほど——山ほど取れるんですもの。

リンデン (微笑しながら) ノラさん、あなたは、いまだに、ねんねえですのねえ。御一緒に學校に行つてゐる頃から、大變お金をつかふ事の好きな方でしたつけが！

ノラ (靜に微笑しながら) えゝ、今でもさうですつて、トルブルドが言つてますのよ。(指にて突く眞似をしながら) けれどもね、この「ノラさん」はみんなが考へてゐる程馬鹿ぢやあないんですよ。ほんとうは私まだそ

れほど無駄づかひ家になれる身の上ぢやないんです。夫婦共稼ぎでしたもの。

リンデン あなたがですか？

ノラ えゝ、ちよつとした手細工仕事をよ、編み物だの、刺繡だの、まあそんな事とね、(意味ありげに) それから、もつと外の事もしましたの。無論御存知でせうがトルブルドは結婚するとすぐ役所の方を引きました。といふのは、あんまり立身の見込もなかつたし、お金は段々いつて來ますしね。それや是れやで、結婚した當座一年といふもの、あの人が無理な仕事をしたんですよ。何でも構はないからといふので朝早くから、晩くまで色んな事を爲て、とうとう病氣になつて倒れちまつたのです。それで醫者は是非南ヨーロッパの方へ轉地しろといひませう？

リンデン はあく、たしかイタリアに、一年、行つてらしやつたでせう？  
 ノラ 行つてましたの。ですけど、それまでの算段が容易ぢやなかつた  
 んですよ。丁度イヴールが生まれたばかりでしてね。それかと言  
 つて止す譯にはゆかないから、まあ工夫をして出かけたんですが、旅  
 行はいゝ旅行でしたよ。トルブルドの命もそのお蔭で引き留めま  
 すし。たゞクリスチナさん、費用が大變でしてねえ。

リンデン さうでせうとも。

ノラ 千二百弗といひますと一寸二千四百圓ですわ。随分でせう？

リンデン 其のお金があつたのですから、結構です。

ノラ それは私の父の手元から出たのです。

リンデン 成るほどね。あなたのお父さんは、丁度あの時お亡くなり  
 でしたね。

ノラ はあ、さうですよ。それで何うでせう、私、行つて看護することも出  
 來なかつたんですよ。イヴールの生まれるのを今日か〜と待つ  
 てた時でしてね、そしてそれが済むと今度は宅がああ病氣で、私は其  
 の方へ附きつきりでせう？わたしをあんなに可愛がつて呉れた父  
 ですけど、可哀さうに、それつ切り會へないで、死んぢまひました。  
 結婚してから、一番つらかつたのは、あの時ですわ。

リンデン お父つさんが一番あなたのお氣に入りでしたつけねえ。で  
 其れからイタリヤへ入らつしやつたの？

ノラ え、金は出來ますし、醫者は是非といふもんですから、一ヶ月ばか  
 りして立ちました。

リンデン それで、お宅ではすつかりよくお成んなすつたのですか？  
 ノラ 鍛へたやうに達者になりました。

リンデン ですけど——先つきのお醫者さまは？

ノラ 彼あの人が何どうして？

リンデン 私こちらへ參つた時に、丁度お女中がさう申してゐやしませんでしたか？

ノラ え、え。ランク先生。あの人はね、病氣を見に来るんぢやありません。私どもの親友でして、毎日缺かさず、あゝやつて話しに来るんですよ。トルヴルドは其のちの後一日でも病氣で寝たことなんかありません。それから兒供も丈夫で元氣ですし、私も此の通りびんびんして居るでせう？（飛び上つて、手を叩きねえ、まあ、クリスチナさん、生きて行つて、それで幸福でさへあれば、これほど結構なことはありませんねえ。あら、私まあ、ほんとうに何うしたんでせう。自分の事ばかり喋つてゐて。今ぐ前まへにある足載臺の上に座わりクリスチナの膝ひざに兩手

をなかけて）何どうぞ、ね、怒おこらないでゐて頂戴。さあ今度は私が聽き手ですよ。實際ですか、あなたはお連れ合を愛して居らつしやらなかつたといふのは？それで何どうして結婚なすつたの？

リンデン 其の頃はまだ私の母が生きてまして、床とこへ就いたきり動けなかつたのですよ。で、一方には二人ふたりの弟の世話もしなくちやならないし、いつその事あの人から申込んで來たのを幸ひ、身を固めるのが私の義務かと思つたのです。

ノラ それはねえ。で、其の方かたは金持だつたんでせう？

リンデン 工面が好よかつたやうですよ。けれども、やつてる事業が手固く行かなかつたものですから、あの人ひとが亡なくなると一緒に滅茶々々に壊こわれて了しましてね、塵ちり一つ残らない目に逢あひました。

ノラ それから——？

リンデン それから色々工風しまして、店を開いて見たり、小さな学校もやつて見たり、出来るだけの事はして見ました。この三年間は私に取つちや、長い一續きの戦争でしたよ。けれども、もうそれも終へました。心配してゐた母は、もう私に用の無い身になつて、墓場へ行きますし、子供たちは實業の方に口があつて、獨立してやつてゐます。

ノラ まあ！自由な身になつたとお思ひでせうね。

リンデン いゝえ、ノラさん。何とも言へない淋しいものですよ。誰を宛に生きてるといふぢやなし。(いらくした様子で立ち上り)私があんな邊鄙に居堪えられなくなつたのも其のためです。こちらへ參つたら、本當に爲<sup>し</sup>甲斐<sup>ひ</sup>のある仕事が見つかるだらうと思ひましてね、何でもいゝから、私の氣を外へ散らさせない仕事<sup>しごと</sup>が爲<sup>し</sup>たいと思ひますのよ。何か極<sup>き</sup>まつた勤め口でもあればいゝんですがねえ——會社

へでも出るやうな——

ノラ だけどクリスチナさん、そんな事は氣の詰るものでせうよ。あなたは、大變疲れてらつしやるやうだから、それよりか温泉にでも行つて保養<sup>ほやう</sup>した方がよござんせう？

リンデン (窓の方へ行きながら)私にはお金<sup>かね</sup>を出してくれる父も居りませんし。

ノラ あら、お氣に障つたら御免下さいよ。

リンデン (ノラの方へ行きながら)ノラさん、ねえ、私こそお氣に障つたら御免下さいよ。私のやうな不幸な身になりますとね、氣むづかしくばかりになりましたね。誰を宛<sup>あて</sup>ともなく、それで居て、いつも油斷しては居られないし。第一生きて行かなくちやなりませんから、何うしても利己主義になります。先つきも、あなた<sup>がた</sup>方がお仕合な身分にお成

りだと聞いた時は、——申すもお耻かしいのですが——私、あなた方よりも自分の爲に、まあ、よかつたと思つたのですよ。  
ノラと言ひますと？あ、分わかりました。宅たくがあなたの爲に盡力して呉れやうと仰つしやるのでせう？

リンデン はあ、さう考へたのですよ。  
ノラ 盡力させますとも。其の事はすつかり私にお任せなさい。私が何かあの人の氣の向くやうに甘うまい事を考へて、見事うまにやらせて見せます。ほんとに、まあ、私、何かあなたのお爲になるやうな事がしたいわ。

リンデン 美うつくしい御親切ですわねえ。美しいと言へば、あなたの御氣性はほんとに美しい。浮世の荒い波風に揉まれて居らつしやらないから。



松井須磨子の夫人



松井須磨子の氏

りだと聞いた時は、申すもお耻かしいのですが——私、あなた方  
よりも自分の爲に、まあ、よかつたと思つたのですよ。

「フ」と言ひますと、あ、分りました。宅があなたの爲に盡力して呉  
れやうと仰つしやるのでせう？

「リンドン」はあ、さう考へたのですよ。

「フ」盡力させますとも。其の事はすつかり私にお任せなさい。私が  
何かあの人の氣の向くやうに甘い事を考へて、見事にやらせて見せ  
ます。ほんとに、まあ私、何かあなたのお爲になるやうな事がしたい  
わ。

「リンドン」美しい御親切ですわねえ。美しいと言へば、あなたの御氣性  
はほんとに美しい。浮世の荒い波風に揉まれて居らつしやらない  
から。

ノラ 私が？揉まれて居ないんですつて——？

リンデン (微笑しながら) さうですね、少しばかりの手細工仕事、くらのものでせう？全くのねんねえで入らつしやるのですよ。

ノラ (頭を立て室内をあるく) おやく、そんなにねんねえ扱ひにするものぢやありませんよ。

リンデン ぢやあないんですか？

ノラ あなたも外の人と同じことねえ。みんな寄つてたかつて、私を全で真面目な事の出来ない人間にしてつてよ。

リンデン それはね——

ノラ 私、この窮窟な世間の苦勞を全で知らないと思つてゐらつしやるのね。

リンデン だつてノラさん、あなたは今、是れまでの苦勞をみんなお話し



なすつたぢやありませんか。

ノラ ほ、——あんなつまらない事！（柔かに）私まだ大事件をお話して居ませんわ。

リンデン 大事件ですつて？ 何んな事？

ノラ あなたが私を見くびつて居らつしやるのは知つてますけれどね、あなたに其の権利はなかつてよ。おつ母さんの爲に長い間一生懸命お働きなすつたといふのが、あなたの誇りでせう？

リンデン 私決して人様を見くびりなんか爲ません。もつとも、私が母の最期を安樂にさせたと申すことは、考へると嬉しくもあり、誇りとも存じてゐます。

ノラ それから、あなたの御兄弟の爲めにお盡しなすつた事も誇りでせう？

リンデン 當然ぢやありませんか。

ノラ 無論ですとも。で、今度は私の番ですがね私も嬉しく思つて、誇りにしてゐる事があるのですよ。

リンデン さうでせうとも。何うかそれを聞かせて下さい。

ノラ しつ！ 大きな聲をしちや、いけませんよ。トルヴルドが聞かうものなら大變です。あの人には何んな事があつても聞かせられない事なんです——誰にも知らさないで——たいあなたに許しですよ。

リンデン 何んな事でせう？

ノラ まあ此所へ入らつしやい。（自分の傍へ、ソファに座らせて）さうですよ——私誇りにして喜んでゐる事が一つあるのですよ。トルヴルドの命を救つたのは私です！

リンデン 命を救つたと仰つしやると？ 何うして？

ノラ 私どものイタリアに行つた事はお話ししたでせう？あの時若し  
イタリアに行かなかつたら、トルヴルドは死んで了つたのですよ。

リンデン はあ——それで、あなたのお父つさんがお金を下すつて。

ノラ (微笑しながら) え、トルヴルド始め、みんなさう信じてゐますけれ  
どね——

リンデン けれども、何うしました？

ノラ 父は一錢も呉れたのぢやありません。私が其のお金を拵へたの  
です。

リンデン あなたが？すつかり其のお金を？

ノラ 千二百弗。二千四百圓。何うでせう？

リンデン まあ、ノラさん。何うしてそれが出来ました？富籤とみくちでも當つ  
たのですか。

ノラ (下すんだ様子で) 富籤ですつて？は、そんな事なら、どんな馬鹿にで  
も出来ます。

リンデン ぢや何處どこから其のお金を手に入れました？

ノラ (鼻唄を唄ひ、不思議な微笑を見せる) ふむ、ツラ、ラ、ラ、ラ。

リンデン 無論借りる譯には行かなかつたでせうし。

ノラ 借りられませんか？何せ？

リンデン だつて、妻つむぎが夫をうとに内證で借金をする譯には行きますまい？

ノラ (頭を立て) ですけどね、少し實際の事を知つて、手筈をさへ心得  
てゐれば、何でもありませんわ——

リンデン ですけどノラさん。私分かりません——

ノラ え、お分かりにならないで、ようござんすよ。私、借金をしたとは  
申しません、何か外の事ほかで儲けたんでせうよ。(ソーファにかけたまゝうしろ後

へすがって) 誰か私を崇拜してゐる男からでも貰つたんでせう。是れでもねえ——私くらゐの女なら——

リンデン ノラさん、餘んまり駄々つ子過ぎますよ。

ノラ そうらね、分からないでせう? 不思議でせう?

リンデン まあお聞きなさい、ノラさん。あなた、少し亂暴ぢやなかつたんですか?

ノラ (眞直に座わり直して) 夫の命を救ふのが亂暴ですつて?

リンデン 亂暴といふのは、御主人に知らせないで——

ノラ けれども知らせたら命に障つたかも知れない場合ですもの。分つたでせう? あの人は自分で何のくらゐ悪いか知らなかつたんです。醫者がそつと私の所へ来て命が危いから南ヨーロッパの旅行でもしなくちや、救ふ道は無からうと言ふのです。ですから私、最初

に外交術を使ひましたの、それくらゐの事を爲なくて何うするものですか。若い内は何所の妻君でもやるやうに、外國旅行が是非しいと言つて頼みました。泣いてせがんでやつたのですよ。私の事も考へて下さい、私のいふ事に逆らつてはなりません。そしてお金は借りたら可からうと、それとなく言つたのです。さうすると、あなた、怒鳴らないばかりに怒こりましてね、輕躁な奴だ、そんな出來心や空想は止めるのが夫の役目だといふのです。——出來心や空想ですとさ。そんな風ですから、私は、よろしい、兎に角命は救つて上げなくちやあならない、と決心しましてね、其の方法を立てたのですよ。リンデン そしてお宅では、其のお金の事を、先方からお聞きにはななかつたのですか?

ノラ いゝえ、ちつとも。ちやうど其の間際に父が死んだのですよ。私

父に話して、宅へは何も言はないやうに頼んで置かうと思つたのですが、病氣が募つて——可哀さうに、口止めする必要もなくなつて了ひました。

リンデン　で、御主人には何も打ち明けては入らつしやらない？

ノラ　飛んでもない事。あなた一體何を考へてゐらつしやるの？借金といふ事をあんなに嫌つてゐる人に、そんな事でも言つて御覽なさい。それにトルヴルドのあの男らしい、獨立心の勝つた氣性で、幾らかでも私の世話になつてるといふことを聞いたら、どんなにか心苦しく、肩身が狭いでせう？それこそ私たち夫婦の仲を打ちこわして了ひますわ。私どもの美しい幸福な家庭は二度と見られなくなりませわ。

リンデン　ぢやあ一切話さないお積もりですか？

ノラ　（熟考の様子で半ばほく笑みながら）さうですね、何時かは話すかも知れませんが——幾年か立て、私がもう——餘んまり美しく無なつたら。あなた笑つちやあ可ませんよ。つまりね、トルヴルドが今のやうに私を愛して呉れなくなつて、幾ら私が跳ね廻つて、衣裳をつけたりお芝居をして見せたりしても、もう面白いと思はなくなつたら、其の時取つて置きの材料があると都合がいゝでせう？（急に話を切り）あゝ、馬鹿々々しい！そんな事になつて堪るものか。それで、あなた、何う思つて？私の大秘密を。やつぱり私には何も出来ませんか？是だけの事をするには、私、随分苦心しましたよ。さちんく——と義務を果たして行かうと思へば、冗談事では出来ません。貸借上の事でね、年賦拂といふのと、年四季の利子勤定といふのとがあります。それを間違なく濟ませて行かうとすると實に骨ですよ。其のために、手の

届く限り、そこから中から、少しづつ、掻き集めなくちやならず、それかと  
言つて、トルバルドにそんな非道い暮しもさせられませんが、家の  
費用を剩すといふ譯にも行きませんしね。兒供にだつて餘まり非  
道い装をさせて出たくもありませんから、あれ等に宛てた金は、み  
んな、あれ等のためにつかつて了ひますし。

リンデン 骨が折れたでせうね、ノラさん。つまり、みんなあなたのお小  
遣から出たことになるんですね。

ノラ 無論さうなのです。つまり何もかも私獨りでやつた事になるで  
せう？家で着物を買へとか何とか言つて呉れますお金を、半分以上  
つかつた事はついぞありません。いつも、一番手輕な品、手輕な品と  
選つて買ふのですけれど、仕合と何を着ても私に似合ふものではな  
ら、トルバルドも氣が付かないで済みますの。けれど、實際つらい時

がありましたよ、クリスチナさん。いゝ着物は着たうござんすから  
ね。さうぢやありませんか。

リンデン 全くさうですよ。

ノラ まあそれはいゝとして、其の外にも私、別口で金をこしらへました  
のよ。去年の暮、大變好い都合でしてね、寫し物をどつさり頼まれま  
した。毎晩、夜晩くまで閉ぢ籠つて書きましたつけが、時々随分疲れ  
て、仕やうのない事がありましたよ。けれどもあんな風に働いてお  
金を儲けた時は、いゝ氣持ですことねえ。全で男になつたやうな氣  
持ですわ。

リンデン そんなにして今までに何のくらい辨償しました？

ノラ さうね、精確には分かりませんわ。そんな事といふものは、はつき  
りさせて置くことのむづかしいものですからね。私たゞ丹念に集

めて来ただけの金を、すっかり拂つて来たことは知つてゐます。時々、實際何處へすがつていゝか分からないこともありました。(微笑して) 其の時には私、何時もこゝに座つて、想像して見ますの、誰かお爺さんの金持があつて、私を愛して呉れて――

リンデン え！誰れですつて？

ノラ なあに誰れでもないんですよ、――そして其の人が死んぢやつて、遺言狀を明けて見ると、大きな文字で、予が死する時所有せし一切の財産を直ちに彼の愛らしき人ノラ、ヘルマー夫人に拂渡すべし、と書いてある。

リンデン ですけど、ノラさん、あなた、誰のことを言つてるのです？

ノラ おやく、分からないのですか？誰もお爺さんが居るのぢやありません、たゞ、いつも私がお金の工面に盡きた時、獨りで、想像して見る

人なのですよ。だけど、もうそんな事もいらなくなりました――あの辛氣くさい爺さん、私に用があるなら何處にでも待つてるが、いや。私、そんな人に用もなければ、遺言狀にも用はない、私の心配事はもう、すっかり無くなつたのですから。(飛上がりながら) ねえ、クリスチナさん、考へると、本當に大した事なのですよ。心配事が無くて、自由の身になつて。自由です、すっかり自由なんです。是でもう兒供と一緒にきやつきやと騒ぎ廻つて居ても差支なし、トルヴルドの好きなやうに家の中も綺麗に飾つたり。さうしてる内に春が来て、あの廣い青い空が見えて來ます。其の頃には一寸した休みも取れるでせうし、も一度海も見られるでせう。實にねえ、生きて行つて幸福であつて、何といふ素ばらしい事でせう

(廊下口のベルが鳴る)

リンデン (立ち上りながら) ベルが鳴ります、私はお暇いとました方ほうがいゝでせう。

ノラ いゝえ、まあ、よごさんすよ。来たのは屹度トルヴルドへの客きやくですから。

エレン (入口の所で) 奥さま、お客さまが見えまして旦那さまにお目にかゝりたいと仰つしやいます。

ノラ 何方どなた?

クログスタッド (廊下への入口で) 私わたくしです奥おくさん。

(エレン去る、リンデン立つて窓の方へ向ふ)

ノラ (二足男の方へ行き、心配氣に、稍聲高く)

あなたですか? 何です、宅たくに何んな御用があるんです?

クログスタッド 銀行の用事——と言つてもいゝでせうな。私はあの株

式銀行でちよつとした仕事をしてゐますが、今度御主人があすこの新支配人にお成んなさると聞きましたね。

ノラ それで——?

クログスタッド 一向に面白くもない用事ですがね、奥さん、たゞそれだけです。がね。

ノラ ぢや何うか書齋にゐますからお通り下さい。

(クログスタッド行く。ノラ無雜作に腰を屈め廊下への扉をしめる。そしてストーザの傍により、火をおこす)

リンデン ノラさん、何方どなたでした?

ノラ クログスタッドさんといつても、と辯護士をしてゐた人です。

リンデン ぢや、やつぱりさうだ。

ノラ あなた御存じ?

リンデン もと知つてました——餘程前の事です。私どもの町の辯護士の所に居ましたつけ。

ノラ はあ、さうですつてね。

リンデン あの人も随分變りましたねえ。

ノラ たしか、結婚をして、うまく行かなかつたんでせう？

リンデン ぢや今は獨身？

ノラ 大勢の兒供をつれてね。さあ、やつと燃えつきました（ストーヴの戸を閉ぢ、船底椅子を少し側によせる）

リンデン あの人のやつてる事業は、あんまり立派なことぢやあ無いつてますね？

ノラ さうですか？さうかも知れませんが。私知りませんわ。事業の話なんか止よませうよ——面白くないから。

（ランクがヘルマーの室から出て来る）

ランク （入口に立つたまゝ）なあに——。私にお構ひなく。私はちよつと奥さんの所へ行つてお喋りをして来るから（扉を閉ぢる。リンデン夫人の居るのを見て）や、失禮、こちらもお邪魔をしさうだな。

ノラ いゝえ、ちつとも（二人を紹介する）ランク先生——リンデンの奥さん。

ランク あ、さうですか。お名前は度々伺ひました。先つき此方へ上つて來るとき梯子段でお先へ失禮したのが、たしかあなたでしたね。

リンデン はあ、私わたしゆつくり——と歩あくものですから。梯子段は全く思ひでしてね。

ランク 餘んまりお丈夫でない？

リンデン たゞ無理な仕事をした爲せいですけれど。



ランク あゝ、それでこちらへ来て少し呑氣に保養をなさらうといふのですね？

リンデン いえ、こちらへ参つたのは、職が求めたいと思ひまして。

ランク 無理な仕事をなすつて疲れてお出でのに、それぢやあ療治になりませぬ。

リンデン でも生いきなくてはなりませんもの、先生。

ランク さやう、世間ではさう言つてますね。

ノラ あら、先生、あなただつて生いきてゐたいと思ひませう？

ランク さうに違ひありません。私の生涯が何どんなにみじめだらうが、やつぱり出来るだけは長く引つ張つて居たい。それから私の所へ来る患者がみな、さういふ熱に罹つて居ます。道德上の患者だつて同じこと、今ちやうどヘルマー君が話してゐる人物なども、その死に

損ひなのです。

リンデン (柔かに) まあ！

ノラ 誰のことですか？

ランク あのそれクログスタッドといふ奴やつさ。あなたは何も御存知ないが——心のどん底まで腐つた奴やつです。所があんな奴やつまでが、話の冒頭に真面目まじめくさつて、生いきなくちやありませんから、なんて言つてましたよ。

ノラ さう？そしてトルヴルドに何どんな用事があると言つてました？

ランク 實は私何も知らないのですがね、話の様子では、何でも銀行の事務に關したことからしかつたですよ。

ノラ 私はちつとも、あいつが——あのクログスタッドさんが銀行に關係してゐるといふことを知りませんでしたわ。

ランク 何かちよつとした仕事をして居るのです。

(リンデン夫人の方へ) 何ですか、あなた方の地方でも、わざわざ、道德上の傷物を嗅ぎ出して掘ちくり廻す連中がありますか？そして、何か事件が見つかりると、其の男を善い地位に据えて置いて、見張つてゐるに都合のいゝやうにする。そんな連中に限つて無傷なもののみみんな投げ出してしまふ。

リンデン はあ、それはさうでせうけれど——傷のある人間ですと尙のこと看護してやる必要があるのでせう。

ランク (肩を揺すつて) それだ！其の考からして、社會を病院にしてしまふのです。

(ランクは自分ひとりて何か考へ込んでゐたが、半ば押潰したやうに笑ひ出し手を拍つ)

ランク 何をお笑ひなさる？何か社會に就いてお説がありますか。

ノラ 社會なんて、そんな面白くもないものに、何でかゝり合ふものですか。私の笑つたのは他の事ですよ——非常におもしろい事。ねえ、先生、何ですか？あの銀行に使はれてるものは、みんなもうトルバルドの自由になるのですか。

ランク それが、あなたに非常に面白い事なのですか？

ノラ (微笑、鼻唄) いゝんですよ。 (室内を歩き廻る) さうなの、全くさう思ふと愉快ですよ、トルバルドが、そんなに多勢の人を自由にする身分になつたと思ふと (隠しから袋を取り出す) ランク先生お菓子をお召し上がりませんか？

ランク おうや、おや——菓子？菓子は此の家ぢやあ禁制品だと思つてたが？

ノラ さうですけれども、クリスチナさんが持つて来て呉れましたの。  
リンデン あら！私か？

ノラ いゝえ、よくてよ。びつくりしなくとも、よござんすよ。あなたは  
宅で是れを禁じた事を御存知なかつたんですもの。實はね、私の齒  
に悪いからといふんで、宅でそれを心配したのですよ。けれど、構ふ  
者ですか、一度つきり——是はあなたに、ランク先生（パン菓子をつら  
ランクの口に入れてやる）それからクリスチナさんにも。それから私  
の番——ほんの小さいのを一つ、精々で二つ（又歩き廻る）あゝあ、實際私  
は幸福ね、けれど世の中にたつた一つ、是非と思つてゐるがあるわ。

ランク へえ、何です？

ノラ トルヴルドの聞いてる前で——是非言つて見たいと思ふ事があ  
るんですよ。

ランク ぢやあ何せ言はないのです？

ノラ 言へないので、非常にいやな事。

リンデン いやな事とは？

ランク それなら言はないもよからうが、私たちには言へませう？ヘル  
マー君に聞かせたいといふのは何んな事です。

ノラ 馬鹿つ！と言つたら何んなにいゝ氣持でせう。

ランク あなた、氣が違やしませんか？

リンデン まあ、何うしたんです、ノラさん。

ランク 言つて御覽なさい——ちやうどあすこに見えたから。

ノラ（菓子を隠す）しいつ！

（ヘルマー手に帽子を持ち、腕に外套をかけて自分の室から出て来る）

ノラ（ヘルマーの方へ行きながら）ね、あなた、あの男の用は済んだのですか？

ヘルマー あゝ、あの男は今歸つたよ。

ノラ 御紹介申しますよ、此方はクリスチナさんです、ちやうど此方へお  
出になつて——

ヘルマー クリスチナさん？失禮だが、何方だつたか——

ノラ リンデンの奥さんですよ、あなた——クリスチナ、リンデンと仰し  
やつて。

ヘルマー (リンデン夫人の方へ) さうしますと、たしか、妻の學校友達でいら  
つしやつたのですな。

リンデン はい、子どもの時分から御懇意にいたして居ります。

ノラ でねえ、まあ何うでせう、此の遠い所を、あなたにお話がしたいつて、  
入らつしやつたのですよ。

ヘルマー 私に話がしたい？

リンデン はい、え、さういふ譯でも——

ノラ ね、あなた、クリスチナさんは算盤が非常にお上手なんですよ。で  
すから何うか第一流の事業家に使つて貰つて、もつと修業がしたい  
といふお考なのです——

ヘルマー (リンデン夫人の方へ) それは結構ですな。

ノラ それから、あなたが今度支配人にお成んなすつたといふことをお  
聞きでね——それは勿論電報で知れたでせうから——それで直ぐ  
思ひ立つてお出でになつたのですよ。ですからね、あなた、よござん  
すか、私を助けると思つて何うかして上げて下さらなくちや可けま  
せんよ。出来ますか？

ヘルマー 出来ないことも無いが。未亡人でお出でのやうですね。

リンデン はあ。

ヘルマー で、會社などの業務に御経験がありますか？

リンデン 充分ございます。

ヘルマー ははあ、それなら、何處かへお世話が出来さうですな。

ノラ (手を拍ちながら) そうら御覽なさい！そうら御覽なさい！

ヘルマー ちやうどいゝ時にお出でになつたのですよ、奥さん。

リンデン ほんとうに、お禮の申しやうもございません。

ヘルマー (微笑しながら) 何ういたしましたして(外套を着る)私はちよつと御免

蒙りますから――

ランケ 待ち給へ、私も一緒に行かう。(廊下から毛皮の外套を取つて来て火に

暖める)

ノラ 直ぐ歸つて来て下さい、よござんすか？

ヘルマー ほんの一時間ばかり。

ノラ あなたもお立ち？クリスチナさん。

リンデン (外出の出度をしながら) え、是れから下宿を探さなくちやなり

ませんか。

ヘルマー 下は御一緒に出かけませうか。

ノラ (リンデンの世話をしながら) 家に明いた部屋があるといゝんですけ

どねえ、とても都合がつかますまい。

リンデン とんでもないこと、こちらへ、そんな御迷惑をかけて濟むもの  
ですか。さやうなら、あなた、色々と御親切にありがたう御座いまし  
た。

ノラ さやうなら、又すぐお目にかゝりますよ。無論今晚また入らつし  
やるでせうね？それからあなたもね、先生。え？達者で居たらです  
つて？お達者に極まつてるぢやあ、ありませんか。着物を着て、暖に

さへして居らつしやれば大丈夫ですよ。(皆々話しながら廊下へ出て行く。外では梯子段の上で児供等の聲が聞こえる) 来た。 (ノラ走つて行つて扉を開ける) お這入り。 (屈んで児共に接吻する) お、い、子。 御覽なさいよ、クリスチナさん。 かあい、でせう？

ランク 吹きさらしでお喋りをして居ちやいけませんよ。

ヘルマー さあ、リンデンの奥さん、母親でなくちやあ、此の寒さにあゝして居られるものぢやありません。

(ランク、ヘルマー、リンデン夫人皆々階段を下りて行く。アンナが児供を連れて室に入る。ノラも一緒にいつて来て、扉をしめながら)

ノラ お前たち、まあ元氣だわねえ。 頬つぺたの赤いこと——林檎か薔薇の花のやうですよ(次の言葉のあひだ児供も母に話をする) 非常におもしろかつたつて？それは可かつたね。 お前がエミーと

ポブを櫓に乗せてやつて——二人一緒に？まあねえ！おや、イヴールはすつかり大人だわねえ。 アンナ、その子を少し私にお貸し、い、子の人形さん(未の子を嫁母から取つて抱いたまゝ、踊る) あいよあ。いよ。 おつ母さん今にポブとも踊るよ。 え！雪投をしましたつて？ お、私もお仲間に這入りたかつたね。 い、え、みんなさうしてお置きよ、私が脱がせてやります。 あ、ね、私にさせてお呉れ、おもしろいことねえ。 お前、寒さうぢやないか、児供の部屋へお出で、ストーヴの上にコーヒーの熱いのがありませうよ。

(嫁母は左手の室にはいる。ノラ児供の着物などを脱がせて、そこら中に投げ出す。其のひだ児供等同志話し合ひまたノラとも喋べる) さう！大きな犬が家まで追つかけて来たつて？けれども坊やに喰ひつかなかつたつて？ あ、犬はね、坊やのやうない、子に喰ひつきません。 いけません

よ、イヴールは其の包を覗いては。何だらうねえ見たか無くつて？  
あゝ、用心おし——喰ひつくよ。え！おつ母さんも一緒に遊ぶのか  
い？何をして遊ぶうね。隠れんぼ？よし〜隠れんぼをさせよう。  
ポブが先へ隠れるのですよ。私が？ちやあ私が先に隠れますよ。

(ノラ兒共と一緒に、其の室及び右手隣の室で笑ひ聲叫び聲の大騒かす  
る。ノラ終にテーブルの下に隠れる。兒供等が駈け込んで来て探すけれども  
見つからぬ。其のうちノラのくす〜と笑ふ聲を聞きつけ、テーブルの方へ駈  
けて来て、覆ひの布を持ち上げ、母を見出す。一しきり大騒ぎ。ノラは兒供を恐  
ろしがらすやうな風で這つて出る。また一しきり大騒ぎ。其のあひだ廊下へ  
の扉を叩く音が聞こえてゐたが、誰も氣のつかぬ様子。やがて扉が半ば明いて、  
クログスタッドが出て来る。しばらく待つてゐると、遊び事がまた始まる)

クログスタッド 奥さん、御免下さい。

ノラ (押しつけたやうな叫聲で振り向き、半ば飛び上る) お！何か御用ですか？

クログスタッド 失禮致しました。外の戸が明きかゝつゝ居ましてね。

誰かしめることを忘れたのでせうが——

ノラ (立ち上りながら) 宅は今留守ですよ。

クログスタッド 承知して居ります。

ノラ ちや何ういふ御用で入らつしやつたの？

クログスタッド あなたに少しお話し申すことがありましてね。

ノラ わたしに？(兒供の方へ向いて柔かに) アンナの方へ行つてお出で。

何ですつて？いゝえ、餘所のおぢさんは母あちやんを何うもしやし  
ませんよ。あの人か歸つたらまた遊びませうね(兒供を左手の室へや  
り跡をしめる。心配さうに、息を潜める) わたしにお話があると仰しやるの  
ですか？

クログスタッド はい。

ノラ 今日？だつてまだ一日には、ならないぢやありませんか——  
 クログスタッド なりません。今日はクリスマスの宵祭です。そこで、あ  
 なたのお考へ一つで、クリスマスが愉快にも不愉快にもやれやうと  
 いふお話です。

ノラ 何うなさらうと言ふんです？今日は私少しも用意してゐません  
 から——

クログスタッド 其の方は今御心配には及びません。御話は外の事です  
 が、ちよつとの間お差つかへありますまいか。

ノラ さうですね、差つかへは無からうと思ひますが、たゞ——  
 クログスタッド よろしう御座います。私この向ふの料理屋に待つてゐ  
 て、御主人のお出かけになるのを突きとめたのですからな。

ノラ それで？



— マスターの氏元庸肥土





土肥庸元氏のマール

ノラ 今日？だつてまだ一日にはならないぢやありませんか——  
クロゲスエッド なりません。今日はクリスマスの宵祭です。そこで、あ  
なたのお考へ一つで、クリスマスが愉快にも不愉快にもやれやうと  
いふお話です。

ノラ 何うなさらうと言ふんです？今日は私少しも用意してゐません  
から——

クロゲスエッド 其の方は今御心配には及びません。御話は外の事です  
が、ちよつとの間お差つかへありますまいか。

ノラ さうですね、差つかへは無からうと思ひますが、たゞ——  
クロゲスエッド よろしう御座います。私この向ふの料理屋に待つてゐ  
て、御主人のお出かけになるのを突きとめたのですからな。

ノラ それで？

クログスタッド 一人の御婦人と。

ノラ それが何うしました？

クログスタッド 若しやあの御婦人は、リンデンの奥さんといふのぢあり  
ませんかな。

ノラ え。

クログスタッド 此方へお出でになつた許り？

ノラ え、今日。

クログスタッド 御懇意にしてお居でなさるのでせう？

ノラ ええ。ですけど、あなた何ういふ譯で——

クログスタッド 私わたくしもあの婦人とは、もと知り合ひでしてな。

ノラ それは聞きましたよ。

クログスタッド あ、すつかりお聞きなすつた？ そんな事だらうと思つ

た。ぢやあ打ち明けて申しますが、あの方が今度銀行へお這入んなさるのですね？

ノラ クログスタッドさん、何で、あなたは、そんなに嵩にかゝつて吟味なさるの？ 私共にとつちやあ使用人の癖に。だけど聞きたきや聞かせて上げます。はい、リンデンの奥さんは銀行へお勤めになるのですよ。それからあの方を推薦したのは私。わかりましたか、クログスタッドさん。

クログスタッド やつぱり、思つた通りだな。

ノラ (歩き廻りながら) ねえ？ 是れでもちよつと勢力があるでせう？ 女だからつて何時もさう——ね、クログスタッドさん、下に立つ者は氣をつけて、失敬な事のないやうにしないと、私のやうに——

クログスタッド 勢力のある場合にですか？

ノラ ええ。

クログスタッド (調子をかへて) 奥さん、何うか、あなたの勢力で私をお助け下さる譯には参りますまいか。

ノラ ええ？ 何ですつて？

クログスタッド お慈悲で何うか、目下に立つてる私ですから、銀行の地位が保つて行けるやうに、御盡力下さいませ。

ノラ 何せそんな事を仰しやる？ 誰もあなたの地位を奪やしないでせう？

クログスタッド あ、そんなにしらを切らなくともようがす。あなたのお友達が私に會ふのを嫌がつてることも、その爲私が逐ひ出され無くちやあならないことも、私はよく呑み込んでゐますよ。

ノラ だつて私や決して——

クログスタッド まあ、さ、ちよつとの事です。まだ後れては居ませんから、一つ、そんな目にはないやうに、あなたの勢力を揮つて下すつたらと、御相談申すのです。

ノラ ですけどクログスタッドさん、私何なにも勢力なんかありやしません。

クログスタッド 勢力が無い？しかし唯今伺つた所ぢやあ——

ノラ 勿論そんな意味ぢや無かつたのですよ。私なんぞ——何うして

主人あるじに對してそんな勢力があるものですか。

クログスタッド いや、御主人の事は學校に居た頃からよく知つて居ますが、妻君に對してさう強硬な態度を取る方ほうぢやありませんな。

ノラ あなた手前共に對して失敬なことを仰おつしやるなら、お歸りを願はなくちやなりませんよ。

クログスタッド 思ひ切りがようがすな、奥さん。

ノラ 私わたくしもう貴方を怖こはがつちや居ゐませんよ、新年が濟むと早々すつかり片かたをつけて了しまひますから。

クログスタッド (我慢しながら) まあ、お聞きなさい、奥さん。場合によつちやあ私は命賭いのちがけでも銀行のあの少ちつぼけな地位を争つて見せますせ。

ノラ え、そんな風に見えますよ。

クログスタッド 單に金錢のため許はかちやありません、金のことは何うでもいゝ。もう少し違つた意味があります。さうさなすつかり言いつちまつた方ほうが良いか知らん。無論誰も知つてることだから御承知でせうが、五六年前、私に取つて少し面倒な事が持ち上りましてね。

ノラ 何か其んな話を聞いたやうですね。

クログスタッド 其事件は裁判沙汰とまではならなかつたが、併し其れからといふもの私の前途はばつたり塞がつて了しまひました。そこで御

承知の通りの事業を始めたのですがね、つまり何か行らなくちやあ  
 ならなかつたのです、そして自分ではさう拙かつたとも思はないん  
 です。けれども、もうあの方はすつかり止さなくちや仕方がありま  
 せん。悴共が段々大きくなつて見ると、彼等のためにも、是非出来る  
 丈の信用は取り返して置いて遣らなくちやなりませんからな。で、  
 銀行に入つたのがその第一歩と言ふ譯なのです。處が、そこへ此方  
 の御主人が出てお出でなすつて、折角登りかけた梯から溝泥の中へ  
 突き落してお了ひなさらうと言ふんだ。

ノラ ですけど、クログスタッドさん、實際私は、あなたを救ふ方はないんで  
 すよ。

クログスタッド 救つて下さる氣が無いんだ、併し是非共救つて戴く方法  
 はありますな。

ノラ 借金の事を宅にお話なさらうといふのですか？

クログスタッド ふむ、若し左様するとしましたら？

ノラ そんな不徳義なこと（目に涙をためて）私が悦んで誇にしてゐる秘  
 密を——そんな淺ましい非道い仕方で、それもあなたの口から打明  
 けて了ふなんて！そんな事になつたら私は何んなにか不愉快な身  
 の上になるでせう？

クログスタッド 只不愉快な許ですか。

ノラ（激して） まあ、行つて御覽なさいな、一番困つて來るのはあなただ  
 から。宅ではあなたを悪人だと思ふでせう？さうするとあなたの  
 地位は無くなつちまうに決まつてます。

クログスタッド いや私のお尋ねしたのは、あなたが只家庭の不愉快とい  
 ふ事許氣にかけて居らつしやるのぢやないかと言ふのです。

ノラ 萬一、宅がその話を聞いたら、無論、お金は一時に拂つちまうでせう。そして、それで、もうあなたとは關係を絶つて了ふのですよ。

クログスタッド (一步進みながら) お聞きなさい奥さん。あなたは健忘症で被<sup>しら</sup>在るやうだ。それとも實務上の事はまるで御存じないのですか。まあ私がすつかり事情を呑込ませて上げませう。

ノラ 何うしたと言うんです？

クログスタッド 御主人が御病氣の時にあなたは私の所へお出でになつて、千二百弗貸して呉れいと仰つた。

ノラ 他に懇意の方<sup>かた</sup>もなかつたものですから。

クログスタッド で、私はその金を拵<sup>こしら</sup>へて上げませうとお約束をしました。ノラ として拵へて下すつたぢやありませんか。

クログスタッド 其のお約束をする時に私は條件を持ち出しましたよ。

あなたはその時御主人の病氣に氣を取られて、旅行の費用が拵<sup>こしら</sup>へた一心でお出でになつたから、細かい事には碌々氣が附かなかつたかも知れません。ですから私がそれを此處でお話して上げます。

其の時の約束は、私が書いた手形と引換にその金を拵へて差上げやうと言ふのでしたな。

ノラ え、それで私は其の手形に署名しました。

クログスタッド それに相違ありません。けれども其の時私<sup>わたし</sup>は後から二三行附け加へて、あなたの御親父<sup>おんおや</sup>さんに保證して頂くやうにしました。そして御親父さんが、それに署名をなさる筈になつてました。

ノラ 署名する筈ですつて？ 署名したぢやありませんか。

クログスタッド 日附の處を明けて置きましたらう？ 即ち御親父さんが、

自身で署名の上に日附をお入れなさるやうになつて居ました。御記憶ですか？

ノラ えゝ、さうのやうでしたね――

クログスタッド 其處で私は其の手形をあなたに差上げて御親父さんの方へ御送りを願つた。さういふ順序でしたな？

ノラ えゝ、

クログスタッド それで無論あなたは直ぐ其の通りになすつたでせう？  
といふのは、五六日経たない中に其の手形を私のところへお返しになつて、ちやんと御親父さんの御名前が座つてゐたからです。そこで私は金をあなたにお渡し申しました。

ノラ それで何うしたと言ふんです？私、拂ふものはきちんくとお拂してゐるぢやありませんか。

クログスタッド 先づねえ。所で、話の要點に戻ると、其頃あなたは大變お困りのやうでしたね、奥さん。

ノラ 實際さうでしたよ。

クログスタッド あなたの、御親父さんは大病だと言ふし。

ノラ とても助からないといふ時でしたからね。

クログスタッド そして間もなくお亡くなりになつたでせう？

ノラ えゝ。

クログスタッド 何ですか？奥さん。あなたは御親父のお亡くなりになつた日を覚えてゐらつしやいますか。月の幾日といふことを？

ノラ 父は九月の二十九日に亡くなりました。

クログスタッド 確にさうです。私はすつかり檢べて來ました。所で、茲に一つ重大なことが起つて來る――（手形を取り出す）何うも私には

理由がわからない。

ノラ 重大な事つて何です？ 何んなことか知りませんが――

クログスタッド 重大な事と申すのはね、奥さん、御親父が此手形に署名なすつたのは、お亡くなりになつてから三日後のやうですせ！

ノラ 何ですつて？ 私未だ理解らないんですが――

クログスタッド 御親父は九月の二十九日にお亡くなりになつたでせう？ 處が、御覽なさい、此の署名は十月の二日になつて居ます。重大な事ぢやありませんか、奥さん。ノラ黙つてゐる、何か理由がありますか？ (ノラ尙黙つてゐる)その上注目すべき事は、十月二日といふ文句とその上の年號とが何うも御親父の手蹟でないやうに見えます。何處か見覚えのある筆ですね。が、これの説明がつきます。御親父は署名なすつた時に、日附を入れることをお忘れなすつた、それをお亡くな

りの後、まだその事の知れない時に、誰か勝手に日附を入れたのでせう。尤もそれ丈なら一向悪い事ぢやありません。大事なのは名前ですからな。名前の方は確でせうな奥さん？ 實際あなたの御親父が御自分の手でちやんとこゝへ名をお書なすつたんでせうな？

ノラ (暫く黙つて居て、頭を後ろへそらせ、決然たる様子でクログスタッドを見る) いゝえ、父の名を書いたのは私です。

クログスタッド もし！ 奥さん、あなた、それは危険なことを仰るもんだが、ようございますか？

ノラ 構はないでせう？ お金はぢき拂ひますから。

クログスタッド 尙一つ伺ひたいことがあります。何故此の手形を御親父の方へお送りにならなかつたのですか。

ノラ それは、送るわけに行かなかつたからです。父は大病でせう？そ



こへ署名の事なぞ言つてやるとなると、金の要り道も話さなくちやなりませんから、宅が病氣で命が危ないといふやうなことは、とても言つてやられなかつたのです。

クログスタッド そんなら旅行をお止しなすつたら、よかつたでせう。

ノラ 何うして、そんな事ができるものですか。其旅行一つで宅の命は何うにもなるといふ場合でしたもの。到底止めるわけには參らなかつたのです。

クログスタッド で、あなたは、私に對して詐欺をしてお出でになるとは氣が附かなかつたのですか。

ノラ そんな事は私、何とも思はなかつたのですよ、あなたのことなんざ、まるで考へて居ませんでした。あなたは宅が大病であると知りながら残酷な面倒なことばかり言つておよこしになるもんだから、私

我慢が仕切れなかつたのですよ。

クログスタッド 奥さん、あなたは現に行つてお出でなさる事が何んな事だか御存じないやうですね。私が斯うやつて社會から投げ出されたのも、あなたと同じ事をしたからですせ。

ノラ まあ、此人は！妻君の命でも救ふために立派なことをしたやうな顔をして。

クログスタッド 何のためだらうが、そんな事は法律は關係しません。

ノラ それちや其の法律は大間違の法律です。

クログスタッド 間違つて居やうが居まいが、此證書を裁判所へさへ持ち出せば、あなたは法律の罪人におなんなさらくちやならない。

ノラ そんなことがあるものですか。あなたの仰るやうだと、娘が、大病の父に苦勞をさせまいとする権利はないわけですね、——妻が夫の

命を救ふ権利もないわけですね。私、法律のことはよく知らないけれど、屹度何處かに今言つたやうな事が許してあると思ひますわ。それをあなたは御存じないんだから——あなたのやうな法律家が！ あなたはきつと碌な法律家ぢやないんですね、クログスタッドさん。

クログスタッド　そうかも知れません。けれども、斯ういふ事になると——今起つてるやうな事件になるとよく知つてゐますよ。わかりましたか？ それぢやあ宜しい。それから先は御随意になさいませ。只申上げて置きたいのは私が尙一度泥溝へ落ちるとなると、貴女も御一緒にゐらつしやらなくぢやありませんよ。

(一寸腰を屈めて廊下から出て行く)

ノラ　(暫く考へながら立つて居て、そして頭を立てる) 何でそんな事が！ 彼奴、私

を威嚇さうと思つてやがる。私、そんな間拔ぢやないよ。(子供の衣服を壘み始める。その手を止めて) けれど——？ 否、そんなことの有らう筈はない。愛のためにしたんだもの！

小供　(左手の扉の處で) お母さん、餘所のお爺さん、もう行つちまひましたよ。

ノラ　あいあい、知つてますよ。けれどね、餘所の小父さんの來たことを誰にも言つてはいけませんよ。わかりましたか。お父さんにだつていけませんよ。

小供　え、だから一緒に遊びませうよ、ねえお母さん？

ノラ　いゝえ、今はいけないの。

小供　ねえ、遊びませうよ、お母さん、約束したんですもの。

ノラ　さうですけどね、今は不可ませんよ。乳母の居る方へいらつしや

い、お母さんは澤山御用があるから。さ、さ、いらつしやい。溫和おとなしくして居るんですよ、可いいかえ！（小供等を静に向ふの部屋の方へ押しやり、あとの戸を閉め切る。ソファに座り、刺繡を取り上げて二針三針動かして直ぐ止める）そんな事があるものか！（仕事のを投げ出して立ち上り、廊下の扉の方へ行つて呼ぶ）エレン！クリスマス、ツリーを持つてお出で！（左手のテーブルの處へ行つて抽出を開ける、また其の手を止める）何んでそんなこと、何どう考へたつてそんな筈はない。

エレン（クリスマス、ツリーを持つて）何處へお立て申しませうか。

ノラそこへ、部屋まなの眞中の處へ

エレン 何かまだ他ほかのものを持つて参りませうか。

ノラ 否い、可えくてよ、それですつかり揃ひます。

（エレンは木を置いて出て行く）

ノラ（忙しげに木を飾りながら）こゝは蠟燭にして、向ふの方へ花を懸ける。彼奴あいつ本當に怖おそくない奴！つまらない事々。何でもありやしない。クリスマス、ツリーを斯うやつて綺麗に飾つて。あなたの氣にさへ入れば、何私でもしますわ。ねえあなた。歌うたも歌うたふ踊おどりもおどる、それから――

（ヘルマーが一束たばの書類を持つて廊下の扉の處から入つて来る）

ノラ あら！もうお歸かえんなすつて？

ヘルマー あゝ。誰か來て居たかえ？

ノラ 此所へ？ 否い、え。

ヘルマー 奇體きたいだな。クログスタッドが此家うちから出て行つたが。

ノラ お會あひなすつて？ さうく、何なんでしたつけ、一寸の間來てゐたのですよ。

ヘルマー ノラ、お前の様子でちやんとわかるよ、彼奴め、お前に口をきかせやうと思つて來たな？

ノラ ええ。

ヘルマー で、お前はそれを自分の一料簡のつもりでやらうと思つたんかい？ お前は彼奴の此處に居たことを知らせまいとして居るやうだが、それも彼奴の入智慧ぢやなかつたか。

ノラ ええ。ですけどね——

ヘルマー これノラ！ 何うしてお前そんなことが出来るんだ！ あんな奴と話をして約束までするなんて、それで私には嘘をついて、ごまかさうとする！

ノラ 嘘ですつて？

ヘルマー 誰も來ないと言つたぢやないか、(指で突く眞似をして) 家の小鳥

さんは二度とそんなことを言つちやなりませんぞ。小鳥が調子の違つた歌なんか囀つちや仕様がな。 (片手に女を抱きながら) え、さうぢやないか—— 左様だらう、左様なくちやならない。(女を手放す) ぢや、もう其の事は言はないことにしやうね。(ストーアの前に座る) あゝ、静かでない、氣持だな！ (持つてゐる書類を覗き込む)

ノラ (ケリスマス、ツリーに氣を取られて居る、暫く黙つて居て) あなた！

ヘルマー え

ノラ 私本當に、明後日のステンボルグさんの假裝舞踏會が待ち待遠しいわ。

ヘルマー 私はまた、お前が何んな珍らしいものを買つといて私を驚かすだらうと、そればかり考へてゐる。

ノラ 其の方は、全く思案に盡きて了つてよ。

ヘルマー 何うして？

ノラ いくら考へても甘い思付が出ないんですもの。何を見ても下らない、平凡な物ばかりですから。

ヘルマー ノラさんが左様いふ発見をしたんだな？

ノラ (夫の椅子の後から腕をもたせかけて) 貴方非常にお忙しくつて？

ヘルマー さうさな——

ノラ 其の書類は何の御用？

ヘルマー 銀行の用事だ。

ノラ もう？

ヘルマー 今度辭職する支配人に相談して、少し役員の出し入れなんかさせて貰つたもんだからね。其の方がクリスマス中かゝるだらう。新年になると悉皆片が付きさうだ。

ノラ ぢや、其のためですわ、可哀さうに、あのクログスタッドが——  
ヘルマー ふむ。

ノラ (尙椅子の脊の處によりかゝり靜かに夫の髪の毛を掻きながら) あなた餘り忙しくなかつたら大々的たいたいにお願いしたい事があるんですけれどね。

ヘルマー 何だらう？ 言つて御覽。

ノラ 誰だつて、あなた程趣味の高い人はゐないんだから、私今度の假裝舞踏會には思ふ様立派たてはにして行きたいと思ふんですが、あなた何ですか？、一緒にゐらしつて私が何になればいゝか決めて、衣裳を見て下さるわけにはいきませんか？

ヘルマー あはあ！家の剛情屋さんが、途方にくれて悄悄しやう始めて來ましたね。

ノラ えゝ。何うかね。あなたが入らしつて下さらくちや何うにも

ならないんですもの。

ヘルマー よし、よし、考へて見やう、その中何か見つかるさ。

ノラ まあ可かつたあなた親切ですわね！(またクリスマス、ツリーの方へ行く。立ち止まる) 赤い花がいゝこと！ですけどね、あなた、あのクログスタッドが悪いことをしたといふのは、大變怖ないことでしたか？

ヘルマー 私書偽造と言ふ丈だがね、それは何んなことか知つてるかい

ノラ 何か己むを得ない事情でそんな事をしたんでせうね？

ヘルマー さうか、又は、よくある奴でほんの不注意からそんな事になつたのかも知れない。私、何にも、それ一ツの過位で絶對的に人に難癖をつける程冷酷ぢやないんだがね。

ノラ でせう？私もさう思つてますわ。

ヘルマー たゞ自分の罪を白状して、それだけの刑罰を受けちまへば、それですつかり性格を持ち直すことが出来るんだが。

ノラ 罪をですつて？

ヘルマー 所がクログスタッドは白状といふことをしなかつた。彼奴は小細工やごまかしで逃れやうとした。それが彼奴を腐敗させて了つたんだ。

ノラ あなたそれでは何ですか——？

ヘルマー ま、考へても御覽！一度良心でさういふ事をした奴は、一生嘘をついて眞面目な顔をして、居なくちやならない。理を非に言ひ曲げて、やつて行く。彼奴は自分の妻子に迄假面を被つて居なくちやならないんだ。第一兒供にとつて、これ程悪いことはないだらう。ノラ 何故です？

ヘルマー 何故つてお前、そんな嘘言偽妄が這入つて來ると、家庭の空氣はすつかり腐つて了つて、毒を有つて來るからな、兒供が呼吸する度に、罪惡の微菌を吸ひ込むやうなものだ。

ノラ (夫の後の方へ近寄つて行つて) さう思ひますか？

ヘルマー 辯護士をしてる間に私は幾度もさういふ例を見たよ、子供の時分に悪いことをする奴は、十中八九まで母親が嘘をつくのにな原因してるやうだ。

ノラ へえ——母親がですか？

ヘルマー 先づ概して母親の方から來るやうだな。けれども無論父親の感化だつて同なじ事には相違ない。あのクログスタッドなんざ、これまで何年となく嘘と偽善の生活で自分の兒供を毒害して來たんだ。それさ、私が彼奴を道徳的に破産した奴といふのは (兩手を女の

方に差出して) 其んな理だから、家のノラさんは、もう彼奴の辯護なんか誓つて已めなくちいやけないよ。さあ誓ひの印に握手しやうか。これこれ、何うしたんだ。手をお出し。それでよし、それで契約濟だよ。實際私は彼奴と一所に仕事をするには不可能だつたんだ。あゝいふ奴に會ふと私は體が痛んで來るほど苦しいからな。

(ノラは自分の手を退いてクリスマス、ツリーの向ふ側へ行く)

ノラ 此の部屋は暑うござんすことね、私まだ澤山爲ることがある。

ヘルマー あゝ、私も夕飯までに此の書類の中から必要な分丈すつかり見て置かなくちやならない。それからお前の衣裳のことも考へなくちやならないし。クリスマス、ツリーに金紙で下げるものも何か思ひ付くかも知れない (女の頭に手を置いて) 家の大事な小鳥さん。

(ヘルマー自分の室に入り後の扉を閉める)

ノラ (暫く間を置いて柔かに) 大丈夫そんなことはない。あらう筈がない。  
そんなことがあつて堪<sup>たま</sup>るものぢやない。

ナンナ (左手の扉の處で) お小さいのが、お母さんの方へ參りたいんです  
つて、温和しく左様言<sup>い</sup>つてらつしやるんですよ。

ノラ いけませんよ、いけませんよ、此處へよこさないで置いておくれ。

お前の方に止めておいておくれ、可<sup>い</sup>いかえ、アンナ!

アンナ 畏<sup>かしこま</sup>りました。(扉をしめる)

ノラ (恐怖で顔が蒼白くなつて) 私の子供を腐敗<sup>はい</sup>させる! 私の家庭に毒を  
撒<sup>ま</sup>く! (ちよいと句切を置いて頭<sup>かしこ</sup>を上げる) 嘘! 嘘! そんなことがあるも  
のか!

## 第一幕

前幕と同じ室、隅、ピアノの傍にクリスマス、ツリーが所々撈り取られて、燃  
えさしの蠟燭のついたまゝ、立つてゐる。ノラの外出仕度<sup>そとでした</sup>のものがソ  
ファの上に置いてある。

(ノラは落ちつかない様子で歩き廻つて居る。ソファの傍に立ち止り、  
外套を取り上げて、また下に置く。)

ノラ 誰か来たやうだ (廊下の方へ行つて、聞耳を立てる) 誰も来やしない。  
今日はクリスマスだから来る人は無いだらう。明日<sup>あした</sup>だつて来やし  
ない。けれども、ひよつとすると——(扉を明けて外を見る) さうぢやな  
かつた、郵便箱には何もありません、空<sup>から</sup>つぽ(前の方へ出て来て)私、馬鹿  
な事を考へるわね。あいつ私を嚇<sup>おど</sup>かさうと思つてるに違ひない。  
そんな事になる氣づかひはありはしない。出来ない事だもの。だ



つて私には兒共が三人も居るぢやないか。

(アンナが左手から大きなボール箱を持って這入つて来る)

アンナ 踊衣裳の箱をやつと見つけました。

ノラ 有りがたうよ、テーブルの上に置いてお呉れ。

アンナ (さうする) ですけども大變ひどくなつて居ります。

ノラ 仕やうがないね、ずだぐに引つ裂いてやれ。

アンナ いけませんよ。わけなく直ります——ちよつとの間待つて居らつしやい。

ノラ ぢや私、リンデンの奥さんにお手傳を頼んで來やう。

アンナ またお出かけなさいますか？ 此んな天氣にまあ、お風を召したら何うなさいます？

ノラ 風よりも、もつと悪い事があるかも知れないよ。兒共は何うして

ゐるい？

アンナ みんななクリスマスのお土産を持つて、遊んでゐらつしやいます。

お可愛さうにね。ですけども——

ノラ 私の事を聞くかえ？

アンナ それは、もう、ねえ、何時もお母さまと御一緒に入らつしやつたのですから。

ノラ さうねえ。けれどもアンナや、是れからはね、私、あんまり兒共と一緒にには居られませんよ。

アンナ それはもう、お小さい内なら、何うにでも、仕つけやう一つでございますからね。

ノラ さういふ風に仕つけられるとお思ひかえ！ 母親が全く居なくなつたら忘れて了ふだらうか？

アンナ まあ、何を仰しやいます。居なくなつたらですつて？

ノラ あのねえ、アンナ——私いつもさう思ふが——何うしてお前は、自分の児供を他人にやる事が出来たえ？

アンナ ノラ様をお育て申すことになつて否應なし、さうしたのでございます。

ノラ けれども何うして其の決心がつかしました？

アンナ それはあなた、そんないゝ口が見つかつたのでございますもの。女の身で、年は行かず、頼る所はなし、不幸つゞきでゐたのでございませうから、何だつて、見つかつたものを取り逃してはなりません。あの薄情男めは、何一つ私の世話をしやうともしなかつたのでございませうよ。

ノラ それでは、お前の娘さんはお前を忘れて了つただらうね。

アンナ 所がきうでございませぬよ、奥さま。忘れないものと見えまして、彼れが聖體式を受けました時と結婚しました時には手紙をよこしました。

ノラ (アンナを抱きながら) ねえ、婆や、お前も年を取つたねえ——私小さい時は、ほんとに母も及ばない世話になつたつて。

アンナ あの頃のノラ様はほんとにお可哀さうでしたよ、おつ母さまは入らつしやらず、私かたよりだつたのでございませうからね。

ノラ 私の児供が、また、母を無くするやうなことがあつたら、お前屹度、何だらうねえ——よさうく、馬鹿らしい。(箱を開ける) 児供の方へお出で。さあ是れから——明日は私何んなに綺麗だか御覽よ。

アンナ 屹度明日の舞踏會には、ノラ様より綺麗な方は無いに極まつて居りますよ。(左手の室にはいる)

ノラ (箱から衣裳を取り出す、けれ共直ぐまた下に投げ出す) あゝ、思切つて出て行つちまつたら。誰も來なければいゝがねえ。其れまで何事もないで居て呉れるといゝがねえ。馬鹿なこと、誰れも來やしない。考へないでさへ居ればいゝ。何ていゝマフだらう。綺麗な手袋だこと、綺麗な手袋だこと。えゝ、あつちへ行つちまへ、あつちへ行つちまへ。一、二、三、四、五、六——(叫び聲を立てて) おや、來たよ——(扉の方へ行つて、躊躇しながら、そこに立つ)

(リンデン夫人が廊下で外出仕度そとで仕度のものを脱ぎ遣入つて来る)

ノラ おやあなた？ クリスチナさん。外には誰れも來ませんでしたか？ まあよく入らつしやつたわね。

リンデン 私の所へお見えになつたさうですね。

ノラ えゝ。ちやうど通りかゝつたものですからね。私、あなたに是非

手傳つて頂きたい事があるんですよ。さあお掛けなさい、ソーフアがよござんす——さう。明日の晩ね、此の二階に居る領事のステンボルグさんで假裝舞踏會があるのですよ。それでね、トルバルドが私にナポリの漁師娘リヤウシむすめになれといふんです。そして私がイタリアのカプリで習つたタランテラ踊おどりをやれといふのですよ。

リンデン さうですか、——立派な、もう、本物ですわね。

ノラ えゝ、トルバルドがそれがいゝと言ひますから。御覽なさい、是れが其の衣裳ですよ。イタリアで私に拵へて呉れたのです。けれど、もう斯んなにぼろぼろになつちやつて、何うしていゝか——

リンデン あなた、直ぐなほせますよ。ただ縁へりが所々ところほぐれた許しですもの。針と絲がありますか？ あゝ、此處こゝにあります。ノラ まあ、濟みませんねえ。

リンデン では明日は、すつかり衣裳をお着けなさるのね、ノラさん。何んなにか——私、拜見に來ますよ、ちよつとでいゝから、お仕度の出來上つた所を。おや、お禮を言ふのを忘れてゐた、昨晚は御馳走さま。

ノラ (立ち上り室を向ふへ歩く) いゝえ、昨日はね、不斷ほどおもしろくなかつたのですよ。もう少し早く入らつしやるとよかつた。トルバルドは實際、家庭を愉快にする腕がありますよ。

リンデン あなただつて、さうに違ひありません。でなければ、お父うさんの子ぢやありませんもの。それはさうとね——ランク先生は何時もあんなに、昨晚のやうに洗んでゐらつしやいますか？

ノラ いゝえ、昨晚は特別でしたのよ。あの方はね、恐ろしい病氣を持つてゐます。脊髄癆ださうです、かわいさうにねえ。噂ではあの方のお父さんが非道い放蕩をなすつたのですつてね——妾を置いたり

色々な事をして——其のためにお子さんが幼少から病氣だつたのですつて。そんな話ですよ。

リンデン (縫物を前掛の上に落としながら) まあ、ノラさんあなたは、何うしてそんな事をお知りです？

ノラ (歩きながら) それは、あなたは是れでも兒供の三人も持つてゐるのですもの、醫者のことを知つてゐる婦人だつて出はいり爲やうぢやありませんか——其の人たちが色々な事を話します。

リンデン (縫物をつゞける。ちよつと經つて) ランク先生は毎日こちらへ見えますか？

ノラ えゝ、毎日。あの方はね、トルバルドが兒供の折からの友人で、私も大變御懇意にして居るのですよ。全て家のもの同様にして居ます。リンデン ですがね、あなた——あの方は全く眞面目な方ですか？ 空世

辭を言ふ人ぢやありませんか？

ノラ あべこべですよ。何うしてそんな事をお考へなすつて？

リンデン 昨日あなたがお引き合せ下すつた時に、あの方は、何度も私の名を聞いたと言つたでせう？所がお宅では少しも私を御存じなかつたでせう？それで何うしてランク先生が——？

ノラ あ、それはランク先生の言ふ通りですの、クリスチナさん。全體トルバルドが私を愛してること、言つたら、一通りや二通ぢやないんですからね、私の體を全く自分のものに爲きらないと承知しないのですよ、何時も自分でさう言つてゐます。ですから結婚した當座なんか、私が里に居る頃懇意にした人の名でも言はうものなら、もうすぐ妬きもちをやくのですよ。そんな風で自然に其の方は言はないやうにして置いたのですけどね、ランク先生にはよく昔の事なんか

話しましたよ、あの方はそれを聞くのが大變好きですから。

リンデン ですけどねえ、ノラさん。あなたはまだ、何うしてもねんねえですよ。私、あなたよりは年も上だし、經驗も幾らか餘計に積んでゐますから、申しますがね、あなたはランク先生との關係を、きちんとして置く必要がありますよ。

ノラ 何んな關係？

リンデン あなたは昨日、金持で、あなたを崇拜して居る人にお金を拵へて貰ふといふことを言ひましたらう？——

ノラ はあ、實際居ない人にねえ、お氣の毒さまでせう？それが何うしました？

リンデン ランク先生は金を持つてますか？

ノラ え、持つてます。

リンデン　そして、遣る人と言つては誰れも居ないのでせう？

ノラ　誰れも居ません。ですけれど――

リンデン　それで以て、あの人は毎日この家へ来るでせう？

ノラ　え、毎日。

リンデン　私は、あの人が今少し立派なたしなみを持つて、呉れるといふと思ひますよ。

ノラ　私まだあなたの仰しやる意味が分らない。

リンデン　白を切つちや可けませんよ、ノラさん。あなたまだ千二百弗のお金をあなたに貸した人が誰だか私に判断がつかないと思つてゐらつしやつて？

ノラ　は、は、何うかして居らつしやるの？あなたさういふ考でゐたのですね。毎日家へ来るお友達から借金をするなんて！何んなに

か苦しい事でせうねえ。

リンデン　ぢやあ本當にあの人でないのですね。

ノラ　え、本當に。そんな事は今まで考へて見たこともありません――

―それに其の頃はまだ、あの方には、人に貸すやうな金は無かつたのですよ。財産の手に入つたのは後のことですよ。

リンデン　それなら尙の事、其の方があなたのために仕合せだつたと思ひます。

ノラ　全く私、ランク先生の事なんぞは、考にはいらなかつたのですよ。

ですけれど若しあの方に頼んだら、屹度――

リンデン　けれども、あなた頼む氣は無論ないのでせう？

ノラ　無論ですとも。そんな必要のある譯はないのですから。けれども屹度何ですよ、若しランク先生に話したら。

リンデン 御主人の居らつしやらない所で？

ノラ 私ね、今一つ切りぬけなくてならない事がありますの、それも矢つ張り主人の居ない所で、是非其の方の片をつけなくちやならない。

リンデン それがよござんすよ。私、昨日もさう言つたでせう？ たゞー  
ノラ (あちらこちらと歩きながら) こんな事を運ぶのは、女よりもずつと男の方がいゝけれど。

リンデン 夫なら無論さうですとも。

ノラ 下らない事(じつと立留まる) あのね、借りたものをすつかり返せば、證書は返つて来るでせうか？

リンデン 無論でせう。

ノラ 返つて來たら、あの汚れた嫌なものをすたくくに引き裂いて、焼い

て了ひたいわ！

リンデン (じつとノラを見て、仕事の物を下に置いて、徐々と立ち上がる) ノラさ

ん、あなたは私に何か隠して居らつしやるのね？

ノラ さう私の顔に見えてゐますか？

リンデン 昨日の朝からこつちへ、何か變り事がありましたね？ 何です？ ノラさん。

ノラ (リンデン夫人の方へ行きながら) クリスチナさん—— (聞耳を立てる) しつ！ トルヴルドが歸つて來ましたよ。さ、乳母の部屋へ行つて、頂戴。あの人は裁縫なんか見てゐることの出來ない人ですからね。それから、アンナに手傳はせて下さいな。

リンデン (手近のものを取り集めて) はい。ですけれども、すつかりお話を聞くまでは歸りませんよ。

(リンデン夫人は左手に出て行く、引ちがへにヘルマーが廊下から這入つて来る)

ノラ (走り寄つて迎へる) 何んなにか、あなたを待つてたでせう、

ヘルマー 仕立屋が来て居たのか？

ノラ いゝえ、クリスチナさんですよ。私の衣裳を手傳つてゐます。今に綺麗に出来上りますから、見てゐらつしやい。

ヘルマー あゝ。私のあの考はいゝ思ひ付だつたらう？

ノラ ほんたによごんしたわ。けれども私があなたの考に賛成したのも、えらいでせう？

ヘルマー (ノラの顎の下を捉へながら) えらい？ 夫の考に賛成したのが？

まあ、よしよし、此の氣違家さん、お前の本當の意味は分かつてる。が今そんな事を言つてお前の邪魔をしてはならない。お前は是れか

ら着物を着て見るのだらう？

ノラ それから、あなたは仕事におかゝんなさるの？

ヘルマー あゝ、(一束の書類をノラに示す) 是れを御覽(自分の室の方へ行く) 今

銀行から歸つた所だ。

ノラ あなた

ヘルマー (立止りながら) えゝ？

ノラ あなたの栗鼠さんがね、大變可愛らしくして、何かあなたに願ひをすると言つたら――

ヘルマー ふむ？

ノラ 叶へて下さいますか？

ヘルマー まあ何んな事だか聞かなくちやあ。

ノラ たゞあなたが優しくして、言ふことを聞いてさへ下さればね、栗鼠



はそこら中跳ね廻つて、何んな藝當でもしますわ。

ヘルマー ちやあ、さあ、言つて御覽。

ノラ あなたの雲雀は朝から晩まででも囀つてゐますわ——

ヘルマー いや、其の雲雀は、何時でもよく囀づるやうだよ。

ノラ わたし、可愛らしい魔になつて、月夜に踊つて見せますわ、ね、あなた。

ヘルマー ノラ——お前の言ふのは、今朝遠廻しに言つてゐた、あの事ぢやああるまいな。

ノラ (傍へ寄つて来て) あの事です、よ、ね、あなた、どうか、願ひですから。

ヘルマー お前は實際、また其れを言ひ出す勇氣があるのかい？

ノラ さうなのです。ですから、私を助けると思つて、是非クログスタッドを銀行に置いてやつて下さい。

ヘルマー でもお前、私がリンデンの奥さんに向けやうと思ふのは、あい

つの地位なんだよ。

ノラ え、それは有りがたいんですけれどね、クログスタッドの代りに、誰れか他のものを免職にして下さいな。

ヘルマー 何うしたんだ、分からないにも程があるな。お前がよく考へもしないで、あんな奴に約束をするものだから、其の爲に私が——

ノラ さうぢやないのですよ、あなた。あなたの爲なのです。あの男は幾つかの悪徳新聞に關係してゐるでせう、あなたが自身でさう仰しやつたのよ。ですからあなたに何んな害をするかも知れません。私、あの男は、身震ひする程おつかなくござんすわ。

ヘルマー あゝ分かつたよ。お前は昔の事を思ひ出して、それで怖がつて居るのだね。

ノラ 何ういふ譯です？

ヘルマー 知れてるさ、お前のお父つさんの事を考へてるのだらう？  
 ノラ あゝ、さうですとも。まあ考へて見て下さい。あの悪人どもが、い  
 つも父を引合に出しては色々な淺ましい事を書き立てたでせう？  
 あの時、もしあなたが取調べに派遣されて、父を救つて下さらなかつ  
 たら、屹度もう、あれは免職になつたのですよ。

ヘルマー でもねえ、ノラ、お前のお父つさんと私とは全<sup>まる</sup>で話が違ふぜ。  
 お前のお父つさんは全然批難の無かつた人だとは言へない。私は  
 さうぢやない。また今後とも私は其の通りでゐたいと思ふ。  
 ノラ そんな事を言つたつて、悪人どものすることですもの、何を掘<sup>ほ</sup>り出  
 すか知れやしません。私たちは是れから睡<sup>ひつ</sup>じい、穩やかな家庭で幸  
 福に暮らせるのでせう？あなたも私も兒供も、ね、ですから私、お願な  
 のよ。何うかね――



東儀季治氏の肖像



ド・マスケロカの氏治季儀東

お前のお父つさんは全然批難の無かつた人だとは言へない。私はさうぢやない。また今後とも私は其の通りであたいと思ふ。ノラそんな事を言つたつて、悪人どものすることですもの、何を掘り出すか知れやしません。私たちは是れから睡<sup>ひつて</sup>じい、穏やかな家庭で幸福に暮らせるのでせう？あなたも私も兎供もね、ですから私、お願な

ヘルマー さういふ風にお前が、あいつの辯護をするから、却つて益々あいつを置いとくことが出来なくなるのだ。私がクログスタッドを出すといふ話はもう銀行へ知れてるのだから、萬一、新支配人は妻君の小指で引き廻はされたといふやうな噂が立つと——

ノラ さうすると、何うします？

ヘルマー 爲やうがあるものか、我儘女が剛情を言ひ張つてゐる間はだめです。私は人の物笑ひになつて、妻君政治で頭は上らないと言はれるだらう。さうなると、屹度其の結果は生じて来る。のみならず、今一つ私が到底クログスタッドと一緒に仕事の出来ない理由がある。

ノラ 何んな事？

ヘルマー 私は、已むを得なければ、あいつの暗い性格は我慢も出来たかも知れない——

ノラ はあ、さうでせう？

ヘルマー それから仕事にかけては立派だといふことも聞いてゐる。たゞ斯ういふ事があるのだ。あいつは、元、私の學校友達でね——よく跡で後悔することだが、其の頃の亂暴な向ふ見ずの交際をやつたものだ。茲で白狀しても構はないが——あいつと私とは、實は、其のため、君、僕のつき合をするのだ。所が、あいつめ、誰が居ても構はず、それをやらなくちや承知しない。私とさも親しげに振舞ふのを面目にしてゐやがる——トルヴルド君、君斯うし給へ、君彼あし給へといふ。それが私に取つては實際苦痛で堪らない。あのまゝで行くと私の銀行の地位は持ち切れなくなるかも知れないよ。

ノラ あなた眞面目ですか？

ヘルマー ですかつて、なせ？

ノラ そんな事は小つぼけな理由ぢやありませんか。

ヘルマー 何だつて？ 小つぼけな？ お前は私を小つぼけな人間だと考へてゐるのか。

ノラ いゝえ、其の反對ですわ。ですから私は——

ヘルマー いゝよ、お前は私の理由を小つぼけだと言たから、即私が小つぼけなのに相違ない。小つぼけな！ 宜しい。此事件はもう茲らで思ひ切て、最後の極りを附やう。(廊下の屏の所に行き、呼ぶ) エレン！

ノラ 何の御用？

ヘルマー (書類の中を探しながら) 事を極めるのさ。(エレンが這入つて来る)

さ、此の手紙を使に頼んで、持たせておやり。直ぐやるんだよ。宛はそれに書いてある。これがお錢。

エレン はい、畏りました。(手紙を持って出て行く)

ヘルマー (書類を重ねながら) さあ、剛情奥さん。

ノラ (息をしないで) あなた、あの手紙は、何んな用ですよ。

ヘルマー クログスタツドの免職さ。

ノラ 呼び返して下さいよ！まだ間にあひますから。ねえ、あなた、取り返して下さいよ。私の爲です、それからあなたの爲にも、児供の爲にも。ねえ、聞こえましたか？ねえ、何うぞ。あなたは、其の手紙が私達に何んな祟りをするか、御存知ないんですもの。

ヘルマー もう遅い。

ノラ もう遅い。

ヘルマー これ、ノラ。お前のしてる心配は、私に取つては少しも有りがたく無いんだが、それはまあ可いとするよ。何で私が悪徳記者の怨なんか恐れる必要があるか。けれども、それはそれとして、お前の言

つた事は構はない、私を非常に愛して呉れる證據なのだから。ノラを  
兩腕に取り) それで先づ片は、ついたと言ふものだ、な、ノラ。何うにだ  
つて、なるものはならせて置くさ。時機が来れば、必要に應じて力も  
出せば、勇氣も出す。まあ見てお出で、私の廣い肩で、何んな重荷が來  
ても背負つて立つてやるから。

ノラ (恐怖に打たれて) あなた、それは何を仰やるのです？

ヘルマー 重荷をすつかりといふんだ。

ノラ (決心して) あなたにそんな事は決してさせません、決して。

ヘルマー よしく、ぢやあ二人で分擔するさ、夫と妻とでねえ。ノラを  
手で軽く叩きつけながら) それで得心が行つたかい。さあ、さあ、さあ。  
神さまの鳩のやうな顔をしないで。今言つたやうな事は何でもな  
い、みんな空想だ。さあ是からタランテラをすつかり弾いて、手鼓の

稽古をしなくちや。私は、奥の私の部屋に引込んで、兩方の扉をしめて置くから、何も聞こえる氣づかいは無い。幾らでも騒ぎたい程騒いでいゝよ。(入口の所で振り向いて)それから、ランク君が見えたら、私の部屋に來るやうに言つて呉れ。(ランクに點頭して見せて、書類を持って自分の室に入り扉を閉ぢる)

ノラ 恐怖に度を失つて、地から生えたやうに突つ立つ、そしてさゝやく)あの人は、やるに違ひない。屹度、やるに違ひない。何んな事があつても構はず、やるに違ひない。可けない、そればかりは、どんな事があつても、どんな事があつても、させやしない。それを爲すやうなら、何んな事だつて出来る。あゝ、何かそんな事にならない法は無いか知ら。何うしたらいいだらう?(廊下のベルが鳴る)ランク先生よ——そんな事を爲すやうなら、何だつて出来ないことはない、何だつて、何だつて!

(ノラ、兩手で顔を撫で、氣を取り直し、扉の方へ行つてそれを明ける。ランクは外に大外套を掛けながら立つてゐる。次の臺詞のあいだ段々暗くなる。)

ノラ 先生、今日は!ベルの鳴り具合で、あなたと言ふことが分かりますよ。けど、あなた、今はトルザルドの方へ入らしつてはいけませんよ。忙がしさうですから。

ランク あなたはお暇ですか。

ノラ 私はもう、何時だつて、あなたの爲なら時間を明けてるぢやありませんか。

ランク 有りがたう。ぢや、御深切に甘へて、出来るだけゆつくりして行きませう。

ノラ 何ですつて?出来る丈ゆつくりですつて?  
ランク はあ、それが氣に懸りますか。

ノラ 何だか變な仰りやうぢやありませんか。何か變り事でもありさうですか。

ランク 前から仕度をして待つてゐた事が、來さうですよ。只こんな早く來やうとは思はなかつた。

ノラ (ランクの腕を取りながら) それは何んなことですか？ 先生。聞かせて下さい。

ランク (ストーヴの側に座りながら) 私は今、急な坂を駆け下りてるやうなものです。助けやうといつたつて、道はありません。

ノラ (ホツと長い息を引く) あなたが——？

ランク 私でなくて誰のことを言ふのですか——自分で自分を欺いて居たつて仕やうがない。家へ來る患者の中で一番みじめなのは私ですよ、奥さん。私は久しい間、自分の命勘定をやつてゐましたが

——い——破産です。一月たゝない中に私は墓場へ行つて腐らなくちやならない。

ノラ まあ！ 何て、いやなことを仰る！

ランク 事柄が全體情ない、いやな事なんですからね。只困つたことは、其外にまだ——いやなことを澤山通り越さなくちやなりません。それからもう一ツ最後の研究が残つてゐて、それが濟むと愈破滅の始まる日限も決まつて來ます。それで一言あなたに申上げて置きたいが、ヘルマー君は、あゝいふ蒲柳の質ですから、凡て恐ろしいものは避ける傾を持つてゐます。だから、あの人を私の病室へは入れたくないものです。

ノラ ですから先生——

ランク いや、來さゝないやうに仕なくちやいけません。——何んな事が



有つても、それだけはいけませんよ。來たつて戸をしめて入れない。それで私が愈可けないと決まつたら、直ぐ名札の上に墨で十字架をかいて送りますから、その時には愈恐ろしい事が始まつたと思つて下さい。

ノラ 何ですね、あなた、今日はまるで駄々つ子ですのね。今日こそ愉快にして居て下さるといふのに。

ランク 正面から死といふものに睨まれてゐてですか？そして他人の罪惡の爲に私が苦しんで、天道なんてものが何處にあるか。尤もあらゆる家庭に斯ういふ風な、人の手に了へない應報は付いて廻るものです。

ノラ (兩方の耳をふさぎながら) もう／＼そんな事は止して下さい。さあ快活になさいよ。

ランク あゝあ、要するに世の中のことと言ふものは可笑なものだ。何も知らない私の脊髄が親父の放蕩の償ひをしなくちやならないなんて。

ノラ (左手のテーブルに向つて) 多分あなたのお父さんは獨活やストラスブルグのバイがお好きであつたでせうね？

ランク えゝ。それから菌も好きでした。

ノラ さうでせうね菌も。それから、きつと牡蠣もお好きでしたらう？

ランク えゝ、牡蠣。牡蠣は勿論ですとも。ノラ それから葡萄酒、シャンペン、皆お好きでしたらう？全くみんな結構なものばかりですけど、それが脊髄を悪くするなんてね。

ランク それも悪くなつた脊髄が、自分でそんなものを喰つたわけぢやないんですからね。

ノラ えゝ。それが何よりもね。

ランク (探るやうな目付で女を見る) ふむ——

ノラ (二寸して) 何をお笑ひなすつて?

ランク いゝや。お笑ひなすつたのは、あなただ。

ノラ いゝえ。あなたですよ、先生、お笑ひなすつたのは。

ランク (立ち上りながら) あなたには思つたよりも深い所がある。

ノラ 私今日は氣が違ひさうなんですよ。

ランク さういふ様子ですな。

ノラ (兩手を男の肩にかけ) ね、先生、死の力でもあなたを私共から連れて行くことは出来ませんね。

ランク 何あに、居なくなれば譯なく忘れてお了ひなさる、去るもの日々疎しでね。

ノラ (心配氣に男の方を見る) さうでせうか。

ランク 新らしい友達を拵へて、そして——

ノラ 誰が新らしい友達を拵らへます?

ランク あなた方がさ、私の居なくなつたあとでね。現にあなたは、もう、

機敏に其の機會を捉らへやうとしてお出でのやうに見える。あの

リンデンの奥さんといふのは、昨日こゝで何をしてゐました?

ノラ あら、あんなこと、! クリスチナさんのことを嫉いてらつしやるんですか。

ランク えゝ。嫉けますね、あの婦人が私の後繼になつて此家へ這入り

込むんでせう。私が居なくなると、きつとあの人が——

ノラ 叱ッ! そんな大きな聲をして。あの方がそこに居ますよ。

ランク 今日も來てゐるんですか。そうれ御覽なさい!

ノラ 只私の衣裳を直ほしにですよ——何うしてあなた、そんなに駄々をお捏ねなさる！（ソッファにすわる）さあ、いゝ子におんななさいよ、先生。私明日はね、ほんとに甘く踊つて見せますよ。其時にはあなた、御自分の想像でね、私があなただを喜ばせたいばつかしに踊つて居るのだと思つてらつしやい——無論それはトルヴルドにもさうですけれど（箱の中からいろ／＼の物を取り出す）先生、こゝへお掛けなさい。お目にかけるものがありますわ。

ランク（すわりながら）何です、それは？

ノラ さ、これ！

ランク 絹の靴下。

ノラ 肉色。綺麗でせう？おや、何うしやう、暗くなつたこと。けど明日はね——あらいけませんよ、足の方許見てゐらつしやい。あゝ、よご

ざいます、外も御覽なすつて差支ありませんわ。

ランク ふむ——

ノラ 何うして、そんなに批評的に眺めてゐらつしやるの？私に似合はないと思ひますか？

ランク 其の點は何うだか、私には、はつきり斷言が出来ませんね。

ノラ（暫く男の方を見て居て）あなた非道いわ！（靴下で男の耳の處を軽く打つ）

それが罰ですよ（靴下をもとのやうに巻いておく）

ランク まだ外に何か珍らしいものがありますか。

ノラ もう、あなたには見せない。禮を知つてらつしやらないから（二寸鼻眼をうたひ、いろ／＼な物を探しまわす）

ランク（暫く黙つて居た後）斯うして、あなた方と親しくして、無駄口でも利いて居ると私はつく／＼さう思ひますね、これが、もしまるで此の家

に出這入りをしなかつたら、私の身體は何うなつて居るでせう？

ノラ (微笑しながら) さう思ひませう？ あなたは私共へ入らつしやると、全く、楽しさうに見えますよ。

ランク (眞直に自分の前を見ながら一層柔かな調子で) 所が、もう、すつかりそれも見切らなくちやならない——

ノラ 下らないこと、私共を見切つて行らつしやるには及びますまい。

ランク (前と同じ調子) そして後には、何一ツ禮を言はれるやうなこともして置かないし、せめて當座だけでも氣の毒だと思つて呉れる人もありません——只もう居なくなつて空虛が出来たと言ふ丈で、そんなものは代りが來さへすれば直ぐ埋まつて了ふ。

ノラ それでもし私がお頼みすることがあつたら——？ 止ませう——  
ランク 何ういふ御頼み？

ノラ あなたの御懇意の印に。

ランク ふむ——といふのは？

ノラ 止さうく。ほんとうはね——大變な大變な役目。

ランク 一生の思出に是非それをさせて下さい。私はどんなにか嬉しいでせう。

ノラ だつて、あなた、どんな事だか、ご存じないでせう？

ランク ぢや、聞かせて下さい。

ノラ いけませんよ。ほんとうに、言へないんですよ。全く大變な事ですもの——たい役目をして頂くといふのでなく、助けて頂いて、助言をして頂くといふのですからね——

ランク 愈結構です。何ういふ意味だか一寸私には見當が付かないが、まあ——お話下さい。私を信用して下さいませんか。

ノラ ほかに信用する人はありません。私に取つては、あなたが、一番眞實な友人であらうのだから、私、お話ししますわ。それでね、先生、お願といひますのは、茲に一つ事件が起りかゝつてゐましてね、それを止めて戴きたいのです。トルヴルドはあんな風ですから、私を愛してゐることといつたら全く不思議な程でせう。ですから何か起りでもしやうものなら、私のために命を捨てる位は何とも思つてゐませんの。

ランク (女の方にかゝみながら) ノラさん、あなたはヘルマー君の外には誰も——

ノラ (一寸身體を起して) 誰も——？

ランク あなたのために命を捨て、厭はないものは居ないと思つてゐらうかしやるか。

ノラ (悲しげに) まあ！

ランク 私は、——是非此の事をお別れする前に言つて置かうと、心に誓つたのですよ。こない、機會は又と無からうから——さうだ、ノラさん、これ丈申したら、私の心持は分かりましたらう？それから、他に信用するものがなければ、私を信用して下さいといふ譯も分かつたでせう？

ノラ (無造作に靜かに立ち上りながら) 一寸ご免下さい。

ランク (女の通れるやうに道を開ける。けれども自分は座つたまゝでゐる) ノラさん——

ノラ (入口の處で) エレンやランプを持つてお出で！ (ストーヴの方へ横切る) まあ先生悪いことを言つて下すつたわね。

ランク (立ち上りながら) あなたを愛してるといふことができますか、愛して

る點では誰にも譲らない。それがそんなに悪いことですか。

ノラ さうぢやありませんけれど、私にさう言つて下すつたのが悪いんです。仰る必要はなかつたのでせう？——

ランク 何ういふわけで？あなた、知つて居ましたか？——

(エレン、ランプを持つて入つて来る。それをテーブルの上に置いてまた出て行

く)

ランク ノラさん、ヘルマーの奥さん——あなた、知つて居ましたか？

ノラ だつてそんな、私が知つて居たか居ないかなんて事は言へませんわ。實際それは言へませんの。何うしてまあ、あなたはそんなに分らないんでせう？ほんとに美しく治まつて居たものをねえ！

ランク まあ、とにかく、私は、斯んなにして精神も肉體もあなたに捧げてゐるのですから、さ、お話しの先きを聞かせて下さい。

ノラ (男の方を見ながら) 話の先きをですつて——今になつて？

ランク 何うか、あなたの頼といふのを聞かせて下さい。

ノラ 今となつては、私、もう何も申し上げられませんか。

ランク いや、そんな風にして私を罰しなくてもいゝでせう。男として出来ることなら何でもしますから、あなたのために働かせて下さい。

ノラ もう、私のためになんて事は、駄目ですよ。それに、本當は私、助けていたゞく必要はありません。只私の空想でそんなことを考へただけですから。え、さうに決まつてます。無論さうですわ。(船底椅子にすわり、微笑しながら男の方を見て) あなたは、好い人なんですけれどね、先生。あんなことを仰つて、お恥しくはなくつて？こんなにランプがテーブルの上で點つてゐると。

ランク いや、さうも思ひません。が、もう私はお暇いとました方がよささうです——永のお暇いとまを。

ノラ いけませんよ。そんなことはなりません。今迄通りに入らしつてゐて下さいな。あなたがいらつしやらないと宅たくで困ることは能く御承知でせう。

ランク それは分かつてますが、あなたは？

ノラ それは知れて居ますわ、私斯うやつてあなたとお話するのが何よりも好きですもの。

ランク それだ、私に思ひ違をさせたのは。あなたは私にとつちや謎だ。殆どヘルマー君と同じやうに私が好きなのおぢやないかと、そんな事を思つたのも何度か知れません。

ノラ ね？さうでせう？自分の愛する人も好すきですけれど、話をして面白

い人も好きですわねえ。

ランク 左様——さういふ理窟りくつもありはある。

ノラ 私、小供の折には自然とお父さんが一番好きでしたわ。けれど女中達の部屋へ密そつと這はい入つて行くのが大變面白かつたのですよ。第一女中達は私にお説法をしないでせう？それにあれ等の色々な話を聞くのが非常に面白かつたのですから。

ランク おや、おや。ぢや私とその女中代りといふわけですね？

ノラ (飛び上つてランクの方へ急ぎ行く) あらまあ、先生、そんな意味ぢやないんですよ。ですけれど、お分かりでしやう？トルヴルドは丁度ちやうど私に取つては、お父ちちさんのやうなものですからね——

(エレンが廊下から入つて来る)

エレン 奥さま——(ノラへさゝやく。そして一枚の名刺を渡す)

ノラ (名刺を一瞥しながら) おや! (名刺を隠袋に入れる)

ランク 何か變つたことですか。

ノラ いゝえ。何でもないので。只——私の注文して置いた衣裳が来たのですよ——

ランク だつて、衣裳はそこに在るぢやありませんか。

ノラ あ、其の方は、さうですよ。けれど、これはまた別なのです——注文して置いたのです——家に内密なのですよ——

ランク あはあ、ぢや、大秘密なんですね。

ノラ えゝ、さうですとも。あなた一寸トルヴルドの方へ行つてらつしやいよ、奥の部屋に居ますから。そして出来るだけ長く、出て來ないやうに引き止めてゐて下さいな。

ランク 安心してゐらつしやい。ヘルマー君を取り逃さないやうにし

て置きますから (ヘルマーの室へ行く)

ノラ (エレンの方へ) 彼奴は臺所で待つてゐるのかえ?

エレン はい。裏の梯子段から上つて参りました——

ノラ 私今手が塞がつてると言へばよかつたに。

エレン さう申しましたけれど、利目がございませんでした。

ノラ 彼奴、歸らないつて言ふのかい?

エレン はい。あなたにお話のすむ迄は歸らないと申して居ります。

ノラ ぢやお通し! 静かにね! それから、彼奴の來たことを言つちやいけないよ、家へ聞えるたびつくりするからね。

エレン はい、承知いたしました。(出て行く)

ノラ 來た、來た、とう／＼近寄つて來た。いや、いや、そんな事があるものか。そんな事をさせやしない!



(ノラはヘルマーの室の扉の處にゆき指錠さしぢやうを下ろす。エレンは廊下への扉を開き、クログスタッドを通す。そして後をしめ切る。クログスタッドは旅行上衣を着、長靴を穿き毛皮の烏打帽子を冠つて居る。)

ノラ 静かにお話下さい。宅たくで家うちに居ますから。

クログスタッド 承知しました。私わたくしは構ひません。

ノラ 何んな御用ですか。

クログスタッド 少しお知らせ申すことがございましてね。

ノラ ちや早くして下さい、何ですか。

クログスタッド 御承知かも知れませんが、私は免職になりました。

ノラ それはね、私、止めることが出来なかつたのですよ、クログスタッドさん。ざり／＼まで争つては見たけれど、役に立ちませんでした。

クログスタッド そんなにお宅では、あなたのことを氣に懸けてお出でな

さらないのでですか。私があなたを何んな目にお會はせ申すかも知れないといふことは、御承知でせうが、それでやつぱり——

ノラ あなたは私がつかり宅に言つたと思つて入らつしやるの？

クログスタッド いや、實はあなたが、それを話してお出でなさないとい

ふことはよく承知して居ました。私の知つてるトルヴァルド、ヘルマ

ー君なら、それを聞いてゐては、それ程の勇氣は出ませんからな——

ノラ クログスタッドさん、何うか宅のことを餘り失敬なことは言はないやうにして下さいまし。

クログスタッド 勿論ですとも、充分相當の敬意は拂つて居ります。が、とにかく、あなたがさう心配して、事件を秘密にしやうとなさる所を見ると、昨日よりは、大分あなたに事の性質が分かつて來たと見えますな。

ノラ あなたに伺つたよりは、づつと能く分かつてゐますよ。

クログスタッド 左様、私のやうな碌でない法律家にお聞きなされるよりは

ね——

ノラ あなたの御用と言ふのは？

クログスタッド 只、あなたが何うして居らつしやるかと思ひましてね、奥

さん、私は一日あなたのことを考へて居りました。ほんの金貸の新

聞ごろつき——まあ言つて見れば私のやうな奴でも——世間でい

ふ、人情といふ奴を少しは持つて居りますからな。

ノラ ぢやそれを見せて下さい。子供等のことを考へて下さい。

クログスタッド それで、あなた方は、私の子供のことを考へて下さいまし

たか。併しもう其の事はよろしうございます。私は只、此の事件を

餘り重大に御考なされるなど申し上げた許りです。私は、今の處ぢや、

裁判沙汰にしやうなどとは思つて居りませんからな。

ノラ さうでせう。そんなことをなさる筈はないと思つてました。

クログスタッド 元來全部極穩かに落着させられる事件です。誰にも知

らす必要はありません。私共三人の間で纏められますよ。

ノラ ですが、宅にだけは何うあつても知らせられませんか。

クログスタッド 何うしてさういふ事が出来ますか。あなた、御自身で、す

つかりお拂になりますか？

ノラ それは、直ぐといふ譯には参りませんが。

クログスタッド それとも此の兩三日の中にその金を拵へる手段がお有

んなさるか。

ノラ それも直ぐといつて間に合ひさうなのはありませんけれど。

クログスタッド また、それがお有んなさるにしても、今となつちや役に立

ちますまい。すつかり金を積んで返さうと仰つても、證文はあなたの手には返しません。

ノラ それを取つて置いて何になさうと言ふのです？

クログスタッド 只保存して置きたいのです。私の所有物としてね。世間の人には何も知らせやしません。さうして置いて、萬一あなたが無法な考なんかお起しなすつた場合に――

ノラ 起こしたら何うします？

クログスタッド 例へば夫や子供を棄て、了つて、といふやうなことを考へるとか――

ノラ 若し捨て、了つたら何うなります？

クログスタッド または――何かもつと亂暴な事をお考なすつた場合に――

ノラ 何うしてあなた、それを知つてゐます？

クログスタッド そんなことは残らず頭の中から打つ捨つておしまひなさい。

ノラ 何うしてあなたは、私の心で思つてゐることを、ご存じですか。

クログスタッド 誰でも、始めは、さういふ事を考へるものです。私もそれを考へました。けれども私には勇氣がなかつた――

ノラ 私にも、それが無い。

クログスタッド その上――始めの嵐が過ぎて了ふと――そんな事は至つて馬鹿らしいものです。私こゝに御主人に當てた手紙をポケットトへ入れて来て居ます――

ノラ すつかり打ち明けやうと言ふのですか。

クログスタッド あなたは出来るだけ庇護つてあります。

ノラ (早口に) どんな事があつても、その手紙をあの人に渡して下すつちやならない。引き裂いて下さい。私何うにかしてお金は拵へますから。

クログスタッド 相済みませんな、奥さん。併し私はさう申し上げたと思つてゐますが――

ノラ いゝえ、何も借りてゐるお金の事を言つてゐるのぢやありません。一體あなたは宅から何の位金を取らうと思つてらつしやるのですか――私がそれを差上げませう。

クログスタッド 私は御主人から金を貰はうとは思つてゐません。

ノラ 何がそれぢや欲しいのです？

クログスタッド では申しませう。私は世間に出る脚場あしばが取り返したいのです。立身しなくつちやなりません。それで御主人に助けて貰

はうと言ふのです。此の十八ヶ月間私の履歴わたくしには一點の汚れもありません。其の間私は始終しじゆうひどい貧乏をしてゐました。けれども、一步步々地位を作つてもがいて行かうといふ一心で、満足して居りました。處をかうやつて突き落とされて了つた。ですから私は、もう一度もとの地位に這ひ戻らしてさへ貰へば良いといふ譯には、今ぢや参りません。立身させて貰はなくちやならん。ようございませうか。今一度銀行へ入れて貰つてもとよりも高い地位に据えて貰はなくちやなりません。御主人は私の爲めに地位を工夫して下さらなくちやならん――

ノラ 宅が、そんな事をするのですか。

クログスタッド いや、なさるでせう。私は御主人の人物を存じて居ります――よもや拒みはなさるまいと思ひます。そして私が銀行へ入れ

ば、見て居らつしやい、直に支配人の右の片腕にはなつて見せます。  
トルヴルド、ヘルマーでなくニルス・クログスタッドが株式銀行は切  
り廻してゐるんだといふやうにして見せます。

ノラ そんな事が出来るものですか。

クログスタッド では何でせうなあなた——？

ノラ もう、よござんす。今こそ私、勇氣が出ましたよ。

クログスタッド 私を嚇かしちやいけませんよ。あなたのやうな華奢な、  
荒い風にもあたらぬものが何うして——

ノラ まあ見てゐらつしやい！

クログスタッド 恐らく氷の下にとち込められて？あの冷たい黒い水の  
底に沈んで？翌年の春になつて浮き上つて來ると、醜い、いやあな姿  
にかはつてゐて、髪の毛は無くなつて、誰だか見分けもつかないやう

になつて——

ノラ 私を怖がらせやうと思つたつて駄目ですよ。

クログスタッド あなたも私を怖がらせやうたつて駄目です。さういふ  
とは出来るものぢやありません、奥さん。またやつた所で何の役に  
も立ちません。何んなことにならうとも、こちらの御主人はもう私  
の隠袋の中へ入れてるも同然です。

ノラ 後々までも？私が居なくなつてからも——？

クログスタッド あなたの名譽は私の手に握つて居ることを忘れました。  
ね。(ノラ無言で立ち上り、クログスタッドを見る。) よろしい、覺悟がついた  
と見えますね。馬鹿なとはなさるなよ。ヘルマー君は、私の手紙を  
受取つたら、直ぐに返事を下さるでせう。よく覺えてゐて下さい。  
私がまた、こんな事をしなくちやならないのも御主人のお蔭ですよ、

何うあつても其儘には濟まされませんからな。さやうなら、奥さん。

(廊下から出て行く。ノラは扉の方へ急ぎ足に行つて、細目に開けて、聴き耳を立てる)

ノラ 彼奴、行つてしまふ。手紙は郵便箱に入れないらしい。何うして、何うして、そんな事の出来やう筈はない。(扉をだん／＼大きく開ける。) おや何うしたんだらう? 彼奴まだ立つて居る。梯子段を下りて行かないやうだが、考へ直してもしたのか知ら? ひよつとしたら——? (郵便箱の中へ手紙が入る。クログスタッドの階段を下りて行く足音がだんだん遠くなつて聞える。ノラ押しつけたやうな叫聲を上げる。暫く間を置いて、郵便箱に! (おづく／＼と扉の所へ拔足して行く) 入つてゐる——あなた、あなた——遂々私達の破滅になりました!

(リンデン夫人が踊衣裝を持つて左手から入つて来る。)

リンデン さあ、もうすつかり直りました。一寸着けて御覽なさいませるか。

ノラ (暖れ聲で、柔かに。) クリスチナさん、一寸來て下さい。

リンデン (衣裝をソファの上に投げて) 何うなすつたんです? あなた、まるで顔色が變つてゐますよ。

ノラ こゝへ入らつしやい。あの手紙が見えますか? それ、ね——あの郵便箱のガラスから。

リンデン はあ、はあ、見えます。

ノラ あの手紙はクログスタッドから來たんですよ——

リンデン ノラさん——あなたに金を貸してゐるのはクログスタッドでした、ね?

ノラ えゝ。ですからもう、愈、トルヴルドが何も彼も知つて了ふことに

なります。

リンデン ノラさん、悪いことは言ひませんが、きつとその力があなた方二人のおためですよ。

ノラ あなたははまだ、すっかり御承知ないから、そんな事を仰しやるけれど、私實は名前を偽署してゐるのですよ——

リンデン 何うしたんですつて！

ノラ ですから、ねえ、クリスチナさん、あなた聞いてゐて下さい。私のために證據人になつて下さいな——

リンデン 證據人とは？何のです——

ノラ 若し私が氣でも違ふやうだつたら——そんな事になるかも知れませんから——

リンデン まあ、ノラさん！

ノラ それでなくとも何か私の身の上に変り事が起つたら——そして私がもう、斯うして居られない場合にでもなりましたら！——

リンデン まあ、ノラさん、あなたは、まるで本心を失つてらつしやる！

ノラ 若し誰か出て来て何もかも自分が引き受けやうといふ場合には——凡ての罪をね——わかりましたか——

リンデン ええ。けれども、何うしてあなたは、そんなことをお考へなさる——？

ノラ 其時には、あなた、證據人になつてね、それは嘘だと言つて下さいよ、クリスチナさん。私は一寸も本心を失つちや居ません。斯うして言つてゐることは、私よく知つて居ますよ。それで言つて置くのですかね、此の事件は、ちつとも他の人の知つたことぢやありません。私何が何も彼もしたので、私自身の罪です。何うか其の事を忘れない

で居て頂戴

一五二

リンデン それは忘れますまいけれど、何うしてさう言ふことを仰るか、私には分かりません——

ノラ それが何うしてあなたに分かりませう？これから見はれて來やうといふ奇跡ですもの。

リンデン 奇跡ですつて？

ノラ はあ、奇跡。けれども非常に怖い事ですよ、クリスチナさん。何んな事が有つても、起つて呉れちやならない事です。

リンデン ぢや、私、クログスタッドさんの方へ直ぐ參つて、話して見ませう。

ノラ いけませんよ。あの男はあなたに害でも加へますよ。

リンデン あの人は、私の爲めなら何でもした時代がありましたのよ。

ノラ 彼奴が？

リンデン 家は何處ですか。

ノラ そんな事を何うして私が——？さうく（隠袋を探る）こゝに彼奴の名刺があります。けれ共、あの手紙を何うしませう——！

ヘルマー（外から戸を叩きながら）ノラ！

ノラ（恐怖の叫）何うしたんです？何か御用ですか。

ヘルマー 喫驚しなくてもいゝさ、這入つて來やしないから。お前、戸の差錠を下ろしちやつたな。衣裳を着て見て居る所かい？

ノラ さうです、さうです、着て見て居るんですよ。大變よく似合つてよ、あなた。

リンデン（名刺を讀んで）ぢや、あの人の家は直ぐ近くですね？

ノラ さうですよ。けれ共、もう、そんなことは無駄ですよ、手紙があゝし

一五三



て郵便箱に入つてゐるんですもの。

リンデン　そして鍵はお宅で持つておいでなのですか。

ノラ　何時もさうですよ。

リンデン　それぢや、クログスタッドさんにさう言つて、あの手紙を讀まない中に取返させませう。何か言譯をさせればすみますから——  
ノラ　けれども、もうトルヴルドが何時も郵便箱を開ける時刻ですから

リンデン　引き止めてお置きなさいよ。いつも手を塞がせて置くとよ  
ござんす。私出来る丈早く歸つて來ますから。

(急いで廊下の扉を開けて行く。)

ノラ(ヘルマーの室の扉を開けて中を覗く)　あなた!

ヘルマー　うむ、もう何時もこの部屋へ歸つて行つてもいゝかね。さあ、ラ

ンク君、行つて見やう、——(入口の處で)　おや、何うしたんだ?  
ノラ　何に? あなた。

ヘルマー　ランク君の話で、大變な衣裳稽古を見る積だつたが。

ランク　(入口の所で)　私もさう思つて居た。聞き違へたと見える。

ノラ　いけませんよ、明日の晩までは、私の晴衣裳は誰にも見せないの。

ヘルマー　何うしたんだ、お前は、大變疲れてるやうに見えるよ。稽古を  
爲過ぎたんかえ?

ノラ　いゝえ、未だ少しも稽古なんか爲やしません。

ヘルマー　けれども、お前、行らなくちやいけないだらう——

ノラ　は、あ、是非やらなくちやならないんですよ! けれどもね、あなた、來  
て助けて下さらなけりや、行れないんですもの。私皆忘れちやつた。  
ヘルマー　あゝ、それはまた直に覺へるさ。

ノラ ですから、助けて下さいな、ねえ。よござんすか。それぢや約束して下さい——ほんとうに私氣にかゝつてならないのですもの。あなたは大勢の人の前で——今夜はあなた、すっかり私のために身體を空けて置いて下さいな。これつばかしても仕事をしてはいけませんよ。さ、約束して下さい。よござんすか、あなた？

ヘルマー 約束するよ。今夜はすっかりお前の奴隷になります。可愛さうに、弱い人だな——！それはさうと、先づ——（廊下の扉の方へゆきながら）

ノラ そこへ行つて何をなさるの？

ヘルマー 手紙が来てやしないか見るのさ。

ノラ いけません、いけません。そんな事をしては。ねえ。

ヘルマー 何故さ？

ノラ あなた、お願いですから止して下さい。手紙なんか来ては居ませんよ。

ヘルマー まま、見て来るよ（行かうとする）

（ノラはピアノの前に座つてタランテラ踊の音楽の第一小節を奏べる）

ヘルマー （入口の處に立ち止まる）おや！

ノラ 私、最初にあなたとお浚へをして置かなくちや、明日踊れませんもの。

ヘルマー （女の方へ行きながら）お前ほんとにさう神経に病んでるのかえ、ノラ？

ノラ え、じつとして居られないんですよ。さ、直ぐお浚へにかゝりませう。お夕飯までにはまだ時間があります。よ、座つて弾いて下さいよ、あなた。何時ものやうに指圖して下さいよ。

ヘルマー 爲ろと言ふんなら、それはもう悦んでするさ。(ピアノ臺の前に座はる)

(ノラ箱の中から手鼓を取り出す。そして急いで雑色織まぜじろをりのシヨールを身に纏ふ。そして一飛ひととびして、床の真中に立つ。)

ノラ さあ、弾いて下さい！踊りますよ！

(ヘルマーが弾きノラが踊る。ランクはピアノの前ヘルマーの後に立つて眺めてゐる。)

ヘルマー (弾きながら) もつと、ゆつくり、ゆつくり！

ノラ ゆつくりは踊れませんよ！

ヘルマー これノラ、そんなに亂暴でなく。

ノラ いゝんですよ、いゝんですよ。

ヘルマー (止める) ノラ！それぢや到底ものにならないよ。

ノラ (笑つて手鼓を振り動かす) だから、さう言つたぢやありませんか。

ランク 私が弾いて上げませう。

ヘルマー (立ち上りながら) あゝ、何うか——そうすれば私が指圖をするに都合がいゝから。

(ランクがピアノに向つて弾する。ノラは段々、氣違のやうに踊り出す。ヘルマーはストーブの側に立つて居て、絶えずノラの踊振りを直すやうに差圖する。ノラは其の言葉が聞こえないやうに見える。其の髪の毛がほぐれて両肩に垂れかゝる。ノラはそれに氣も付かない様子で踊り進む。そこへリンデン夫人が入つて来て、入口の處に襲はれたやうに立ち慄む。)

リンデン まあ——！

ノラ (踊りながら) こんな面白いことをしてゐるんですよ、クリスチナさん！

ヘルマー 何うしたんだ、ノラ、お前の踊るのはまるで生死いきしにの騒ぎのやうだ。

ノラ 全くそうなんですよ。

ヘルマー ランク君、止めたまへ！これぢやまるで氣違だ。おい君、止したまへ！

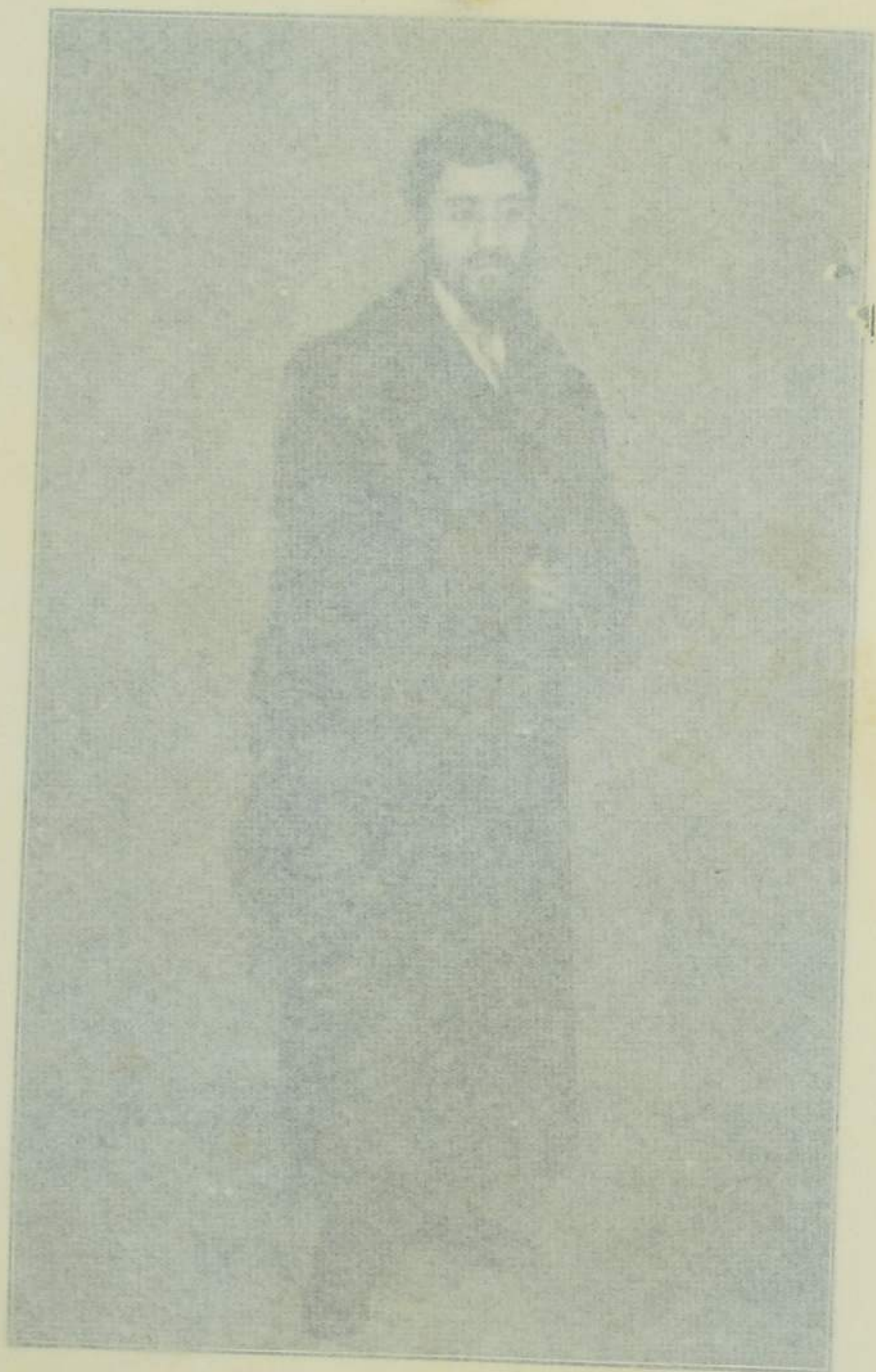
(ランク、ピアノを弾き止める。ノラ、それと同時に突然立止つて身動きもしない。)

ヘルマー (女の方へ行きながら) こんなだらうとは思はなかつたが、お前、私が教へてやつたのを、すっかり忘れてしまつたな。

ノラ (手鼓を投げ出す) ね、御覽なすつたでせう。

ヘルマー これぢやあ、實際教はる必要がある。

ノラ ね、教はる必要があるでせう。だから、愈といふ間際まで、あなた、すつかり稽古をして下さらなくちやいけません。その約束をして下



ランクの氏郎治英森



クンラの氏郎治英森

ヘルマー 何うしたんだ、ノラ、お前の踊るのはまるで、生死の境のやうだ。  
ノラ 全くそうなんですよ。  
ヘルマー ランク君止めたまへ！これぢやまるで氣違だ。おい君止し  
たまへ！  
(ランク、ピアノを弾き止める。ノラ、それと同時に突然立止って身動きもしない)  
ヘルマー (女の方へ行きながら)こんなだらうとは思はなかつたが、お前、私  
が教へてやつたのを、すっかり忘れてしまつたな。  
ノラ (手鼓を投げ出す) ね、御覽なすつたでせう。  
ヘルマー これぢやあ、實際教はる必要がある。  
ノラ ね、教はる必要があるでせう。だから、愈といふ間際まで、あなた、す  
っかり稽古をして下さらなくちやいけません。その約束をして下

さいよ、ね。

ヘルマー よろしい。よろしい。

ノラ 今日と明日とは私の事のほか何も考へないで居て下さい。手紙一本だつて開けちやいけませんよ——郵便箱なんか見ちやいけませんよ。

ヘルマー あゝ、お前、やつぱり、あの男を怖がつてるんだな——

ノラ さうですよ。私、怖いんですよ。

ヘルマー お前の顔でちやんと判かつてるよ、ノラ——彼奴から来た手紙があゝの郵便箱の中にあるな。

ノラ 何うですか。さうかも知れせんわ。けれどもあなた、今は何だつて讀んぢやいけませんよ。すつかり濟んで了ふまでは、私とあなたの間には、外の事は一切挿まないとすよ。

ランク (ヘルマーに向つて柔かに) 反対しないで置いた方がいゝ。

ヘルマー (手を女にかけながら) 赤ん坊だからな、爲たいやうにさせて置くさ。けれども、明日の晩、踊りがすんだら——

ノラ 其の時はあなたの自由よ。

(エレンが右手の入口の所に出て来る。)

エレン 奥さま、お夕飯の仕度が出来ました。

ノラ シャンペンを出してお置きよ、エレン!

エレン 畏りました。(出て行く。)

ヘルマー おや〜! 宴會のやうだな。

ノラ え、そして明日の朝まで飲み続けませうよ。(外の方へ向いて呼ぶ)  
それからね、エレン、パン菓子も出してお置き——どつさりだよ——これ一度つきりだから。

ヘルマー (ノラの手を捕へながら) これ、これ、さう亂暴に興奮しちやいけな  
い! もう一度家の小雲雀におんななさい。

ノラ え、なりますよ。けれども、まあ、食堂の方へいらつしやいよ。それから、あなたもね、ランク先生。クリスチナさん、あなたは、髪を解かすから手傳つて頂戴。

ランク (彼方へ行きながら柔かに) 此の先き何か變り事でもあるのぢやないかね? 何もなければいゝが——と言ふのは——

ヘルマー 何あに、なに、そんな譯ぢやない。何時も話したのがあれなんだよ、物を氣にかけて來ると、まるで赤ん坊になつて了ふ。

(兩人、右手の方へ出て行く)

ノラ それで?

リンデン あの人は旅行してゐて此方に居ません。

ノラ そんな事だらうと、あなたの顔を見た時に思ひました。

リンデン 明日の晩は歸て來ますから、手紙を残して置きました。

ノラ そんな事は、なさらない方がよかつたつけ。出來かゝつたことなら、ほつ投とくより他に仕方がありません。けれども、なんですnee、奇蹟を待つてる氣持といふものは何だか言ふに言はれない晴れがましいものですnee。

リンデン その待つてらつしやる奇蹟といふのを聞かせて下さい。

ノラ それは、あなたには分かりませんよ。食堂の方へいらつしやい、私も直ぐ行きますから。

(リンデン夫人は食堂に入る。ノラは考を落ちつけるやうな様子で暫く立つてゐる。そして懐中時計を眺める。)

ノラ 五時だ。夜半までもう七時間。それから明日の夜半まで二十四

時間。さうすると丁度タランテラがお仕舞になる。二十四時間と七時間？みんなで後三十一時間の命だわ。

(ヘルマーが右手の扉の所に現はれる)

ヘルマー 家の小雲雀は何うしたんだい？

ノラ (兩腕を擴げて夫に走りすがる) 此處に居ますよ！



### 第三幕

一六六

同じ室。中央にテーブル、其廻りに二三脚の椅子。テーブルの上にはランプがともつて居る。廊下への扉は開いたまゝで、二階から舞踏の音楽が聞こえる。

(リンデン夫人はテーブルの側に座つて、呆心の體で書物を繰り擴げてゐる。讀まうとして見るが注意が集まらない様子。度々聞き耳を立て、廊下の扉の方を氣遣はしげに見る。)

リンデン 懐中時計を見て。まだやつて來ない。時間はもう無くなりかけてゐるのに。若<sup>もし</sup>あの人が來なからう者なら——(また聞き耳を立てる)あ、やつて來た——(廊下に行つて、徐つと外の扉を開ける。靜かな足音が階段の方に聞える。リンデンは囁く。)お入<sup>はい</sup>んなさいよ、誰も居ないから。

クログスタッド (入口の所で) あなたの手紙が來て居ました。あれは何う

いふわけでおよこしになつたのですか。

リンデン 是非あなたに、お話<sup>はなし</sup>したい事がありました。

クログスタッド さうですか？そして此家<sup>うち</sup>で？

リンデン 私<sup>わたし</sup>部屋借をしてゐますけど家<sup>うち</sup>では、お目にかゝれないのですよ、別な入口がないものですから。まあお入<sup>はい</sup>んなさい、二人きりですよ。女中達はまだ寝て居ますし此の家<sup>うち</sup>では夫婦とも二階の舞踏會に行つてますから。

クログスタッド (室に入り來りながら) はゝあ！それぢや、ヘルマー夫婦の

人達は、今夜舞踏會に行つてゐますか。さうですかい。

リンデン えゝ。行つたつていゝぢやありませんか。

クログスタッド いゝですとも。何で悪いものですか？

リンデン ぢや一寸あなたにお話<sup>はなし</sup>がしたいんですが。

一六七

クログスタッド 私達二人の間に話があると言つたら何でせう？

リンデン 澤山ありますよ。

クログスタッド 私はさうは思ひませんな。

リンデン それは、あなたが私をほんとうに理解して下さいさらないからです。

クログスタッド 理解することが、何かありますか。これ程當り前のことは無かつたでせう？——薄情な女が好い相手を見つけて前の男を投げてしまう。

リンデン あなたは實際私をそんな薄情者だと思つてらつしやるの？私があなたと別れたのは、そんな手軽なことだつたと思つて居らつしやるの？

クログスタッド 手軽ぢやありませんか。

リンデン ほんとうにさう思つて居らつしやるのですか？

クログスタッド 若しさうでないなら何故あんな手紙をよこしました？

リンデン だつて、あれが一番いゝ手段ぢやありませんか？別れなくちやならない事情になつた以上、私に對するあなたの愛を無くさすのが、一番よかつたでせう？

クログスタッド (自分の兩手を握りしめながら) さういふわけでしたか？そして其起りはといへば——皆金のためだ——

リンデン 私には頼りない母と二人の弟があつたことをお忘れなすつちやいけませんよ。私達はあなたの行末を當にして、待つてゐるわけに行かなかつたのです。

クログスタッド それであなたには、私を投げて他人に見更へる権利があるのですか。

リンデン 何うですか。私も其事については折々自分が悪かつたか知らと思ひ直して見ますの。

クログスタッド (二層柔かにあなたに捨てられた當座は、大地が足の下から沈んで行くやうな氣持でした。まあ、私を見て下さい私は今ちや帆柱にすがりついてゐる難船者だ。

リンデン 今に救助船がやつて來るでせう。

クログスタッド 來かゝつて居たんだ。所へあなたが出て來て立ち塞がつて了つたんだ。

リンデン 私は一寸も知らなかつたのですよ、あなた。あの銀行で私と入替にされたのが、あなただといふことを、今日まで知らなかつたのですよ。

クログスタッド ふむ、それぢやあ、その方はさうと爲て置いて、いよくそ

れと判かつて見れば、何うです、私にそれを譲らうと仰るのですか？

リンデン いゝえ。そんな事はあなたを救ふ道でなからうと思ひます。

クログスタッド あゝ、その救ひです——私は是非ともさうして頂きたい。

リンデン ですけど私も用心といふ事を覺えましたからねえ。生活と

切迫詰まつた必要とが私を教育したのですよ。

クログスタッド それから、私には口前の立派なのを信用するなと生活が教へて呉れました。

リンデン ぢや生活はあなたに大變氣の利いた事を教へましたね。けれども實行の方なら信用なさるでせう？

クログスタッド といふと——？

リンデン お話によると、あなたは今難船して帆柱に縋りついて入らしやるでせう？

クログスタッド さう言つてよい譯が澤山あります。

リンデン さうすれば、私も難船して帆柱に縋がつてゐる女でせう？ 誰を愛するといふ當もないで。

クログスタッド それは、あなたが好き好んで、おやんなすつたことだ。

リンデン 好き嫌ひを言ふ暇はなかつたのですよ。

クログスタッド まあ、さうとして、それで何うすると言ふのです？

リンデン 斯うやつて難船した二人が手を握り合ふことが出来たら、何んなものでせう？

クログスタッド 何ですと？

リンデン 一本一本の帆柱にすがりついて居るよりか、それを組み合はせて筏にした方がいゝ譯でせう。

クログスタッド クリスチナ！

リンデン 私が此の町へ来たのは何ういふ譯だと思つて居らつしやるの？

クログスタッド 何か私の事でも考へて来たのか？

リンデン 何によりも仕事をしなくてはなりませんまい？ 仕事をしなければ生きて行けませんからね。私の記憶してゐる限りでは、私は一生仕事のし通しですよ。仕事が私にとっては非常な樂たのしみになつて居ました。所が、かうして唯一人たったひとりになつて見ますと、自分で自分を當に仕事をするといふことは、ちつとも幸福なものぢやありません。ですからね、あなた何うか當にして働く甲斐のある人を私に見付けて下さいな。そんな風にして仕事をさせて下さいな。

クログスタッド いや、いや、其れは駄目だ。只もう女が自分を犠牲にしやうといふ、小説的な考に過ぎないんだ。

リンデン あなたは、私を小説的な女だと思つて入らつしやつて？

クログスタッド ではお前實際——？ 全體お前は私の過去を知つてゐますか。

リンデン はあ。

クログスタッド そして世間の奴が私を何う言つて居るか、それも知つてゐますか。

リンデン ですけど、あなたは今、私と一所だつたらまるで別な人になつて居たらうと仰つたぢやありませんか？

クログスタッド 確にさうだらうと思ふ。

リロデン 今ではもう遅うござんすか？

クログスタッド クリスチナ、お前は自分で今何を言つてるか、知つてゐるのか。 あゝ知つてゐるに違ない、お前の顔にさう見えて居る。 本當

にお前はその勇氣を持つてゐるか——？

リンデン 私には頼る男がいるし、あなたの子供には母が要るでせう？ あなたには私といふものが必要だし、私には——私にはあなたが必要です。 ね、あなた、私はあなたの立派な本心を頼りにしますよ。 あなたと一緒に、私は何にも怖いものはありません。

クログスタッド (女の手を取りながら) 有りがたう——有りがたうクリスチナ。 これから一つお前が見て呉れた本當の私に立ち戻つて世間の奴を見返してやるよ。 あ、私は忘れてゐた——

リンデン (聞き耳を立てながら) 叱ッ！ タランテラ踊よ。 早くお歸んなさいよ。

クログスタッド 何うして？ 何うといふんだ？

リンデン 二階で踊つてるのが聞えませんか。 あれが濟むと、直ぐこゝ

の人達が歸つて來るでせうよ。

クログスタッド わかつたわかつた、歸らう。だが今となつては、もう手遅れだよ。私が此のヘルマーの家に對して行りかけてゐる事が何んな事だか無論お前は知るまいが。

リンデン いゝえ、知つてゐますよ。

クログスタッド お前それで以て、あゝいふ事をする勇氣が――

リンデン それはね、あなただつて絶望すれば、何んな事もしたらうぢやありませんか。それは私察して居ますよ。

クログスタッド あゝ、何うかして取消すことが出来るといゝがな。

リンデン 出來ますよ――あなたの手紙はまだ郵便箱の中にあります。

クログスタッド たしかに？

リンデン えゝ。けれどもね――

クログスタッド

(探るやうな目付で女を見ながら)

は、何んなことをしてゐるも、お前の友人を救はうといふ腹なんだな。言つておしまひ――それがお前の本心なのかい？

リンデン

あなた、女は一度他人のために身を賣れば二度とそんなことはしないものですよ。

クログスタッド

ぢやあ兎に角、私は手紙を返して貰はう。

リンデン

お止しなさい。

クログスタッド

いや。さうするのが當然だ。ヘルマー君の見える迄待つてゐやう。そして返して貰ふやうに頼まう――それから用事は

只私の免職に關する事だといつて――讀んで貰ふ必要のない事だと言つておかう――

リンデン

いけませんよ。その手紙は取り戻さない方がいゝのです。

クログスタッド けれ共お前が私をこゝへ伴れて来たのは、そのためぢやなかつたか。

リンデン はあ。始め、びつくりしたものですから。けれ共ね其の後私は、此の家いへにいろく變な事があるのを感附きましたよ。是は何うしてもヘルマーさんに何も彼も聞かせて置かなくちやいけません。あの二人は、すつかり打明けて理解し合はなくちや駄目ですよ。こんな小細工や隠し事ばかり爲して居た目には、二人とも屹度今にやり切れなくなりませす。

クログスタッド では、それもよからう。危険を冒してやつて見やうと言ふのならね。只私のすぐに、やれることが一つ有るが――

リンデン (聞き耳を立てながら) 早く、早く行らつしやいよ！ 踊が濟みました。もう一寸ちよつとたつと、斯うしちや居られませせん。

クログスタッド ぢや、通りで待つてゐやう。

リンデン え、どうぞ。家うちへ連れて行つて下さいな。

クログスタッド あゝ今夜程幸福なことは、一生涯になかつたよ。

(クログスタッド、外の扉から出て行く。廊下と室の間の扉は開け放した儘)

リンデン (器具を直ほして、自分の外出仕度そとでしたくのものを一つ處へ寄せながら) すつかり變つちやつた。すつかり變つちやつた。頼りにして働く人も出来るし、幸福な家庭も作られる。私これからは一生懸命で働かなくちやならない。早く歸つて来て呉ればいゝに。(聞き耳を立てる)  
あゝ歸つて来た！ さあ、仕度をしなくちや。

(リンデン夫人は帽子と外套をとる。ヘルマーとノラの聲が外側で聞こえる。

鍵を錠前に挿し込んで回す。そしてヘルマーがノラを殆ど引きづるやうにして廊下はいに入つて来る。ノラはイタリヤ衣裳を着て黒い大きなシヨールを上

に羽織つてゐる。ヘルマーは燕尾服で、黒いドミノ上衣をかけて居る。

ノラ (入口の處でヘルマーと争ひながら) いやですよ、いやですよ、いやですよ！ 私入りませんよ！ も一度二階へ行きたいんですから。そんなに早く歸るのはいやですよ。

ヘルマー だつて、お前！

ノラ ね、どうかね、あなた。もうたつた一時間でいゝから！

ヘルマー もう一分もならないよ。約束したことを覚えてるだらう！ さ、さ、入つたり！ こゝに斯うしてゐては風をひくよ！

(男は女の抵抗するにも係らず、なだめるやうにして部屋の中につれて入る)

リンデン 今晚は。

ノラ クリスチナさん！

ヘルマー おゝ、リンデンの奥さん！ あなたこんなに晩く、こゝにゐらつ

しやつたのですか。

リンデン はい、御免下さいませ。私、ノラさんの衣裳をつけて居らつしやるのが、是非拜見したかつたものですから。

ノラ あなたは、こゝに座つたまゝ、私を待つてらつしやつて？

リンデン はあ。生憎と私、遅く參つたのですよ。あなた方は、もう二階に行つてらつしやるし、お目にかゝらないで歸るのも残念でしたから。

ヘルマー (ノラのシヨールを脱がせながら) ぢや、まあ、見てやつて下さい。充分見る値打があると思ひますよ。奇麗ぢやありませんか、奥さん？

リンデン はあ、ほんとうに――

ヘルマー 美しいぢやありませんか。皆がさう言つて居ました。只、此の女が恐ろしく剛情で困りましたよ、此奴めが。何うしてやりませ



うな？殆ど腕力で引張つて来たんですよ。

ノラ 今に見て居らつしやい。後悔なさる時が来るから。もう唯半時  
間でいゝものを、残らせて下さらないんだもの。

ヘルマー それ！お聞きなすつたでせう、奥さん？あの通りです。併し  
タランテラを踊つた時には、皆が狂氣のやうに喝采しましたよ。そし  
てまた、充分それ丈の値打はあつたと言つていゝでせう——只、其の思  
想を具體させる場合にですな、少うし實感が出過ぎた嫌はあるかも  
知れませんが——つまり嚴に申すと、藝術的といふよりも、少し行き  
過ぎて居たのですね。けれ共、そんな事は何うでもいゝ——とにかく  
く、大成功をしました、そして、それが主要の目的なんですからね。で  
其の後と來てゐますから、ほうつて置いては、拙いでせう？——折角の  
印象を弱める事になりますからな？氣がついた以上、さういふ事は

させられません。で、私は、此小さい可愛らしいカプリ娘を脇の下に  
抱へて、大急ぎで部屋を一巡りしましてね、各方面へ挨拶をして、そし  
て、——よく小説に書く奴ですが——その美しき幻は消えにけりで  
した！引込みといふものは、何時もぱつとしなくちや、いけませんか  
らね、奥さん。所がノラには何うしても其の譯がわかりません。い  
やあ！此處は暑いな！（ドミノ上衣を椅子の上に投げかけて、自分の室の方へ  
の扉を開く。）おやこちらには、燈火がついて居ないな？うむ、其筈か！  
御免下さいよ——（入つて蠟燭に明りをつける。）

ノラ（息の聞えないやうにつぶやく。）何うしました？

リンデン（柔かに）あの人に話しましたよ。

ノラ そして——？

リンデン ですけれどね、ノラさん——あなたは、すっかり御主人に打明

けてお仕舞ひなさらなくちや、いけませんよ——

ノラ（殆ど聲を出さないで）さうだらうと思ひました！

リンデン クログスタッドの方は少しも怖がる必要はありません。けれども、兎に角すつかり言つてお仕舞ひなさる方がよござんすよ。

ノラ 言ひますまいよ！

リンデン だつて手紙が言つてしまひますよ。

ノラ クリスチナさん、何うもいろく御心配下すつたわね。それでも

う、私のする事は分かりました。叱っ！

ヘルマー（歸つて来る）そこで、奥さん、見てやつて下さいましたか！

リンデン はあ。ぢや私はもうお暇申しませう。

ヘルマー え？もうですか。此の編物はあなたのですか。

リンデン（それを取る）はい、何うもありがたう。私、餘程忘れる所でした

よ。

ヘルマー ぢや、あなたは編物をなさるのですね？

リンデン はい。

ヘルマー それよりか刺繡をなさる方がいゝでせう？

リンデン さうですか！何うしてやせう？

ヘルマー 何故といつて、其の方がづつと綺麗です。ご覽なさい！刺繡の時には左の手にそれを持つて。さう。そして右の手を長いならかな曲線にして針を働かす。さうぢやありませんか？

リンデン はあ、さうのやうですな。

ヘルマー けれ共、編物となると、何うも見悪い。ま、御覽なさい——兩腕を脇腹にくつつ付けて、そして針が上に行つたり下に行つたり——其様子が何だか支那人的ですね、——時に今夜のシヤンペンは實際素

的だつたな。

一八六

リンデン　ちや、お休み遊ばせ、ノラさん、もう剛情を張つちやいけませんよ。

ヘルマー　よく言つて下すつた、奥さん！

リンデン　あなた、お休み遊ばせ。

ヘルマー　（戸の處までリンデン夫人と一緒に行きながら）お休みなさい。氣をつけてお出でなさいよ。お送り申すといふんだが——實際直ぐそばですから。さよなら、お休みなさい！（リンデン夫人去る。ヘルマーは後の戸を閉めて再び出て来る。）やつと、あの女を歸しちやつた。随分、厄介だつたな。

ノラ　あなた大變疲かれては居ませんか？

ヘルマー　いや、些つとも。

ノラ　眠くもなくつて？

ヘルマー　少しも眠くない。却て非常に愉快だね。が、お前は？ 疲れて眠さうに見えるな。

ノラ　え、非常に疲れちやつた。もう直寝ませう。

ヘルマー　そらご覽！ つまり、何時までも残つて居させなかつたのが本當だらう？

ノラ　それは、あなたのなさる事なら、何でも本當ですよ。

ヘルマー　（女の額に接吻しながら）それで、家の雲雀が大人しくなりました。

お前ランクが今夜非常に愉快さうだつたのを注意したかえ？

ノラ　さうでしたか？ 私、あの人と話をする折がまるで無かつたのですよ。

ヘルマー　私だつて、餘まり話はしなかつたがね、しかし、あの男があんな

一八七

に上機嫌なことは久しい間見たことがないよ。(暫くノラの方を見て、そして傍へよつて来る) 斯うして自分の家へ歸つて、二人つきり差向ひで居ると、何とも言へない、いゝ氣持だな！此の罪作りめ。

ノラ そんな風に私の方を見ちやいけませんよ。

ヘルマー 私の一番貴い寶物を見て居るのぢやないか——美の塊だ、そしてそれが私のものなのだから、全然私一人で占領して居るのだからな。

ノラ (テーブルの向側にゆく) 今夜はそんなことを言つちやいけませんよ。

ヘルマー (後に跟きながら) まだ、お前の血管の中にはタランテラが踊つてるな——それで益お前が美しく見えるんだ。そら、聞こえるだらう他の人も、もう歸りかけてる。(二層柔かに) ノラ——もう直ぐ、家中が静かになるよ。

ノラ 何卒ねえ。

ヘルマー ねえ、早く静になるといふだらう？それ私達が大勢の人の中に交つてゐるときには、私は殆どお前と口をきかないやうにして居ただらう。そして遠く離れてゐて、只時々お前の方を窺み見をして居ただらう——あれは、何いふわけだか知つてるかい？實はね、私が空想を畫いてゐたのさ、私達は秘密に相愛して居て、秘密に結婚約束をしてゐて、そして、そんなことを誰も知らないでゐる、と言つたやうな事を想像するからさ。

ノラ わかりましたよ、わかりましたよ。あなたは、すっかり私の事ばかり考へてゐらつしやるのでせう！

ヘルマー さうして、歸る時には、お前の其のつる／＼した柔かな肩から、輝くやうな首の邊へシヨールを掛けてやつて、私はお前を花嫁だと

想像して見る。結婚式が丁度済んで、お前を始めて私の家へ連れて来る。そして始めて、たつた二人で全く他人を交せないで差向ひであるとお前の震へて居るのが何とも言へず美しい。こんな事を考へて、今夜は、私、夜中、只もうお前の事ばかり思ひつめて居たよ。お前がタランテラを踊つて身體を揺つたり、ぐるぐる廻つたりして居るのを見た時には——私の血は煮えくり返つた——愈我慢がし切れなくなつて、それで私はあんなに早くお前を連れて歸つたんだよ。  
 ノラ あなた！あちらへ行つて下さいよ。そんな事は聞き度くないから？

ヘルマー 何ういふ譯なんだ？あゝ、お前は私をぢらしてゐるな！いけないよ——いけないよ。私はお前の夫ぢやないか。

(外の戸を叩く音)

ノラ (立ち上る) 聞えましたか？

ヘルマー (廊下の方へ行きながら) 何方？

ランク (外で) 私ですよ、一寸入つてもいいですか？

ヘルマー (低い調子で、いら／＼して) えゝ！何の用事なんだらう！(高聲に)一寸待つたり。(戸を開ける) さあ、何卒。よく寄つて下さつた。

ランク 君の聲が聞こえたやうだつたから、それで、ふつと思ひ出してね。

(見廻す) あゝ、此の部屋も随分古い馴染だが、お二人で睦じさうですね！

ヘルマー 君は二階でも随分愉快さうに見えたね。

ランク 非常に愉快だつた。でなくつてまた何うするものか？此世で得られる丈の愉快をして悪いといふ法は無いだらう？出来る丈の愉快を出来る丈永く行るがいゝさ。今夜の葡萄酒は結構だつたね

ヘルマー シャンペンが特別によかつたね。  
ランク 君にも気がついたかね？ 私が喉へ流し込んだ分量だけでも随分なものだらう。

ノラトルヴルドも随分シャンペンを飲みましたよ。

ランク さうでしたか？

ノラ えゝ。シャンペンを飲みますとね、何時も非常な上機嫌になるんですよ。

ランク 結構です。働き甲斐のある一日を送つたあとで、一晚愉快を盡すに不思議はありませんからね。

ヘルマー 働き甲斐がある！ さうさな、私は餘りその自慢も出来なかつたが。



ランクとノラトルヴルド  
ヘルマーの肖像



ラノのチーリエ、トッネエジ  
 マルへのグンリヤエウ、トーパーハ

ヘルマー シャンペンが特別によかつたね。  
 ランク 君にも気がついたかね？ 私が喉へ流し込んだ分はだれでも  
 分なものでらう。  
 ノラトルゾルドも随分シャンペンを飲みましたよ。  
 ランク さうでしたか？  
 ノラ ええ。 シャンペンを飲みますとね、何時も非常な上機嫌になるん  
 ですよ。  
 ランク 結構です。 働き甲斐のある一日を送つたあとで、一晩愉快を盡  
 すに不思議はありませんからね。  
 ヘルマー 働き甲斐がある！ さうさな、私は餘りその自慢も出来なかつ  
 たが。

ランク (ヘルマーの肩を叩きながら) けれども私は働き甲斐があつたよ、君。  
ノラ きつと、あなたは科學上の研究をやつてらつしやつたのでせう、先

生？

ランク さうですよ。

ヘルマー おや、おや！ノラさんが科學上の研究なんて事を言ひ出した  
ね！

ノラ 結果はお目出度い方でしたか。

ランク 申分なく。

ノラ ぢや、いゝ方でしたね。

ランク 極上々です、醫者にとつても患者にとつても、——確實といふ結  
果です。

ノラ (早口にそして探ぐるやうな様子で) 確實と言ふと？



ランク 絶對的に確實だといふことを確めました。ですから其の後で私がお祝をするのも當然ぢやありませんか。

ノラ えゝ。全くさうですよ、先生。

ヘルマー 私も、それに異議はないが、只併し翌日になつて償ひをしなくちやならないやうなことの、無いやうにして貰ひたい。

ランク それは君、此の世の中で、何だつて償なしに得られるものはないよ。

ノラ ランク先生、あなたは假面舞踏が大變好きですか。

ランク はあ、滑稽な風をしたのが澤山出て來ると面白いですね。

ノラ ではね、此の次の假面舞踊には、私とあなたは何になりませうね？

ヘルマー 慾張りやさん！もう次の舞踏會のことを考へてゐるのかい！

ランク 私とあなた？それぢや、言ひますがね。あなたは天人にお成んなさい。

ヘルマー 成程な、しかし何んな衣裳を着たら天人に見えるだらう？

ランク 只もう不斷の着物を着てゐればいゝさ。

ヘルマー そいつはいゝ！けれ共君は何になる積りか、まだ決まつてゐないか。

ランク いや、其の方はもう、すつかり、決まつて居るよ。

ヘルマー といふと？

ランク 此の次の假裝會には私は見えない物にならうと思ふ。

ヘルマー 随分妙な考だな！

ランク それ、あの大きな黒い帽子——君はあの目に見えない帽子の話を知つたか、其奴が上から降りて來て、お互の上に着るといふと、

誰も見得ないやうになつて了ふ。

ヘルマー (押しつぶしたやうな微笑で) 見えない。それに違ない。

ランク 所で私はこゝへ来た用事を忘れる所だつた。ヘルマー君、私に葉巻を一本下さい。其の黒いハバナを一つ。

ヘルマー さあ、さあ、どうぞ(箱を渡す)

ランク (二本とつて端を切る) 有りがたう。

ノラ (蠟マツチを摩りながら) 火を<sup>つ</sup>つけさせて頂戴。

ランク 有りがたう。

(ノラがマツチを差し出す。ランクは其れで葉巻に火をつける。)

ランク それぢや、さやうなら!

ヘルマー おゝ、君さやうなら。さやうなら。

ノラ よく、お休み遊ばせ! 先生。

ランク 御好意、有りがたう。

ノラ 私にも、挨拶して下さいな。

ランク あなたに? 承知しました。お望みなら——よくお休みなさい。それから火のお禮も申して置きます。

(ランクは二人に頭を下げて挨拶して出て行く)

ヘルマー (小聲で) あの男も餘つ程飲んだやうだな。

ノラ (外の事に氣を取られて居る體に) さうねえ。(ヘルマーは隠しから一束の鍵を取り出し廊下の方へ行く) あなた、そこで何をなさるの?

ヘルマー 郵便函を明けなくちや、一杯になつて居て、明日の朝の新聞が<sup>はい</sup>入らない。

ノラ 今夜是れから仕事をなさるつもりですか?

ヘルマー まさかねえ、——おや、何うしたんだらう。誰れか錠前をいち

つたな。

ノラ 錠前を——？

ヘルマー さうに違ひない。何うしたのだらう。女中どもがいぢる譯もなしと——ピンの折れたのがあるぞ。ノラ、お前の、やうだが——

ノラ (早口に) ぢや、子供でしやう——

ヘルマー 是れから斯ういふ悪戯は止さすやうにしなくちや、いけないよ。うむ——ね、そら、やつと明いた。(中のものを取り出し、臺所の方に向つて呼ぶ) エレン、エレン、表の明りを消しな。(室に歸り、戸を閉める。手には數通の手紙を持って居る) どうだ、御覽溜つてるぢやないか。(手紙を繰りかへしなから) 何だ是れは？

ノラ (窓の方で) 手紙！あ、いけません——あなた——。

ヘルマー 名刺が二枚、——ランクのだ。

ノラ ランク先生の！

ヘルマー (名刺を見ながら) 醫師ランク。是れが一番上に載つて居たところを見ると、入れて間もないのだらう。

ノラ 何か書いてありますか？

ヘルマー 名の上に墨で十字架が書いてある。御覽 縁起でもない思ひつきぢやないか。是れで見ると自分が死ぬといふ知らせとも取れる。

ノラ さうなのですよ。

ヘルマー 何だと！何かお前は知つてるか？何かあれが話したか。

ノラ え、その名刺を寄こしたのはね、私共に暇乞のつもりですよ。あの人は是からひとりで閉ぢ籠つて死ぬ覺悟で居るのです。

ヘルマー 可哀さうに。無論長くは引き留められまいと思つたが、併し

斯う急にとはねえ——まるで手を負うた獣けもののやうに、逃げ出して穴の中に隠れて了ふ。

ノラですけど、成るやうには何うせ成るのですから、くどくどと言はな  
いで行く方がよござんすよ。さうは思ひませんか？あなた。

ヘルマー（あちこちと歩あるきながら）あの男とは別して懇意にしてゐたのだから、居なくなつたと聞いても本當とは思へない。あの男の身に附いて居た色んな苦しみだの淋しさだのが雲の懸つたやうに私達の幸福な日光を包んで居たんだが、さうさな、詰りは斯うなるのが一番よかつたらう——少なくとも當人の爲には（突つ立つて）それから、恐らく私達にだつて其の方がいゝかも知れない、ねえノラ。さあこれで愈私達二人は、全く差し向かひになつたといふものだ。（兩手に女を抱きねえ、お前、私は何だかまだお前をしつかりと私のものにし得な

かつたやうな氣がする。あのねえ、ノラ、私は折々さう思ふが、何かお前の身の上に非常な危険が降りかゝつて来て、そして私がそれを救ふために身體も生命も、其の他ありとあらゆるものを擲なげつて見たら何うだらう。

ノラ（身をすり抜け、確乎とした調子でいふ）さあ、あなた、其の手紙をお読みなさい。

ヘルマー いや、今夜は止さう、お前のお伽をするよ、ねえ。

ノラ 死にかゝつてる友人の事を考へながらですか？

ヘルマー それもさうだな。お蔭で二人とも飛んだ目に遭つた。私とお前の仲にまで、何だか厭いやなものが出て来て、死しぬるの亡なびるのといふことを考へさせる。何うかして此の考を打ちやる工風をしなくちやならないが、それまではまあ、別々に、居やうよ。

ノラ (夫の首に兩腕を巻いて) あなた、おやすみなさい。

ノルマー (女の額に接吻しながら) おやすみよ、家の小鳥さん。よくおやすみ。どれ行つて手紙でも讀まう。

(ヘルマーは自分の室に入り、扉をしめる)

ノラ (狂氣の如き目付で身の廻りを手探り、ヘルマーのドミノ上衣を掴んで自身に打ちかけ、早口に、しゃがれた、切れくゝの口調で囁く) もう二度とあの人には逢へない。もうくゝ、何んな事があつても (頭からシヨールを被る) 兒共にももう逢へない。もう逢へない。おゝあの黒い氷のやうな水! あの底の知れない——! あゝ、是れが濟んで了つた事だつたら何んなにか! あゝ、丁度今あの人が手紙を取つて、讀んで居る、いやくゝ、まだくゝ。おさらばですよ、あなた。——そして兒共等も達者でお出で——。

(女は廊下から走り出やうとする。其の瞬間にヘルマーが手荒く扉を明け、開いた手紙を手に持つて立ち見はれる)

ヘルマー ノラ!

ノラ (叫びながら) あゝ!

ヘルマー 是れは何だ? 此の手紙の中に書いてあることをお前は知つてるか。

ノラ はい知つて居ます。ですから、わたし、もう行きます 通して下さい。

ヘルマー (引き留めながら) 何處へ行くといふんだ?

ノラ (振り離さうとして) 私を救ふ必要はないのですよ、あなた!

ヘルマー (よろめきながら) 本當だ! この中に書いてあるのは本當かい? — いや、いや! こんなことが本當であらう筈はない。

ノラ 本當です。それと言ふのも私、あなたを愛する爲には何をしても  
いゝと思つたからです。

ヘルマー 淺薄な逃口上は止めなさい。

ノラ (二足夫の方へ進んであなた——！)

ヘルマー なさけない奴！何たる事を爲でかしたのだ！？

ノラ だから私は行かして下さいよ、——私を救ふ必要はありません。

あなたが自身で私の罪を着て下さるには及びません。

ヘルマー お芝居ぢやないよ。(扉の錠を下るすこゝに居て、すつかり自分  
のした事を話すがいゝ。お前には自分の爲た事が分かつてゐます  
か。返事をしなさい。自分のした事が分かつてゐますか。

ノラ (固くなつてじつとヘルマーを見る) はい、今始めてよく分かりかけまし  
た。

ヘルマー (あらちちと歩きながら氣がついて見れば、實に何といふ恐ろし  
い事だらう此の八年があひだ、——私の誇りにして喜んでゐた其の  
女が——偽善者、嘘つき——そればかりならいゝが、もつとなさけな  
い、なさけない、罪人なのだ——えゝ、この悪黨め、うゝ、うゝ。

(ノラは黙つてじつと男を見てゐる)

ヘルマー これ位の事があらうとは、氣がつかなくちや、ならなかつたん  
だ。すつかりお前の親父の不正直を——黙れ！お前の親父の不正  
直を受け繼いだのだ——宗教も無ければ、道徳もなく、義務といふ考  
もない。私はそんな人間を庇つた爲に、飛んでもない刑罰を受けな  
くちやならない。それも畢竟はお前の爲に行つた事だ。そしてお  
前の返禮は此の通りだ。

ノラ えゝ——此の通りです。

ヘルマー お前は私の幸福といふものを、全く打ち壊して了つた。私の将来は亡びて了つた。あゝ、考へても恐ろしい。私は悪漢の手中に陥つてゐるのだ。そいつの爲たいまゝに爲せられ、そいつの欲しいだけ貪られても、私は黙つて聽いて居なくちやならない。そして此の災難はみんなお前のお蔭なのだ。

ノラ 私が居なくなつたら、あなたの御迷惑は無くなります。

ヘルマー 甘いことを言ひなさんな。お前のお父つさんも、何時も口前がよかつた。お前は口癖のやうに居なくなる／＼と言ふが、それが私に對して何の役に立つ？ 何にもなるものぢやないよ。あいつはそんな事に頓着なく此の事件を公にするだらう。さうなると、私は共犯人と見られまいものでもない。世間では私が此の事件の底に居て、お前を教唆したのだと思ひます。そして、それがみんなお前の

お蔭なのだ。お禮を言つて置くよ——結婚して以來、たゞもう大事にして可愛がつてやつた、そのお前のお蔭なのだ。さあ、是れだけ言つたら、お前のした事が分かつたらう。

ノラ (冷靜に) はい。

ヘルマー 實に、あるまじき事だ。事實とは思へない。併し兎に角打ち合せをして、片を付けなくちやならない。その肩掛を脱いでお了ひ。脱げと言ふぢやないか先づ何うかして彼奴を宥める必要がある——何んな事をして、秘密は飽くまでも保たなくちやならない。それから私とお前とは、今まで通りにやつて行く、併しそれは勿論世間體だけの事だ。お前もやつぱり此の家に居るのは無論だが、兒共の教育はお前には任されない。こいつは何うも、お前に頼む譯に行かない——あゝ、此んな事を、あれ程愛してやつた女に言はなくちやなら

んとは、何うしたことだらう。今だつて愛してやる心は違はないのだが、併しもう駄目だ。今日からは幸福といふ問題は無くなつて了ふ。たゞもう零落して、ぼろ／＼になつた影のやうなものを維持して行くだけだ。(ベルの音がする、ヘルマー身を起こす) 何だあれは？此んなに遅く！愈やつて來たのかな、彼奴か知ら——ノラ、お前は隠れなさい。病氣だと言ふんだ。

(ノラは身動きもしないで立つて居る。ヘルマー扉の方へ行つて明ける)

エレン (着物を引つかけたまゝ、廊下で) 奥さまにお手紙が参りました。

ヘルマー 私に寄越しな。(手紙を引つかんで、扉をしめる) さうだ、あいつからだ。お前はいけませんよ。わたしが読む。

ノラ 読んで下さい。

ヘルマー (ラムプの側で) 読む勇氣も出ない。二人の身の破滅だらう、私

もお前も。いや、読む必要がある。(急いで手紙を荒く開く。二三行読んで封入してあるものを見る。喜びの叫び聲) ノラ！

(ノラは不思議さうに男を見る)

ヘルマー ノラ！何うしたんだらう！待つたよ、もう一度読んで見やう。

さうだ／＼違ひない。私は助かつたよ。ノラ、私は助かつたよ。

ノラ 私は？

ヘルマー 無論お前もだ。二人とも助かつた、二人とも。これ御覽、あの男がお前の證文を返して來た。手紙には後悔して詫をするを書いてある。是れから幸福な生涯に這入ると書いてある——まあ、あの男の事は何うでもいゝが、私達は助かつたな、ノラ。是れでもう、誰れもお前を苦しめるものは無いよ。ねえ、ノラ——だが先づ何よりも此のいやな物を七里けつばいとしやう。も一度見て——(證文をちよ



つと見て) いや、見まい、今までの事は、私に取つてはほんの夢のやうなものだ。(證文と二通の手紙とを裂いてすたくにする、そして火の中に投じて燃えるのを見つめる) さあ、無くなつちやつた。手紙によるとクリスマスの晩から——して見ると、ノラ、此の三日といふもの、お前は随分つらかつたらうな。

ノラ 此の三日のあひだ、全く死物しにものぐるひでしたのよ。

ヘルマー そして外に苦しみを逃れる道といつては無いんだから——いや、もう、あの恐ろしい事は考へまいね。私達はたゞ愉快に祝して、繰り返して置かう——もう濟んだ事だ、もう濟んだ事だ。これノラ、お前、私の言つてることが聞こえないかえ。まだ充分に事柄が分つてゐないやうだな。さうだよ、もう何も彼も濟んだよ。何うしたのだ、其のむつかしい顔付は。あゝ、分かつた、可哀さうにお前は私

だ怒つて居ると思つてゐるね。私はもう堪忍してやつたよ。誓つて許したよ。一切許してやつたのだからね。お前の爲た事はみんな私を愛する心からだ、それは私もよく知つてゐるよ。

ノラ それだけは本當です。

ヘルマー お前は妻として充分私を愛して呉れた。たゞ手段を誤まつたのだ。けれども私はそんな弱點のためにお前を疎略にするやうな男ぢやあないよ。そんな男ぢやないから、たゞ私に寄り縋つてさへ居ればいゝ。私はお前の相談相手にも案内者にもなるよ。萬一この女らしいお前の弱點が一倍あはれに見えないやうな私ならば、ほんとうの男でないさ。先つきはだしぬけで、びつくりしたものだから、非道いことも言つたが、あれを氣にかけちやいけないよ。あの時は、全く、世界が耳元で、でんぐり返るかと思つた。私はもうお前を許

したよ、ノラ、誓つて許したよ。

ノラ お許し下さつて、ありがとうございます。

(右手から出て行く)

ヘルマー あ、これ、お待ち。(覗き込んで)そつちへ行つて何をするつもり？

ノラ (内から)人形の衣裳を脱ぐのですよ。

ヘルマー (入口の所で)あ、さうお爲、少し静にして、落ちつくといふんだよ、家の小鳥さん、じつとして休むがい。私の廣い翼で覆うてゐてやるから。(扉の傍をあちこち歩きながら)あ、實に美しい——平和な家庭だな、ノラ。斯うしてゐさへすれば、お前は安全なものだ。鷹に追つかけられた鳩のやうなお前を、斯うやつて、私が救つて、庇つてゐてやる。今に其の胸の動悸も静めてやるよ、ノラ。今すぐ静めてやるよ。明日になると、何も彼もすつかり一變したやうになるよ——み

んなもと通りになつて来るよ。お前を許したといふことも、此の上私と言ふ必要もなく、お前自身で納得されるやうになります。全體、何うして私はお前を追ひ出すの、叱りつけるのと、そんな氣持になつたらう。ノラさんは生粹の男の胸中といふものを知るまい。男が自分の妻の過ちを——心の底から、眞つ正直に許したときの、其の氣持といふものは言ふに言へない美しい、穩かなものだよ。女は其の時から二重の意味で男の持ち物になる。言はゞ二度生れたやうなものだ。妻であると同時に兒共になる。お前も此の後には私に對してさういふ關係になるよ、いゝかい。もう何も氣にかけないでおいで、たゞもう其の胸を開いて、私に任せて居れば、私がお前の意志にも良心にもなつてやる。(ノラ不斷着に着かへて入り來たり、テーブルの方へ横ぎる)おや、何うしたんだ？寢間へは行かないのか。着物を着かへた

ね。

ノラ え、あなたやつと着物を着かへましたよ。

ヘルマー けれども何うしてこんなに遅く？

ノラ 今夜はわたし寝ないのです。

ヘルマー でもお前——

ノラ (懐中時計を見て) まだそんなに遅くはありません。ちよつと座つて下さいな、あなた。お互に言ひたい事が澤山あるから(テーブルの一方の椅子に腰をかける)

ヘルマー ノラ、何うした譯だ。其の冷たいむづかしい顔付で——

ノラ 座つて下さい。幾らか暇ひまが取れるでせうから。私、澤山あなたに話したい事があるのですよ。

(ヘルマーはテーブルの向ふ側に腰をおろす)

ヘルマー だしぬけに變ぢやないか。お前の言ふことは、さつぱり分らない。

ノラ 分かりますまい！ つい今夜まで——あなたには私といふものが分からないし、私には、あなたといふ者が分からなかつたのですよ。

いゝえ、邪魔をしないで居て下さい。私の言ふことを聞いててさへ下さればいゝのです。私達はいよいよ最後の極まりをつける時になりましたよ、あなた。

ヘルマー それは何ういふわけだ？

ノラ (しばらく黙つてゐた後) あなたは、斯う二人ふたり向き合つてゐて、一つ不思議な事があるとはお思ひなさらないの？

ヘルマー 何なにだらう？

ノラ 私達が結婚してから、もう八年になりますね。それに、不思議ぢや

ありませんか、あなたと私が夫婦差し向ひになつて眞面白な話をした事は、ついぞ一度もありません。

ヘルマー 眞面白な話！ふむ、何ういふ話？

ノラ 全八年もつと經つたでせう——始めて私達が近づきになつて以來——私達はたゞの一度も眞面目な事を眞面目な言葉で話し合つたことはありませんよ。

ヘルマー ぢや、お前の何うすることも出来ない心配事まで持ちかけてお前を苦しめろといふのかい？

ノラ 私、心配事を言つてるのぢやありません。私達は、何んな事だつて、ついぞ底の底まで眞面目に話し合つたことが無いといふのですよ。  
ヘルマー でもお前、眞面目な事をお前が何うすることも出来ないぢやないか。

ノラ さあ、そこですよ。あなたは少しも私といふものを理解して居らつしやらなかつたでせう？ 私は今まで大變不法な取扱を受けて居りました第一は父からですし、其の次はあなたからですよ。

ヘルマー 何をいふ？ お前のお父つさんと私から不法の取扱をされたと？——あれ程深くお前を愛してゐた私達に？

ノラ (頭を振りながら) あなたは決して私を愛して居らつしやつたのでは、ありません。愛するといふことを慰みにしてお出でなすつたのです。

ヘルマー 何うしたんだ、ノラ。何といふ言葉だ？

ノラ いゝえさうですよ、あなた。私がまだ父の家うちに居た頃は、父が色々自分の考へを話して呉れまして、私は其の通りを守つてゐました。たとひ違つた考へはあつても父が好みませんから、自然隠すやうに

なります。で父は私を人形つ子だと言ひましてね、ちやうど私が人形と遊ぶやうに、私と遊んでゐたのですよ。其うしてゐる内にあなたの家へ往居を替へたのです。

ヘルマー 結婚したものを、何といふ物の言ひやうだ——

ノラ (それに構はず) さうです、私は父の手からあなたの手に移りました。すると茲でもあなたが、何も彼も自身の好みで極めてお了ひなすつて、私はあなたと同じ好みになつて了ひました、時々はそんな風に見せかけてゐたこともありません——何ちらが本當だか分かりませんが——両方ともあつたのでせう。其の頃の事を振りかへつて見ると、私はまるで手から口へ入れる乞食のやうな生活をしてゐたと思ひます。私はあなたの前で藝當して居たのですよ、ねえ。もつとも、あなたがそれを望んでゐらつしやつたのだから。そんな風で、

あなたと父として私に害をお加へなすつたのです。私の一生が無駄に費えたのはあなたの罪ですよ。

ヘルマー 何うしたんだ、ノラ。随分不條理な恩知らずの言ひ方ぢやないか。お前は此の家へ來て幸福だつたとは思はないか。

ノラ いゝえ、ちつとも、そんなことは思ひません。始めはさう思つてゐましたけれど、間違でした。

ヘルマー 幸福でなかつたと？

ノラ え、たゞ愉快だつた丈です。あなたには何時も親切にして頂きましたけれど、家は兒共の遊び部屋でしか無かつたのですよ。其中で私はあなたの人形妻になりました。ちやうど父の家で人形子になつてゐたのと同じことです。それから兒共がまた、順に私の人形になりました。そして私が兒共と一緒に遊んでやれば、喜ぶのと同

じやうに、あなたが私と遊んで下されば面白かつたに違ひありません。それが私達の結婚だつたのですよ。

ヘルマー 誇張して言ひ過ぎた所はあるが、お前のいふことにも道理はあるしかし今日からはそれを一變させる。遊び事の時代が過ぎて、今は教育の時代が來たのだ。

ノラ 誰れの教育です？ 私のですか兒共のですか？

ヘルマー それはお前、兩方さ。

ノラ あなたの力では、私を教育してあなたに適する妻になさることは出来ません。

ヘルマー お前がそんな事を言ふのか。

ノラ それから私は——兒共を教育するに適當して居るでせうか？

ヘルマー ノラ！

ノラ あなた御自身で、つい二三分前に、兒共は私に托されないと仰つたぢやありませんか。

ヘルマー 激した機はしかについ言つたのだ。どうしてお前其んなことにこだはつてゐるのだ。

ノラ 實際私には兒共は托されません——あなたの仰おつしやる通りです。さういふ問題は私の力に及ばないのです。私にはそれより先に解釋する問題があるのですよ——私は自分を教育する工風を爲なくちやなりません。それにはあなたの助けは役に立ちませんから、私ひとりで始めます。私が是れ切り茲こゝでお暇ひまを貰ひますのは其の爲ですよ。

ヘルマー (びつくりして飛び上り) 何だと？——何ういふ意味だか——  
ノラ 自分自身や周圍の社會を知りますため、私は全くひとりになる必

要があります。ですから、此の上あなたと一緒に居ることは出来な  
いといふのです。

ヘルマー ノラ！お前！

ノラ 私は直ぐ行かうと思ひます。今夜はクリスチナさんが泊めて呉  
れませうから——

ヘルマー お前は氣が違つた。私がそれは許しません、禁じますぞ。

ノラ 今となつて何を禁じやうと仰つても、私にそんな事は無用ですよ。

それでは私、自分の所有品だけ持つて行きます。あなたからは、此の  
後も一切お世話にならない積りでゐます。

ヘルマー 狂氣の沙汰だな。

ノラ 明日私は郷へ行きます。

ヘルマー 郷へ！

ノラ 郷と言つても昔の事ですけど、何かの便宜が見つかり易からうと  
思ひますから。

ヘルマー お前のその盲目的な無經驗で——

ノラ ですからあなた、経験を積む工風をしなくてはなりません。

ヘルマー それで家も夫も兒共も振り捨てやうなんて、お前は世間の思  
はくといふものを考へない。

ノラ そんな事には構つて居られません。私はたゞ爲やうと思ふこと  
は是非爲なくちやならないと思つてる許りです。

ヘルマー 言語道斷だ。お前は全體そんな風にしてお前の一番神聖な、  
義務を棄てることが出来ますか。

ノラ 私の一番神聖な義務といふのは何でせう？

ヘルマー それを私に尋ねるのかい。夫に對し兒共に對するお前の義

務さ。

ノラ 私には同じやうに神聖な義務が外ほかにあります。

ヘルマー そんな事があり得やうか。何んな義務といふのだ。

ノラ 私自身に對する義務ですよ。

ヘルマー 何よりか第一に、お前は妻であり母である。

ノラ それは私、もう信じません。何よりも第一に、私は人間です、ちやうどあなたと同じ事です——少なくとも是れから、さうならうとして居る所です。無論世間の人は大抵あなたに同意するでせう。書物の中にも書いて居ませう。けれども是れからも、私は大抵の人の言ふことや、書物の中にあることで満足しては居られません、自身で何でも考へ究きまめて明かにして置かなくちやなりません。

ヘルマー お前は家庭に於ける自分の地位といふものを明かにしては

居ないのか。此ういふ問題に間違この無い案内者をお前は持つて居ないか。お前には宗教といふものは無いか。

ノラ それはね、あなた、私は充分に宗教が何んなものだか知らないのですよ。

ヘルマー 何だつて？

ノラ 私はあの聖體式の折に牧師から聞かされた事の外には、何も知つて居やしません。牧師は宗教といふものを斯うだの彼あだのと説明しました。私、こゝを離れて獨りになりましたら、其の事も檢しらべて見ませう。牧師の教へたことが本當か、少なくとも私に取つてそれが本當か、見て見ませう。

ヘルマー 驚き入つた話だ！が萬一宗教がお前を導くことが出来なければ、お前の良心に訴へやう——お前だつて何等かの道德心は持つ



て居やうから。それとも何かえ、お前には良心も無いのだらうか。

ノラ さうですね、それは、むつかしい問題でせう、私は實際知りません——そんな事には全く角方が立つて居ないのですよ。たゞ私、あなたのお考へなさるのと全で違つて考へてゐるといふとだけは申されま  
す。それからまた、法律だつて、私の思つてた事とは全で違ふといふ  
ぢやありませんか。そんな法律は私、正しいとは信じられません。  
女が死にかゝつてる父を痛はる権利も、夫の命を救ふ権利もないと  
いふのですから、信じられませんわ。

ヘルマー お前の言ふ事は、兒共のやうだ。お前は自身の住んでる社會  
を理解し無い。

ノラ はあ、理解して居ません。是れから骨折つて見ます。社會と私と  
——何ちらが正しいか決めなくてはなりませんから。

ヘルマー ノラ、お前は病氣になつたのだ、熱病に罹つたのだ。殆ど本心  
を失つて居はしないかと思はれるよ。

ノラ 今までに今夜ほど氣分のはつきりしてゐることはありません。

ヘルマー それほど、はつきりした考で、夫や兒共を棄てるといふのかい。

ノラ さうですよ。

ヘルマー では、もう説明の途はたゞ一つしか残つて居ない。

ノラ 何ういふのですか？

ヘルマー お前はもう私を愛しない。

ノラ 愛しません、それが肝要の點です。

ヘルマー ノラ！お前、さう言ひ得るか。

ノラ あなた、お氣の毒です、何時も親切にして下さつて。けれども何う  
することも出来ません。もうあなたを愛して居ないのですから。

ヘルマー (辛うじて氣を取り直しながら) 其の點も、はつきりと考へたのかい?

ノラ え、確かに。もう此の家に居まいといふのも、其の爲です。

ヘルマー では序でに、何うして私がお前の愛を失つたか、聞かせて呉れまいか。

ノラ はあ、聞かせませう。それは奇蹟の見はれなかつた今夜の事です。其の時始めて私は、あなたが、思つて居たとは違つた人だと氣がつきました。

ヘルマー もつと明白に説明して呉れ、私には分からない。

ノラ 私ね此の八年のあひだ、じつと辛抱して待つてゐたことがあるのですよ。それは勿論、そんな奇蹟が不斷に見はれるものでないのは、知れて居たからです。所へ今夜の大きさはぎが起こつて、私を嚇した

ものですから、其のとき私は、固い信仰で以て、「さあ愈奇蹟が見はれて来る」と自分にさう言ひました。クログスタッドの手紙がまだ郵便箱にあつた時は、私は、あなたがよもや彼奴の申し出したにへこたれるやうな考をお起こしなさうとは思はなかつたのですよ。あなたは彼奴に對して「其の事を世間残らず公にしろ」と仰るだらうと信じて居ました。そして――

ヘルマー けれども、さうして自分の妻の名を耻辱や不名譽の中に曝すといふことは――

ノラ そして、あなたが進み出て何も彼も身に引受けて「罪人は私だ」と仰るだらうと信じてゐました。

ヘルマー ノラ!

ノラ あなたは、私が、そんな犠牲は決して受けなかつたらうと仰るでせ

う？勿論それは受けませんとも。けれども私がさう言つたからといつて、あなたの決心が固ければ、それに反對して何うすることも出来ません。それです、私が見たくもあり、恐ろしくもあつた奇蹟といふのは。そして、それを防ぎ止めるためには、私死なうと覺悟してゐたのです。

ヘルマー ノラ、お前の爲なら、私は晝夜でも喜んで働く——不幸も貧乏もお前の爲なら我慢する——けれども、幾ら愛する者の爲だつて、男が名譽を犠牲には供しない。

ノラ それを、何百萬といふ女は、犠牲に供して居ます。

ヘルマー あゝ、お前の考へることや言ふことは、駄々つ子のやうだ。

ノラ さうかも知れません。けれど、あなたの考へてゐらしやることや、言つてゐらつしやることも、私が生涯を共にすることの出来る人のや

うぢやありません。恐ろしい騒ぎが通り越して了つて——私にでなく、あなた御自身に——もう大丈夫となると——あなたはけそけそとして、何處を風が吹いたかといふ風にして入らつしやる。私はまた元の雲雀や人形になつて了ふ——弱い脆い人形だといふので、是れからは前よりも一倍痛はつてやらうと仰る。(立上り)あなた、其の時に私は眼が覺めました、此の八年といふもの、私は見ず知らずの他人と斯うやつて住んで居て、そして其人に三人の子まで生じた。あゝ、其の事を考へると私はたまらなくなつて——自分の身を引き裂きたいやうに思ひます。

ヘルマー (悲しげに) 分かつた。私達の間には深い淵が出来たのだ。けれどもノラ、其の淵は何うかして埋まらないものだらうか？

ノラ 私の今の身では、あなたの妻になれるものぢやありません。

ヘルマー 私は一變した人に成る力を持つてゐる。

ノラ さうかも知れませんが——人形とお分かれなすつたらね。

ヘルマー 分かれる——お前と分かれる！いけない、ノラ、いけない。私は、さういふ事は考へられない。

ノラ (右手の室に入りながら) 仕方がありません、理由があれば何んな事でも起こつて來ます。

(ノラ外出仕度のもので小さい旅行鞆とを持って出て來、それ等を椅子の上に置く。)

ヘルマー ノラ、ノラ、今でなく、明日まで待つて呉れ。

ノラ (外套を着ながら) 見ず知らずの他人の家に泊れはしません。

ヘルマー けれども兄と妹のつもりで住まつては行けなからうか？

ノラ (帽子を冠りながら) そんな事が長續きするものでないのは分つて居

ませう？あなた左様なら。いゝえ、兄共の方へは行きませぬ。彼れ等は私が世話をするよりも却つてよく世話して貰つて居ます。

今の私の身では、あれ等に何の役にも立ちませぬ。

ヘルマー 併し何時かは、ノラ、何時かは——

ノラ そんな事が何うして分かりませう。私は、自分が是れから何うなることやら、少しも考へては居ませぬ。

ヘルマー けれども、お前は何時までも私の妻だ。

ノラ あなた聞いて置いて下さい——今私が出て行くやうに、妻が夫の家を去れば、法律の上から、夫は妻に對して、義務といふものが全くなくなるさうですね。兎に角私は、あなたの義務をすつかり無くして、了ひますから、私が自由なのと同じに、あなたも自由にして下さい。双方とも少しも制限を置かないことにしませう。はい、これがあな

たの指輪です。私のを下さい。

ヘルマー それまでもかい？

ノラ それもですよ。

ヘルマー さあ、是れ。

ノラ はい、それで、すっかり済みました。鍵は茲にありますよ。女中が凡ての事は知つてゐます、私よりも精しく知つて居ます。明日私が立ちましてから、クリスチナさんが来て私の荷物を荷造りして呉れませう、跡から送つて貰ふことにして置きます。

ヘルマー あゝもう駄目だ！もう駄目だ！ノラ、お前はもう何んな事があつても、二度と私の事は考へて呉れなからうか。

ノラ それは、あなたの事も兒共の事も此の家の事も度々考へるでせうよ。

ヘルマー 手紙をやつてもいゝか。

ノラ いけません、決してなりません。

ヘルマー けれどもお前に送らなくちやならないものが――

ノラ 何にもいけません、何にもいけません。

ヘルマー 若し必要な場合には助けなくちやならないから。

ノラ 可けませんね。見ず知らずの他人からは何んなものだつて貰ひません。

ヘルマー 私はもう、何うあつても、お前には、見ず知らずの他人とより以上の事は出来ないか。

ノラ (旅行鞆を取りながら) それは、あなた、そんな事の出来る時には、本當の奇蹟が見はれなくちやなりません。

ヘルマー 本當の奇蹟とは？

ノラ 私達が二人ともすつかり變つて——あゝもう、私、奇蹟なんか信じない。

ヘルマー けれども私は信ずるよ。私達がすつかり變つて——

ノラ 二人の仲が本當の結婚にならなくてはなりません。左様なら。

(ノラ出て行く)

ヘルマー (顔を両手に埋めて扉の傍の椅子に沈む) ノラ！ノラ！(見廻はして立

ち上る) 誰も居ない。行つて了つた(一の希望が吹き込まれて来る)あゝ！

奇蹟、奇蹟——?! (下から重い戸を閉ぢる響が聞こえる)

(幕)

集 作 傑 ン セ プ イ  
二 第

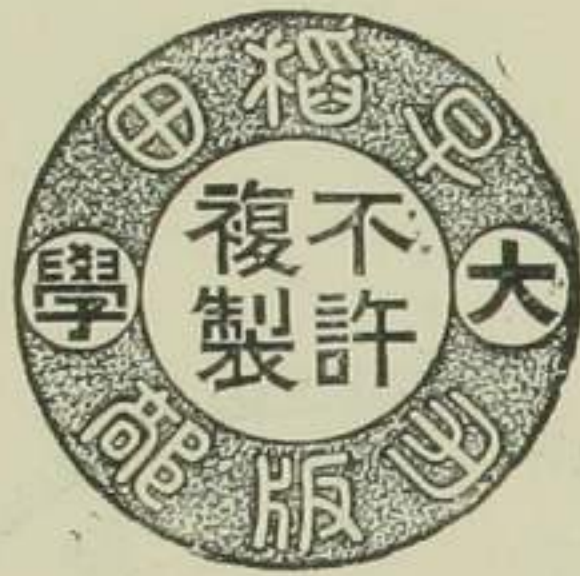
人 夫 の 海

譯 月 抱 村 島  
刊 近

19215

大正二年四月二十五日印刷  
大正二年四月二十八日發行

(正價金九拾錢)



譯者 島村瀧太郎

發行者 荒川信賢

東京市小石川區音羽町四丁目十一番地  
印刷者 渡邊八太郎  
東京市牛込區榎町七番地

發行所

東京牛込  
早稻田

早稻田大學出版部

振替東京一二二三番電話番町三四二四番

日清印刷株式會社印刷





